平成 27 年度

国分寺市埋蔵文化財調査概報

平成 29 年 3 月

国分寺市遺跡調査会

平成 27 年度

国分寺市埋蔵文化財調査概報

平成 29 年 3 月

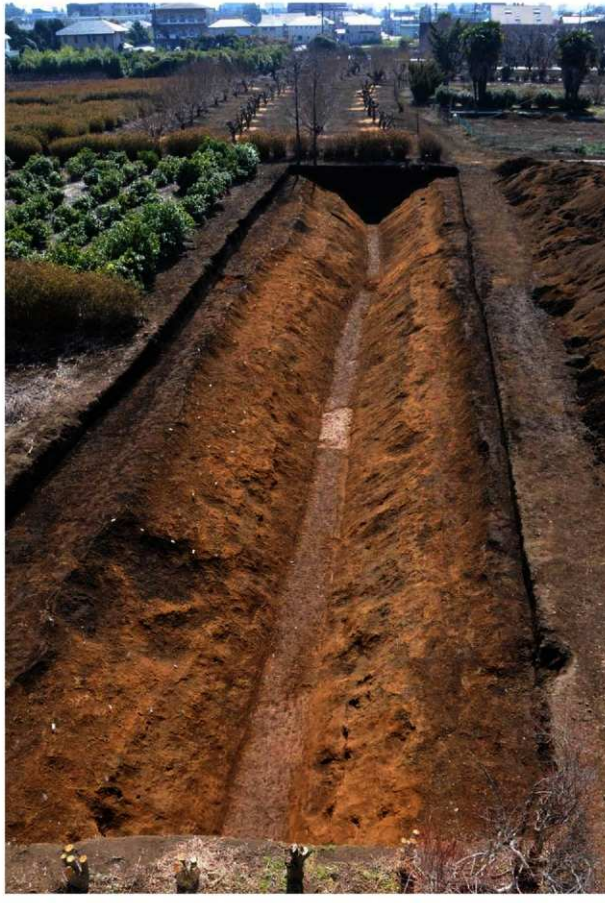
国分寺市遺跡調査会

表紙写真

右上：武蔵国分寺跡第 714 次調査　SD435 完掘全景（北から）

右下：武蔵国分寺跡第 706 次調査　SI822・823 完掘全景（南から）

左　：羽根沢遺跡第７次調査出土　打製石斧



武蔵国分寺跡第 714 次調査　SD435 全景（北から）

武蔵国分寺跡第 706 次調査　SI825・SX359 全景（北から）

武蔵国分寺跡第 706 次調査出土　温石（上）・　青磁碗（下）

序

国分寺市遺跡調査会が発足したのは43年以前（昭和49年）のことであった。その頃、国史跡・武蔵国分寺跡に開発の波が押し寄せ、史跡地内に住宅が建設され、加えて史跡指定隣接地に大規模な建設が計画されるなど、市名由来の武蔵国分寺跡（僧寺・尼寺）は史跡保存の危機に直面していた。史跡を調査し保存の先頭に立つ文化財専門職員の配置はなく、東京都教育庁の指示もあって調査組織が急遽組織された。その組織が市遺跡調査会（当初は武蔵国分寺跡と恋ヶ窪遺跡に分かれていた）であり、その活動は有効であった。調査会は、市教育委員会の指導のもと、武蔵国分寺跡などの調査を分担することになり、以降、現在まで継続されている。

その後、市に埋蔵文化財担当の専門職員が配置され、その指導下で市内遺跡の行政調査が実施され、調査会が有用に活用されて埋蔵文化財の保存も順調に進んでいる。

平成27年度の市内遺跡の調査は、従前通り対応が果された。武蔵国分二寺跡の大部分は史跡の保存と活用を目差して進行中であるが、それ以外にも市内で大小の埋蔵文化財包蔵地の開発が継起している。西元町３、東元町１、東恋ヶ窪１の計４地点であった。それらの調査結果についての報告が本冊である。とくに、東元町においては中世の後半に掘削されたと考えられる大溝が発掘された。従来、市の中世については、不分明であり、この度の発見はきわめて注目される遺構であった。

武蔵国分二寺跡・東山道武蔵路跡は国の史跡として保存され活用されているが、一方、埋れた遺跡も決して少なくない。今後とも市の歴史の解明と市民各位に向けての歴史事実の具体的提供を心掛けていくのが市遺跡調査会の任務と考え、関係者一同、尽力を重ねていきたいと思う。ご理解とご協力を願って止まない。

平成29年３月

国分寺市遺跡調査会
会　長　坂誥　秀一

例　言

1．本書は、東京都国分寺市において、平成27年度に国分寺市遺跡調査会が各事業者から委託を受けて実施した埋蔵文化財調査５件について報告するものである。

2．調査対象となった遺跡は武蔵国分寺跡（遺跡№10・19）が４件、羽根沢遺跡（遺跡№５）が１件で、全て本発掘調査として実施した。

3．現地調査から出土品等整理・報告書作成のための基礎作業にかかる経費は、各事業者が負担した。

4．報告書の編集・印刷にかかる費用は国分寺市が負担した。

5．発掘調査は、国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課　史跡係長 依田亮一、同係 増井有真、島田智博が担当した。

6．本書の編集は、坂詰秀一調査団長の指導のもとで増井有真が行った。執筆分担は次の通りである。

増井有真　第１章、 第２章第１～４節、第３章、歴史時代（奈良・平安時代）遺物観察表

依田亮一　第２章第５節、歴史時代（中近世）遺物観察表

なお、第２章第１～３節の縄文時代の土器・石器の実測・遺物撮影・遺物観察表の作成は、株式会社共和開発に委託した。

また、第２章第５節の縄文土器・石器については、府中市文化スポーツ部ふるさと文化財課の中山真治氏、国分寺市教育委員会図書館課の上敷領 久氏より指導・助言をいただいた。

7．発掘調査における測量は、システムプログラム「リプログラフ」(株式会社こうそく)、本書の挿図・表等の作成にはMicrosoft®Word®・Excel®、Adobe®Illustrator®・Photoshop®・Indesign®の各ソフトを用いた。

8．個々の調査地区概要の中に記している「遺物箱数」は、現場作業終了時点で確認した出土遺物量で、単位（箱）はコンテナ（34 × 54 × 20 cm）の箱数を示す。

9．調査における図面は、全体図１/100・遺構平面図１/20・断面図１/20で記録している。

10．遺物や各種図面・写真類は、一括して国分寺市教育委員会で保管している。

11．発掘調査および遺物・資料整理作業、報告書作成業務に従事した者は下記の通りである。

岩田尋謂　大羽正子　小野祐子　桂　弘美　小池和彦　佐藤　令　相馬しのぶ

冨澤　好　平塚恵介　藤崎　努　矢内雅之　吉田さおり　（国分寺市遺跡調査会）

青山達夫　高橋より子　山口啓子　（国分寺市シルバー人材センター）

梅山伸二　上村雄三　佐々木義身　（国分寺市ふるさと文化財愛護ボランティア）

江口真裕　酒井真之　佐野　厚　清水広幸　田中　類　中山弘人　西野　宏　野上亨介

村野正広　室賀明子　（株式会社共和開発［支援業務］）

12．発掘調査・出土品等整理作業・報告書作成作業では、下記の諸氏・関係機関から御指導・御協力を賜りました。記して感謝申し上げます（順不同・敬称略）。

上敷領　久　黒尾和久　合田恵美子　佐藤幸彦　渋江芳浩　中山真治　深澤靖幸

株式会社日立製作所中央研究所　株式会社リノベイト　三井不動産レジデンシャル株式会社　明和地所株式会社　文化庁文化財部記念物課　東京都教育庁地域教育支援部管理課　国分寺市文化財保護審議会　国分寺市史跡武蔵国分寺跡保存整備委員会　国分寺市遺跡調査会武蔵国分寺跡調査・研究指導委員会

凡　例

①　国分寺市の基本土層について

国分寺市域で用いる層位区分は、表土（Ⅰ層）下の黒褐色土を黒色味が強い上層（Ⅱ層）と、ローム層への漸移層である下層（Ⅲ層）に細分している。そのため、黒色土をⅡ層、Ⅲ層以下をローム層にあてる、一般的な武蔵野台地上の遺跡における層序区分とは呼称が若干異なっている。本書で報告する調査対象地は、武蔵野段丘面と立川段丘面とに存在するが、堆積土層は下記のとおりほぼ共通した層序区分を示す。

Ⅰ　層　　表土。近～現代の盛土、および耕作土。層厚約 30 ～ 50 cm。

Ⅱ　層　　黒褐色土。粒子が粗い。締まりはやや弱い。粘性は弱い。古代～中世の遺物を包含し、古代の遺構覆土に似る。層厚約 10 ～ 15 cmだが、市内では削平されていることが多い。

Ⅲ a 層　　黒褐色土。粒子はやや粗い。粘性はやや弱い。層厚約 10 ～ 15 cm。同層上面が本来的な古代の遺構確認面であるが、Ⅱ層と類似した土質であることから、この下層において遺構を限覚的に検出することが多い。

Ⅲ b 層　　暗褐色土。Ⅲ a 層より明るく、褐色味が強くなる。軟質で粘性はやや弱いが、Ⅲ c 層に近づくに連れて粘性が強くなる。縄文時代中期の遺物を包含する。層厚約 30 ～ 40 cm。

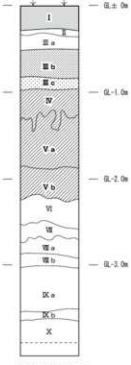
Ⅲ c 層　　茶褐色土・暗黄褐色土。縄文時代早～前期の遺物を包含する。ローム層への漸移層で、赤色スコリアを多量に含む。層厚約 10 ～ 15 cm。

Ⅳ　層　　黄褐色土。ソフトローム。Ⅴ層との境は凹凸が激しい。層厚約 15 ～ 25 cm。

Ⅴ a 層　　黄褐色土。ハードローム。色調によってａ・ｂの２層に分けられる。下層にいくに従い黄色味が薄くなり灰褐色味を帯びてくる。その色調は漸移的に変化する。赤色・黒色スコリアを多量に含む。部分的にⅤｂ層と中間の色調を有する部分がある。

Ⅴ b 層　　暗灰褐色土。ハードローム。色調はⅤａとⅥ層の中間。

Ⅵ　層　　暗褐色土。立川ローム第一黒色帯。スコリアは細かく、全体に粒子緻密。やや粘性を増す。



国分寺市内の
平均的な層序

Ⅶ　層　　黄褐色土。黄色味が強く、明るい。Ⅷ層へは漸移的に移行し、境界はやや不明瞭。削るとジャリジャリする（ＡＴ層）。

Ⅷ a 層　　褐色土。立川ローム第二黒色帯。Ⅶ層下部に似て、やや暗くなり始めるところから本層とし、削るとジャリジャリする。黒色・赤色スコリアを含む。

Ⅷ b 層　　暗褐色土。立川ローム第二黒色帯。Ⅷａよりさらに色調が暗くなる。粒子が細かく、緻密で粘性がある。黒色・赤色・青色・白色スコリアを多く含む。

Ⅸ a 層　　暗褐色土。立川ローム第二黒色帯。Ⅷｂよりさらに黒色味増す。粒子は細かく、緻密で粘性が強くなる。

Ⅸ b 層　　暗褐色土。立川ローム第二黒色帯。成分はⅨａ層と同じで、粒子は細かく、緻密で粘性が強い。下部の５～10 cmはⅩ層の影響からⅨａ層より明るい部分もある。

Ⅹ　層　　黄褐色土。粒子極めて細かく、緻密で粘性のあるローム土。

②　調査地区の位置について（グリッド）

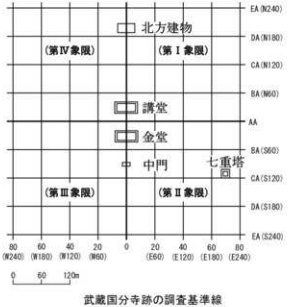
国分寺市では、№10・19 遺跡である武蔵国分寺跡（僧尼寺）の広大な範囲を統一して調査するため、局地座標系を用いている。

座標原点は僧寺伽藍中軸線を基準に、金堂中心の北 26, 276 m の中軸線上の点（コンクリート埋設）である。僧寺中軸線は、真北から７°　07′　01″、磁北から０°　37′　01″それぞれ西偏する。この座標原点を中心に象限をⅠ～Ⅳに大別し、

中心点からの距離をN・S・E・Wで表す。さらに、本文中および図面のグリッド表示の数字は、南と西に接する基準線に与えた記号の組み合わせにより呼称する。東西基準線はアルファベット２文字で表す。１文字目は原点をAとし、60ｍごとにB・C・D…とふり、２文字目はその内を３ｍごとに20区に分けA～Tとふっている。南北基準線は数字で表し、原点を０として以下東西ともに３ｍごとに１・２・３…とふった。

なお、遺跡記号はMK（武蔵国分寺の略）にⅠ～Ⅳの各象限を続けたものに,調査次数を付して表示している。

上記以外の市内遺跡の座標は世界測地系の第９系を用いている。ただし、その基準点は平成23年３月11日の東北地方太平洋沖地震の影響を受けて変動しているが、従来の測量成果簿を使用している。



武蔵国分寺跡の調査基準線

③ 遺跡名について

遺跡名については、№10・19遺跡以外の調査については、K（国分寺の略）に遺跡番号を続けたものに次数を付して表示している。

④ 遺構図面について

調査地点位置図・遺構図面は、図面上が座標北を示す。特記のない限り調査地点位置図は縮尺を１/2,500、土層断面図および柱状図の縮尺は１/40に統一し、スケールバーで示している。

⑤ 遺構番号について

遺構は遺跡ごとにほぼ発見順に連続番号を付し、下記の遺構記号を冠して表示している。また、縄文時代の遺構は遺構番号末尾にＪを付し、Ｐは遺構記号の後ろにＪを付して歴史時代の遺構と区別している。

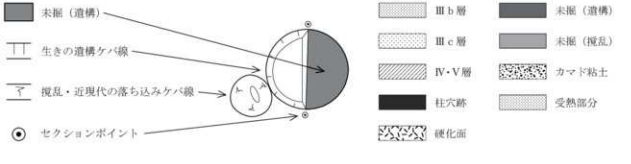
SI：竪穴住居　SD：溝　SK：土坑　SF：道路　SX：性格不明遺構　P：小穴

⑥ 遺構写真について

各写真キャプションに併記する（方位）は撮影した方向を示す。真上から撮影した場合は上下左右と方向を用いて方角を示している。

⑦ 全体図・遺構図の表現方法について

図中の記号・ライン、スクリーントーンについては次の通りで、これ以外に使用しているトーンは個々の図で示している。なお、図の一部ではスクリーントーンを使用していないものもある。



⑧ 遺物番号について

遺物は、各調査において種別毎に連続番号を付し、下記の遺物記号を冠して表示する。

【歴史時代】土 器 類　PH：土師器　PK：須恵器　PL：土師質土器　PN：灰釉陶器　PP：緑釉陶器
PT：中近世陶器
瓦 塼 類　KB：宇瓦　KC：男瓦　KD：女瓦　KH：塼
陶　硯　CA：円面硯
金属製品　MY：鉄滓
石 製 品　GO：温石
【縄文時代】土 器 類　JE：中期前半　JF：中期後半　JJ：時期不明
石 器 類　AA：尖頭器　AB：石鏃　AN：スタンプ形石器　AG：打製石斧

⑨ 遺物の表現方法について

遺物のスクリーントーンの指示は次のとおりである。

灰釉陶器（施釉部分）　灰釉陶器（断面）　緑釉陶器（断面）

鉄釉系（施釉部分）

⑩ 遺物の縮尺について

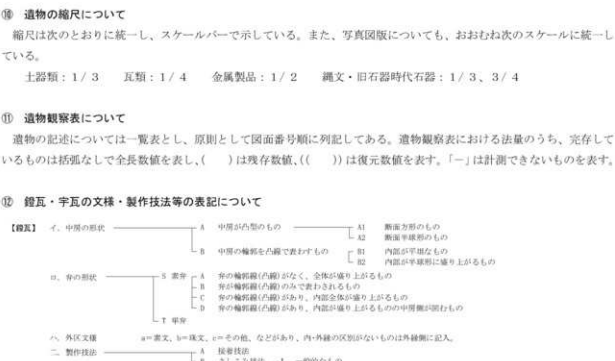
縮尺は次のとおりに統一し、スケールバーで示している。また、写真図版についても、おおむね次のスケールに統一している。

土器類：1／3　瓦類：1／4　金属製品：1／2　縄文・旧石器時代石器：1／3、3／4

⑪ 遺物観察表について

遺物の記述については一覧表とし、原則として図面番号順に列記してある。遺物観察表における法量のうち、完存しているものは括弧なしで全長数値を表し、(　　)は残存数値、((　　))は復元数値を表す。「－」は計測できないものを表す。

⑫ 鐙瓦・宇瓦の文様・製作技法等の表記について



国分寺市遺跡調査会構成員名簿

平成29年2月1日現在

役員および監事

会　長	坂誥 秀一	国分寺市文化財保護審議会会長
副会長	星野 亮雅	国分寺市文化財保護審議会副会長
理　事	井澤 邦夫	国分寺市長
理　事	富山 謙一	国分寺市教育委員会委員長
理　事	松井 敏夫	国分寺市教育委員会教育長
理　事	北原　進	国分寺市文化財保護審議会委員
理　事	遠藤 慈郎	国分寺市文化財保護審議会委員
理　事	福嶋　司	国分寺市文化財保護審議会委員
理　事	清水　宏	東京都教育庁地域教育支援部管理課長
専務理事	本橋 信行	国分寺市教育委員会教育部長
監　事	峯岸 桂一	元国分寺市職員
監　事	伊藤 敏行	東京都教育庁地域教育支援部管理課統括課長代理

武蔵国分寺跡調査・研究指導委員会

委員長	坂誥 秀一	(考 古 学)	立正大学名誉教授
委　員	藤井 恵介	(建 築 史)	東京大学大学院工学系研究科教授
委　員	佐藤　信	(古 代 史)	東京大学大学院人文社会系研究科教授
委　員	酒井 清治	(考 古 学)	駒澤大学文学部教授
委　員	松井 敏也	(保存科学)	筑波大学人間総合科学研究科准教授

事務局

事務局長	高杉　強	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課長
事務局員	松本　徹	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課文化財保護係長
事務局員	中道　誠	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課文化財保護係
事務局員	吉田 澄音	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課文化財保護係嘱託
事務局員	熊木 正好	国分寺市遺跡調査会

調査団

団　長	坂誥 秀一	立正大学名誉教授
主任調査員	依田 亮一	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係長
調 査 員	増井 有真	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係
調 査 員	中元 幸二	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係嘱託
調 査 員	島田 智博	国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課史跡係嘱託

本　文　目　次

巻頭図版
序 …… 5
例言 …… 6
凡例 …… 7
国分寺市遺跡調査会構成員名簿 …… 10
本文目次・挿図目次・表目次

第１章　遺跡の概要 …… 15

第２章　調査の概要 …… 20
第１節　武蔵国分寺跡第 706 次調査 …… 20
１．調査に至る経緯と経過 …… 20
２．検出された遺構と出土遺物 …… 22
３．小　結 …… 24
第２節　武蔵国分寺跡第 707 次調査 …… 61
１．調査に至る経緯と経過 …… 61
２．検出された遺構と出土遺物 …… 62
３．小　結 …… 63
第３節　武蔵国分寺跡第 709 次調査 …… 80
１．調査に至る経緯と経過 …… 80
２．検出された遺構と出土遺物 …… 80
３．小　結 …… 81
第４節　武蔵国分寺跡第 714 次調査 …… 89
１．調査に至る経緯と経過 …… 89
２．検出された遺構と出土遺物 …… 90
３．小　結 …… 91
第５節　羽根沢遺跡第７次調査 …… 111
１．調査に至る経緯と経過 …… 111
２．検出された遺構と出土遺物 …… 112

第３章　総　括 …… 122

報告書抄録 …… 125
奥付

挿 図 目 次

第 1 図　武蔵国分寺跡の位置
第 2 図　武蔵国分寺跡伽藍配置模式図
第 3 図　武蔵国分寺跡・羽根沢遺跡周辺の地形概略図
第 4 図　国分寺市の地形模式図
第 5 図　国分寺崖線と湧水
第 6 図　調査地点位置図
第 7 図　MKⅢ－706　調査地位置図
第 8 図　MKⅢ－706　調査区全体図
第 9 図　MKⅢ－706 周辺の既往調査遺構配置図
第 10 図　武蔵国分寺跡第 49 次調査出土の青磁碗
第 11 図　周辺の主な調査地点
第 12 図　MKⅢ－706　Aトレンチ　西壁土層断面図
第 13 図　Aトレンチ　全景（北から）
第 14 図　Aトレンチ　西壁土層断面〔東から）
第 15 図　MKⅢ－706　Gトレンチ　西壁土層断面図
第 16 図　Gトレンチ　全景（北から）
第 17 図　Gトレンチ　西壁土層南側断面（東から）
第 18 図　MKⅢ－706　Bトレンチ　完掘平面図
第 19 図　MKⅢ－706　Bトレンチ　南壁土層断面図
第 20 図　MKⅢ－706　Cトレンチ　完掘平面図
第 21 図　硬化面形成時平面図
第 22 図　MKⅢ－706　Cトレンチ　西壁土層断面図
第 23 図　MKⅢ－706　Dトレンチ　平面図
第 24 図　SD432　完掘平面図（北側）
第 25 図　MKⅢ－706　Dトレンチ　土層断面図
第 26 図　MKⅢ－706　Eトレンチ　完掘平面図
第 27 図　MKⅢ－706　Eトレンチ　土層断面図
第 28 図　MKⅢ－706　S1822・823　完掘平面図
第 29 図　S1822 カマド　平面・断面図
第 30 図　S1822　P-1, 2　S1823 周溝　土層断面図
第 31 図　S1825　構築時　完掘平面図
第 32 図　S1825 カマドB　平面図
第 33 図　S1825 使用時、及び SX359 完掘平面図
第 34 図　S1825 カマドA　平面図
第 35 図　S1825 カマドA・B　断面図
第 36 図　S1825 カマドA土層断面（西から）
第 37 図　S1825 カマドB土層断面（南から）
第 38 図　S1825 内 Pit 土層断面図
第 39 図　S1825・SX359　土層断面図
第 40 図　Bトレンチ　SD430 全景（南から）
第 41 図　Bトレンチ　SD433 全景（北から）
第 42 図　Bトレンチ　SD430 断面（北から）
第 43 図　Bトレンチ　SD433 断面（南から）
第 44 図　Bトレンチ　S1824 検出状況（北から）
第 45 図　Bトレンチ　SX360 断面・遺物出土状況（北から）
第 46 図　Cトレンチ　全景（北から）
第 47 図　Cトレンチ　SD434 検出状況（南から）
第 48 図　Cトレンチ　波板状圧痕プラン検出状況（北から）
第 49 図　Cトレンチ　硬化面検出状況（南から）
第 50 図　Cトレンチ　波板状の掘り込み完掘状況（北から）
第 51 図　Cトレンチ　西壁土層断面（東から）
第 52 図　Dトレンチ　全景（北から）
第 53 図　Dトレンチ　SD432 断面（南から）
第 54 図　Dトレンチ　SD432 北側全景（上が南）
第 55 図　Dトレンチ　SD432 中央全景（西から）
第 56 図　Dトレンチ　南壁土層・SD432 断面（北から）
第 57 図　Eトレンチ　全景（東から）
第 58 図　Eトレンチ　SD431 断面（北から）
第 59 図　Eトレンチ　SX362 検出状況（東から）
第 60 図　Eトレンチ　SX362 断面（北から）
第 61 図　Fトレンチ南　遺構検出状況（東から）
第 62 図　Fトレンチ南　S1822・823 周溝（北から）
第 63 図　Fトレンチ南　S1822・823 完掘全景（南から）
第 64 図　Fトレンチ南　S1822 カマド構築時（西から）
第 65 図　Fトレンチ南　南壁土層断面図（北から）
第 66 図　Fトレンチ南　S1822　P-2 断面（西から）
第 67 図　Fトレンチ北　S1825 覆土断面（南から）
第 68 図　Fトレンチ北　S1825 覆土断面（西から）
第 69 図　Fトレンチ南　S1825 カマドA使用時（上が西）
第 70 図　Fトレンチ南　S1825 カマドBおよび周辺の焼土検出状況（上が東）
第 71 図　Fトレンチ　S1825 使用時全景（北から）
第 72 図　Fトレンチ　S1825・SX359 構築時全景（北から）
第 73 図　S1825　P-1 断面（南から）
第 74 図　S1825　P-2 断面（北から）
第 75 図　S1825　P-3 断面（南から）
第 76 図　S1825　P-4 断面（北から）
第 77 図　S1825　P-5 断面（南から）
第 78 図　S1825　P-6 断面（東から）
第 79 図　MKⅢ－706　出土遺物実測図（歴史時代）1
第 80 図　MKⅢ－706　出土遺物写真（歴史時代）1
第 81 図　MKⅢ－706　出土遺物実測図（歴史時代）2
第 82 図　MKⅢ－706　出土遺物写真（歴史時代）2
第 83 図　MKⅢ－706　出土遺物実測図（歴史時代）3
第 84 図　MKⅢ－706　出土遺物写真（歴史時代）3
第 85 図　MKⅢ－706　出土遺物文字記号集成写真

第 86 図　MKⅢ－706　出土遺物実測図（歴史時代）4
第 87 図　MKⅢ－706　出土遺物写真（歴史時代）4
第 88 図　MKⅢ－706　出土遺物実測図（歴史時代）5
第 89 図　MKⅢ－706　出土遺物写真（歴史時代）5
第 90 図　MKⅢ－706　出土遺物実測図（歴史時代）6
第 91 図　MKⅢ－706　出土遺物写真（歴史時代）6
第 92 図　MKⅢ－706　出土遺物実測図（歴史時代）7
第 93 図　MKⅢ－706　出土遺物写真（歴史時代）7
第 94 図　MKⅢ－706　出土遺物実測図（歴史時代）8
第 95 図　MKⅢ－706　出土遺物実測図（縄文時代）
第 96 図　MKⅢ－706　出土遺物写真（歴史時代）8
第 97 図　MKⅢ－706　出土遺物写真（縄文時代）
第 98 図　MKⅣ－707　調査地位置図
第 99 図　MKⅣ－707　調査区全体図（歴史時代）
第 100 図　MKⅣ－707　歴史時代遺構平面図
第 101 図　MKⅣ－707　歴史時代遺構断面図
第 102 図　MKⅣ－707　調査区全体図（旧石器・縄文時代）
第 103 図　MKⅣ－707　土層柱状図
第 104 図　MKⅣ－707　縄文時代遺構平面図 1
第 105 図　MKⅣ－707　縄文時代遺構平面図 2
第 106 図　MKⅣ－707　縄文時代遺構断面図 1
第 107 図　MKⅣ－707　縄文時代遺構断面図 2
第 108 図　第 1 期調査区全景　歴史時代（北から）
第 109 図　第 2 期調査区全景　歴史時代（南から）
第 110 図　第 3 期調査区全景　歴史時代（西から）
第 111 図　第 2 期表土掘削状況（南から）
第 112 図　SK3453 断面（南から）
第 113 図　SK3453 完掘状況（南から）
第 114 図　P-1 断面（南から）
第 115 図　P-2 断面（南から）
第 116 図　P-3 断面（南から）
第 117 図　P-1 完掘状況（南から）
第 118 図　P-2 完掘状況（北から）
第 119 図　P-3 完掘状況（北から）
第 120 図　地下防空壕全景（西から）
第 121 図　地下防空壕天井部掘削（西から）
第 122 図　地下防空壕内部（北から）
第 123 図　地下防空壕内部（南から）
第 124 図　第 1 期調査区北側全景　縄文時代（北から）
第 125 図　第 1 期調査区南側全景　縄文時代（南から）
第 126 図　第 2 期調査区北側全景　縄文時代（西から）
第 127 図　第 2 期調査区南側全景　縄文時代（南から）
第 128 図　第 3 期調査区全景　縄文時代（西から）
第 129 図　第 1 期調査風景（南から）
第 130 図　PJ-1 断面（南から）
第 131 図　PJ-2 断面（南から）
第 132 図　PJ-3 断面（東から）
第 133 図　PJ-4 断面（東から）
第 134 図　PJ-5 断面（東から）
第 135 図　PJ-6 断面（西から）
第 136 図　PJ-7 断面（東から）
第 137 図　PJ-8 断面（東から）
第 138 図　PJ-9 断面（東から）
第 139 図　SK3451J 断面（北から）
第 140 図　SK3452J 断面（東から）
第 141 図　SK3451J 完掘状況（北から）
第 142 図　SK3452J 完掘状況（東から）
第 143 図　SK3456J 断面（北から）
第 144 図　SK3456J 完掘状況（北から）
第 145 図　プレ坑 1 全景　旧石器時代（西から）
第 146 図　プレ坑 2 全景　旧石器時代（南から）
第 147 図　プレ坑 3 西壁土層堆積状況（東から）
第 148 図　プレ坑 4 東壁土層堆積状況（西から）
第 149 図　プレ坑 5 西壁土層堆積状況（東から）
第 150 図　プレ坑調査風景（東から）
第 151 図　MKⅣ－707　出土遺物実測図（歴史時代）
第 152 図　MKⅣ－707　出土遺物写真（歴史時代）
第 153 図　MKⅣ－707　出土遺物実測図（縄文時代）
第 154 図　MKⅣ－707　出土遺物写真（縄文時代）
第 155 図　MKⅣ－707　地下防空壕平面・エレベーション図
第 156 図　MKⅣ－707　地下防空壕出土遺物写真
第 157 図　地下防空壕床面（北から）
第 158 図　地下防空壕東壁（西から）
第 159 図　MKⅠ－709　調査地位置図
第 160 図　MKⅠ－709　調査区全体図
第 161 図　既往調査区・MKⅠ－709 次調査区　合わせ図
第 162 図　MKⅠ－709　完掘平面図
第 163 図　MKⅠ－709　歴史時代ピット平面図
第 164 図　MKⅠ－709　歴史時代ピット断面図
第 165 図　MKⅠ－709　縄文時代 SK3454J　平面・断面図
第 166 図　MKⅠ－709　土層柱状図
第 167 図　西壁土層断面（東から）
第 168 図　MKⅠ－709　調査区全景（東から）
第 169 図　MKⅠ－709　調査区全景（西から）
第 170 図　P-1 断面（東から）
第 171 図　P-2 断面（北から）
第 172 図　P-3 断面（南から）
第 173 図　P-4 断面（南から）
第 174 図　P-5 断面（北から）
第 175 図　P-6 断面（南から）
第 176 図　SK3454J　完掘状況（北から）
第 177 図　SK3454J 断面（南から）

第 178 図　MK Ⅰ－709　出土遺物実測図
第 179 図　MK Ⅰ－709　出土遺物写真
第 180 図　MK Ⅱ－714　調査地位置図
第 181 図　遺跡の環境と周辺の調査区位置図
第 182 図　MK 35・136・710・714 次調査区位置図
第 183 図　MK 35・136 次調査区
第 184 図　MK 35 次調査　SD68 溝　平面・断面図
第 185 図　国分寺村の土地構成（明治初年頃）
第 186 図　MK Ⅱ－714　調査区全体図
第 187 図　SX361 断面図
第 188 図　SD435 断面図
第 189 図　SD435　遺物出土状況平面図
第 190 図　SD435　遺物出土状況断面図（南北見通し）
第 191 図　SD435 底部付近遺物出土状況（北から）
第 192 図　SD435 底部直上遺物出土状況（北から）
第 193 図　調査前風景（南から）
第 194 図　表土掘削状況（北西から）
第 195 図　SX361 検出状況（東から）
第 196 図　SX361 受熱部分検出状況（南から）
第 197 図　SX361 土層断面（西から）
第 198 図　SX361 土層断面（南から）
第 199 図　調査風景（北西から）
第 200 図　調査風景（南東から）
第 201 図　SD435　完掘全景（北から）
第 202 図　SD435　完掘全景（南から）
第 203 図　SD435　北壁断面（南から）
第 204 図　SD435　南壁断面（北から）
第 205 図　SD435 南壁宝永火山灰検出状況（北から）
第 206 図　動物遺存体出土状況（南から）
第 207 図　SD435 全景（北西から）
第 208 図　調査風景（南から）
第 209 図　SD435 底部の水漬き痕跡（西から）
第 210 図　MK Ⅱ－714　出土遺物実測図 1
第 211 図　MK Ⅱ－714　出土遺物写真 1
第 212 図　MK Ⅱ－714　出土遺物実測図 2
第 213 図　MK Ⅱ－714　出土遺物写真 2
第 214 図　MK Ⅱ－714　出土遺物実測図 3
第 215 図　MK Ⅱ－714　出土遺物写真 3
第 216 図　MK Ⅱ－714　出土遺物文字記号集成写真 1
第 217 図　MK Ⅱ－714　出土遺物文字記号集成写真 2
第 218 図　K 5 － 7　調査地位置図
第 219 図　K 5 － 7　調査区全体図
第 220 図　K 5 － 7　土層柱状図
第 221 図　SK9J・10J　平面・断面図
第 222 図　K 5 － 7　旧石器時代掘削深度図
第 223 図　調査前風景（南から）
第 224 図　作業風景（西から）
第 225 図　北トレンチ全景（東から）
第 226 図　東トレンチ全景（東から）
第 227 図　拡張区プレ全景（北から）
第 228 図　№ 2 トレンチ縄文遺物出土状況（西から）
第 229 図　№ 15 トレンチ縄文遺物出土状況（南から）
第 230 図　作業風景（北から）
第 231 図　№ 8 トレンチ縄文全景（北から）
第 232 図　SK9J 断面（西から）
第 233 図　SK9J 完掘全景（西から）
第 234 図　№ 15 トレンチ縄文全景（南から）
第 235 図　SK10J 断面（西から）
第 236 図　SK10J 完掘全景（北から）
第 237 図　№ 12 トレンチ北壁断面（南から）
第 238 図　№ 6 プレ遺物出土及び北壁断面（南から）
第 239 図　K 5 － 7　遺物出土図
第 240 図　K 5 － 7　出土遺物実測図
第 241 図　K 5 － 7　出土遺物写真

表　目　次

第 1 表　周辺の調査地区一覧（立川段丘面上の東山道武蔵路）
第 2 表　MK Ⅲ－706　遺物観察表（1）
第 3 表　MK Ⅲ－706　遺物観察表（2）
第 4 表　MK Ⅲ－706　遺物観察表（3）
第 5 表　MK Ⅳ－707　遺物観察表
第 6 表　MK Ⅰ－709　遺物観察表
第 7 表　MK Ⅱ－714　遺物観察表 1
第 8 表　MK Ⅱ－714　遺物観察表 2

第１章　遺跡の概要

本書で報告する遺跡は、武蔵国分寺跡（遺跡№.10・19）が４地区、羽根沢遺跡（遺跡№.５）１地区の計５ヵ所で、地理的環境、各遺跡の概要は次の通りである。

国分寺市の地理的・歴史的環境

国分寺市は、通称「ハケ」と呼ばれる国分寺崖線を境として、地形的に北と南に分けられる。国分寺崖線は、古多摩川が武蔵野台地を 10 万年以上の歳月をかけて削りとって形成された河岸段丘の連なりを指し、東西の長さは約 30km に渡り、比高差は 10 ～ 20 ｍある。崖線沿いには樹林や湧水などの豊かな自然環境が形成され、この崖線上を武蔵野段丘、崖下を立川段丘と呼称している。武蔵野段丘の縁辺部には、「恋ヶ窪谷」、「さんや谷」、「殿ヶ谷戸谷」、「本多谷」と呼ばれる高低差が 10 ｍにもおよぶいくつかの深い谷（開析谷）がある。このような谷や国分寺崖線上の台地縁周辺では旧石器時代の遺物や縄文時代の集落などが多く確認されており、恋ヶ窪遺跡、羽根沢遺跡、恋ヶ窪東遺跡、花沢西遺跡などはその代表的な遺跡である。崖線下からの湧水はこれらの谷を通って集まり野川となっている。

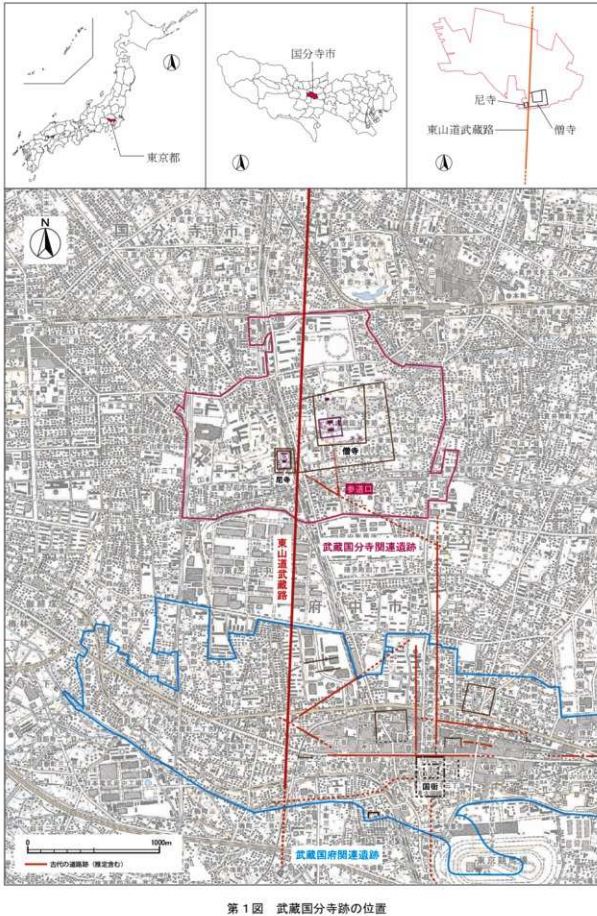
弥生時代以降の市域での土地利用は希薄であったが、奈良時代には、市名の由来となった武蔵国分寺が国分寺崖線を背にして建立された。中世の人々の生活の痕跡は武蔵国分寺に関連する遺跡や恋ヶ窪遺跡で僅かにたどることができる。

武蔵国分寺跡（№.10・19 遺跡）

武蔵国分寺は、天平 13 年（741）に聖武天皇により発布された国分寺建立の詔で、全国 60 余国に設置された国分寺の一つである。古代の官道である東山道武蔵路を挟んで東に僧寺、西に尼寺が配置され、遺跡の範囲は東西約 1.5km、南北は国分寺崖線を挟んで約 1 km に及ぶ。遺跡は現在の西元町１～４丁目、東元町３・４丁目、泉町１・２丁目、西恋ヶ窪１丁目に所在する。僧寺は「寺院地」・「伽藍地」・「中枢部」の三重に、尼寺は「伽藍地」・「中枢部」の二重に区画され、その周囲の寺院に関連する遺跡を含めて「寺地」と称している。前者が№.10 遺跡、後者が№.19 遺跡に該当し、寺院跡のほか、東山道武蔵路、推定鎌倉街道などの道路跡が確認されている。

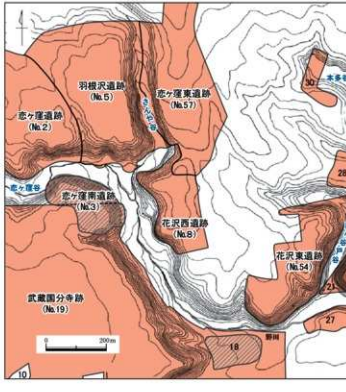
羽根沢遺跡（№.５遺跡）

羽根沢遺跡は、東恋ヶ窪１丁目日立中央研究所構内に所在する縄文時代早～中期の集落跡である。羽根沢遺跡の西側には台地中央部に入り込んだ小支谷を挟んで恋ヶ窪遺跡（№.２）があり、同一の台地上に立地している。本遺跡の東側には南北方向に台地を区切るさんや谷があり、この開析谷を挟んだ東側には恋ヶ窪東遺跡がある。また、遺跡の南側は比高差約 12 ｍの国分寺崖線があり、崖下には多くの湧水地点が確認されており、遺跡の立地としては好条件を備えている。

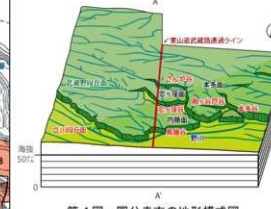


第１図　武蔵国分寺跡の位置

第２図　武蔵国分寺跡伽藍配置模式図

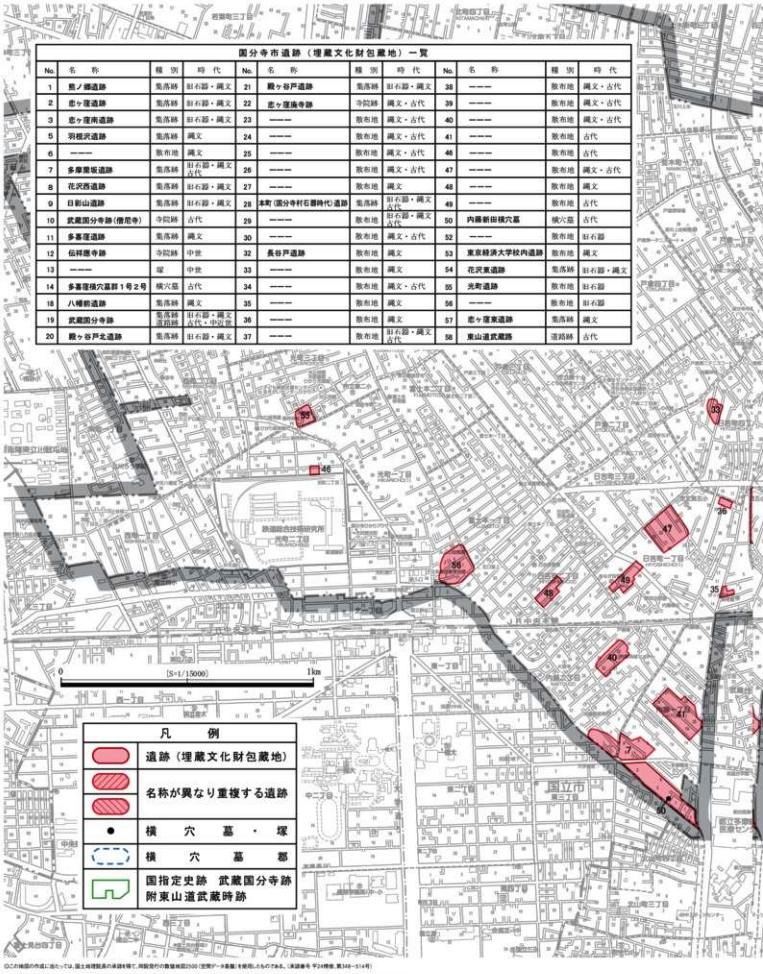


第３図　武蔵国分寺跡・羽根沢遺跡周辺の地形概略図



第４図　国分寺市の地形模式図

第５図　国分寺崖線と湧水

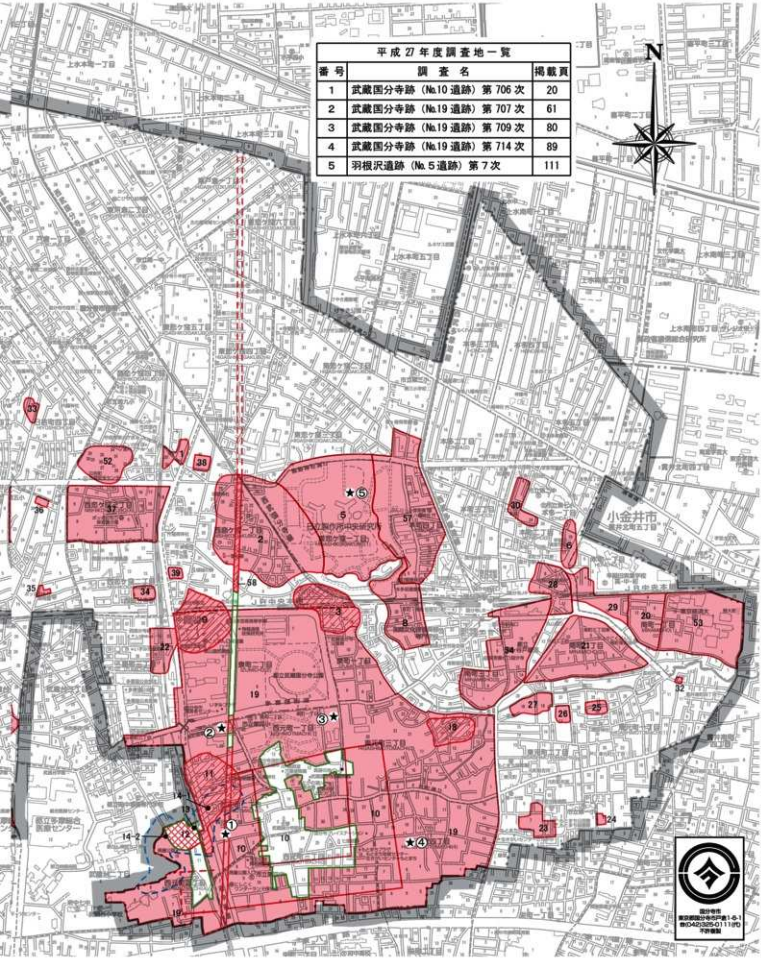


国分寺市遺跡（埋蔵文化財包蔵地）一覧

No.	名　称	種　別	時　代	No.	名　称	種　別	時　代	No.	名　称	種　別	時　代
1	恋ノ窪遺跡	集落跡	旧石器・縄文	21	殿ヶ谷戸遺跡	集落跡	旧石器・縄文	38	―――	散布地	縄文・古代
2	恋ヶ窪遺跡	集落跡	旧石器・縄文	22	恋ヶ窪廃寺跡	寺院跡	縄文・古代	39	―――	散布地	縄文・古代
3	恋ヶ窪南遺跡	集落跡	旧石器・縄文	23	―――	散布地	縄文・古代	40	―――	散布地	縄文・古代
5	羽根沢遺跡	集落跡	縄文	24	―――	散布地	縄文・古代	41	―――	散布地	古代
6	―――	散布地	縄文	25	―――	散布地	縄文・古代	46	―――	散布地	古代
7	多摩蜜坂遺跡	集落跡	旧石器・縄文・古代	26	―――	散布地	縄文・古代	47	―――	散布地	縄文・古代
8	花沢西遺跡	集落跡	旧石器・縄文	27	―――	散布地	縄文	48	―――	散布地	縄文
9	日影山遺跡	集落跡	旧石器・縄文	28	本町（国分寺村石器時代）遺跡	集落跡	旧石器・縄文・古代	49	―――	散布地	古代
10	武蔵国分寺跡（僧尼寺）	寺院跡	古代	29	―――	散布地	旧石器・縄文・古代	50	内藤新田横穴墓	横穴墓	古代
11	多摩蜜遺跡	集落跡	縄文	30	―――	散布地	縄文・古代	52	―――	散布地	旧石器
12	伝祥恵寺跡	寺院跡	中世	32	長谷戸遺跡	散布地	縄文	53	東京経済大学校内遺跡	散布地	縄文
13	―――	塚	中世	33	―――	散布地	縄文	54	花沢東遺跡	集落跡	旧石器・縄文
14	多摩蜜横穴墓群１号２号	横穴墓	古代	34	―――	散布地	縄文・古代	55	光町遺跡	散布地	旧石器
18	八幡前遺跡	集落跡	縄文	35	―――	散布地	縄文	56	―――	散布地	旧石器
19	武蔵国分寺跡	集落跡 遺跡群	旧石器・縄文 古代・中世	36	―――	散布地	縄文	57	恋ヶ窪東遺跡	集落跡	縄文
20	殿ヶ谷戸北遺跡	集落跡	旧石器・縄文	37	―――	散布地	旧石器・縄文 古代	58	東山道武蔵路	道路跡	古代

○この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承諾を得て、同院発行の数値地図2500（空間データ基盤）を使用したものである。（承諾番号 平24情使、第348－514号）

第６図　調査地点位置図



平成 27 年度調査地一覧

番号	調査名	掲載頁
1	武蔵国分寺跡（No.10 遺跡）第 706 次	20
2	武蔵国分寺跡（No.19 遺跡）第 707 次	61
3	武蔵国分寺跡（No.19 遺跡）第 709 次	80
4	武蔵国分寺跡（No.19 遺跡）第 714 次	89
5	羽根沢遺跡（No. 5 遺跡）第 7 次	111

第２章　調査の概要

第１節　武蔵国分寺跡第 706 次調査

所 在 地	西元町二丁目４番外		
調査原因	宅地造成	調査種別	発掘調査
調査費用	事業者負担	調査体制	委託
調査期間	平成 27 年４月１日～５月 15 日		
調査面積	194.90 ㎡	遺物箱数	12 箱
検出遺構	SF1、SI822 ～ 825、SD430 ～ 434、SX359・360・362、P-1・3・4		
主な遺物	土師器・須恵器・土師質土器・灰釉陶器・緑釉陶器・青磁・中近世陶磁器・瓦・鉄滓・陶硯・石製品、縄文土器		

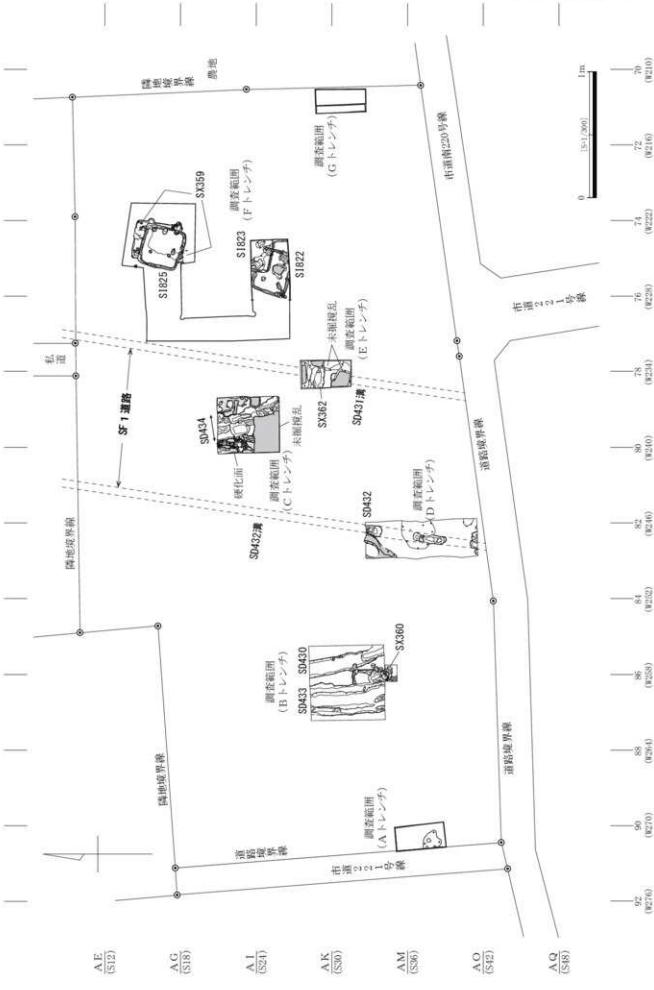
第７図　ＭＫⅢ－ 706　調査地位置図

【１．調査に至る経緯と経過】　調査区は、国分寺市西元町二丁目４番外に所在し、武蔵国分寺跡遺跡（No. 10・19）に該当する。当該地は武蔵国分寺の僧尼寺中間地域にあたるため、遺構が密に存在する可能性が高く、さらに古代官道である東山道武蔵路が南北に縦走している場所である。また、国史跡武蔵国分寺跡〔僧寺地区〕新整備基本計画（平成 14 年度策定、以下「新整備基本計画」）および国指定史跡武蔵国分寺跡　附東山道武蔵路跡保存管理計画（第２次）（平成 24 年度策定、以下「保存管理計画」）等の諸計画において、将来的に追加指定の可能性のある場所ともなっている。このため、平成 27 年２月３日付　国教教ふ収第 792 号　文化財保護法第 93 条第１項届出において、当該地で土地造成が計画されたことを受け、国分寺市教育委員会(以下、市教委と称する)は届出者である株式会社リノベイトと(以下、リノベイトと称する）協議を行い、重要遺構の存在を確認するための調査（国分寺市教育委員会 2016 所収）を平成 27 年３月 19 日から 30 日まで実施した。

調査の結果、古代官道である東山道武蔵路の両側側溝が検出され、また古代の遺物も出土したことから、周辺に遺構が存在する可能性が高いことが想定された。しかし、調査地の上面は耕作や客土等のために大きく削平されて遺構の遺存が低いこと、植木による攪乱が多くあることなども判明したため、市教委は当該地は近い将来における追加指定の対象としないものの、なるべく遺構等を保存する方向の土地利用をリノベイトと協議した。協議の結果、将来的な宅地部分はなるべく盛土して保護層を厚くするなどの対応を施し、浸透ますと給排水管の工事によって深く掘削される部分について、事業者負担による発掘調査（出土品等整理作業含む）を実施することを確認した。

発掘調査は、市教委が調査主体となり、リノベイトと国分寺市遺跡調査会（以下、調査会と称する）が埋蔵文化財発掘調査委託契約書を交わし、武蔵国分寺跡第 706 次調査として実施した。調査は雨水浸透ますが設置される部分を中心に７カ所（Ａ～Ｇ）のトレンチを設定して行った。現地調査は平成 27 年４月１日から５月 15 日（実働 23 日）まで実施した。調査面積は 194.90 ㎡である。

その後の整理作業は平成 27 年５月～平成 28 年３月期間中、断続的に実施した。



第８図　ＭＫⅢ－706　調査区全体図

【２．検出された遺構と出土遺物】 調査区内は、Ａ・Ｇトレンチを除くほとんどのトレンチで、地表より約 30 ～ 40 ㎝の深さまで基本層序Ⅰ層（表土・耕作土）に覆われていた。耕作土の下には硬質層があり、その下層の地山との境が漸移的ではなく非常に明確に分けられることから、耕作などによりⅢｂ層（古代の遺構確認面）の下方、あるいはⅢｃ層まで一律に削平されていた状況を確認した。これは、先行して行った確認調査で認められた状況と同じである。この硬質層の下面で遺構の有無を確認したところ、東山道武蔵路（SF1）の側溝（SD431・432）及び路面改良の痕跡（波板状圧痕）、竪穴住居４軒（SI822 ～ 825）、溝３条（SD430・433・434）、性格不明遺構３基（SX359・360・362）が検出された。

東山道武蔵路（SF1）（第８・９図）　Ｃ・Ｄ・Ｅトレンチで確認された。このうち、Ｄトレンチでは、東山道武蔵路の西側側溝 SD432、Ｅトレンチでは東側側溝の SD431 が検出された。Ｃトレンチは路面の中央部分にあたり、近世以降の溝 SD434 が南北に走っていた。これを除くと、地盤（路面）強化の痕跡と考えられているいわゆる波板状圧痕に類似する、溝状に掘り込んだ内部を固く締めて形成した硬化面が検出された。確認面からの掘り込みは 10 ㎝程度と浅かったが、路面が後世に削平されていることを考えると、当時の路面からは数十㎝掘り込まれていたものと考えられる。路面を補修・強化した痕跡で、Ｄ・Ｅトレンチでも類似する硬化面が部分的に検出されている。

道幅は、両側側溝の心々間で 11.8 ｍあり、市域で確認される東山道武蔵路第１期の道幅とほぼ同じ約 12 ｍである。道路の主軸は武蔵国分僧寺中軸線北に対して 9°　04′　35″ 東偏する。遺物は、Ｃトレンチの硬質面直上付近から土師器・須恵器や瓦の破片が出土しているが、上部削平後に混入した可能性があり、遺構と明確に関係が認められる遺物は確認できなかった。

SD431 溝（東側側溝）（第８・26・58 図）　東山道武蔵路の東側側溝で、Ｅトレンチで検出された。調査区は大きく撹乱を受けており、トレンチの中央付近で溝の北端の一部が、トレンチの南壁の断面でわずかに認められる程度であった。遺物は出土しなかった。

SD432 溝（西側側溝）（第８・23・24・53 ～ 56 図）　東山道武蔵路の西側側溝で、Ｄトレンチ内の中央付近で検出された。側溝は、連続した１列の溝ではなく、土坑が途切れて連なっている、いわゆる土坑連結式と呼ばれる側溝である。途切れた距離は、北側の土坑と中央の土坑が 2.5 ｍ、同じく南側と南側が 1.8 ｍであった。本来は上端のみが連結されていた可能性や、現状の掘り方より上方が１段外に広がる土坑形体であった可能性もあるが、耕作等による上部の削平により推測の域を出ない。

トレンチ内の北側及び南側の土坑はそれぞれ調査区外へと続いているため、全体の長さは不明であるが、北側の土坑は確認範囲で最大幅約１ｍ、深さ 44 ㎝、中央の土坑は幅約 50 ㎝、長さ約 2.5 ｍ、深さは現況で 47 ㎝、南側は最大幅 50 ㎝、深さ 17 ㎝である。遺構に伴う遺物は出土しなかった。

SI822 竪穴住居（第８・28・29・62 ～ 64・66 図）　Ｆトレンチ内の南側で検出された。撹乱により、側溝の一部と北カマドの底部がわずかに残っているのみであった。住居の範囲は調査区外にまで広がっているため、全容は不明である。住居の形態は長辺 3.6 ｍ、短辺 2.8 ｍの長方形と想定される。僧寺中軸線に対して、19°　東偏する。SI822 は SI823 と重複しており、SI822 が新しい。遺物は、土師器・土師質土器・須恵器の小片が出土している。

SI823 竪穴住居（第８・28・30・62・63 図）　Ｆトレンチ内の南側で検出され、SI822 と同じく攪乱により側溝の一部のみが遺存している。住居の範囲は調査区外に広がっているため、調査時は全体の規模は不明であったが、平成 27 年 12 月に実施した武蔵国分寺跡第 712 次調査（国分寺市教育委員会 2017B 所収）で東辺の延長が検出され、東西の規模が約 3.4 ｍであることが判明した。主軸は僧寺中軸線に対して 9°東偏する。SI822 と重複しており、SI823 が後出する。遺物は、土師器・土師質土器・瓦の破片が出土している。

SI824 竪穴住居（第 18 図）　Ｂトレンチ内の中央付近で検出された。上面の削平に加え、SD433 溝に大きく壊されているため、周溝の一部のみが遺存している。全体の規模は不明だが、南北辺は約 3.4 ｍと想定される。住居の東側にカマドの痕跡と思われる箇所があったが、明確ではない。住居は SX360 と重複し、SX360 の方が新しく造られている。遺物は男瓦片が出土している。

SI825 竪穴住居（巻頭図版２、第 31 ～ 39・68 ～ 78 図）　Ｆトレンチ内の北側で検出された。平面形は、長辺・短辺ともに約 3.2 ｍの正方形で、確認面から貼り床までの深度は 26 ㎝である。カマドは、はじめ北辺の中央寄りに造ったものを、後から東辺の南に造りかえている。建物の主軸は僧寺中軸線に対し 16°東偏している。SX359 と重複し、SI825 の方が新しく構築されている。

遺物は、覆土から土師器（番号１・３、以下「番号」省略）・須恵器（５～８）・土師質土器・円面硯（48）・瓦（31・32・34 ～ 40）・鉄滓・釘・ふいごの羽口などが出土している。

SD430 溝（第８・18・19・40・42 図）　Ｂトレンチ内の東側で検出された南北方向に走る溝である。僧寺中軸線に対して 11°西へ偏り、調査区内の南端付近でやや東へ振れる。北側・南側ともに調査区外へ続いている。トレンチ内で確認された規模は長さ約 6.0 ｍ、最大幅約 1.3 ｍ、深さ約 45 ㎝である。覆土からは古代の遺物が出土しており、土質からも平安時代の溝と想定される。遺物は、須恵器（10）や瓦（33）が出土した。

SD433 溝（第８・18・19・41・43 図）　Ｂトレンチ内の西側で検出された。SD430 と並行するが、主軸は僧寺中軸線に対して１°西偏し、真北に対しては、西へ約 6°の傾きである。覆土は、同調査区で検出されている削平後に形成された硬質層が壊れてブロック状に投げ込まれたものを主体とする。ブロックの隙間に水漬きの痕跡が見られることや、溝は数回の掘り直しの痕跡があることから、近世以降に掘削された溝と考えられる。状況からは、畑に水を引くための水路等の可能性がある。遺物は、土師器・須恵器（９）・土師質土器・灰釉陶器（20）・舶載青磁（25）・渥美甕（26・27）・瓦（41）・鉄滓・縄文土器・動物の歯（馬の歯か？）などが出土している。

SD434 溝（第８・20・47 図）　Ｃトレンチ内の中央付近で検出された南北方向に走る溝である。検出された場所は、東山道武蔵路の路面にあたる場所だが、道の主軸とは並走せず、また覆土は SD433 に似るため、同遺構も近世以降に掘削された溝と考えられる。遺物は、須恵器・瓦が出土している。

SX359 不明遺構（第８・33 図）　Ｆトレンチ内の北側で検出された。規模は長辺 4.2 ｍ、短辺 3.0 ｍで、僧寺中軸線に対して 10°東偏し、東山道武蔵路の主軸とほぼ並行する。SI825 と切り合い、SX359 が古い。

遺構の規模は竪穴住居に類似するが、掘方に粗く掘り下げた工具痕が認められるのみで、カマドや周

溝などは検出されなかった。おそらくは、竪穴住居を構築するために掘削している途中で、何らかの事情により放棄したものと考えられ、その後、ほぼ同じ場所でSI825が構築されたと想定される。遺物は、覆土から須恵器・瓦の小片が出土している。

SX360 不明遺構（第８・18・19図）　Ｂトレンチ内の南端で検出された。形状は円形を呈し、直径は約１ｍである。SI824との明確な切り合い関係は確認できなかったが、おそらくはSX360が後出するものと考えられる。覆土から比較的遺存状態のよい須恵器（13）や瓦（44・45）のほか、土師器（４）・土師質土器（16・17）・灰釉陶器（21）・緑釉陶器（23）の破片などが出土している。

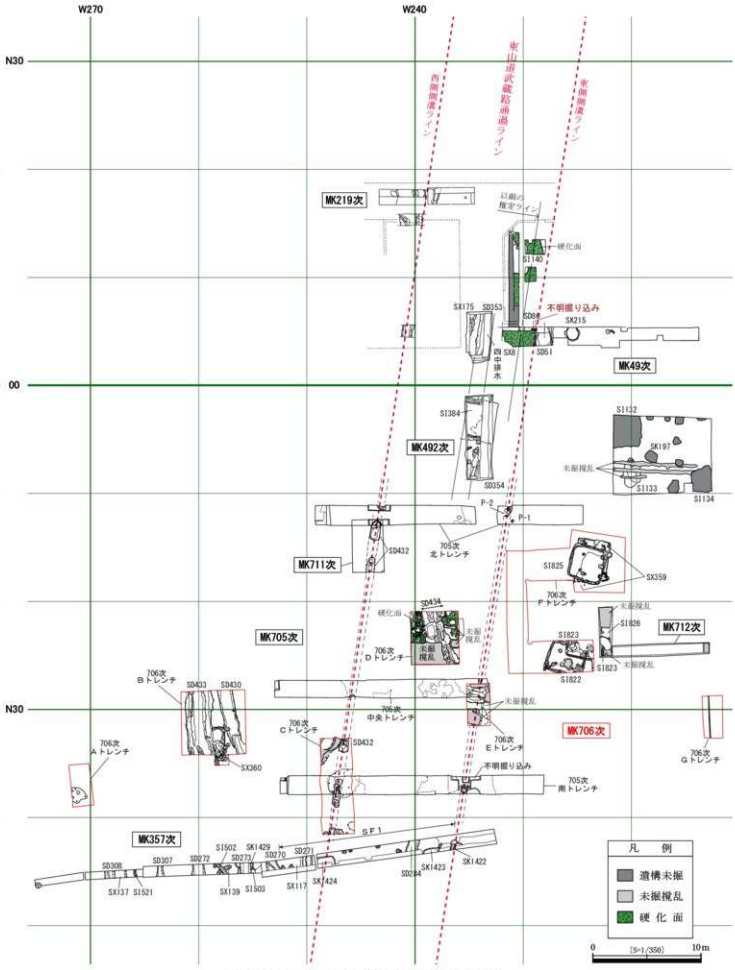
SX362 不明遺構（第 26・27・59・60図）　Ｅトレンチ内の北端付近で検出された。幅1.1ｍの東西方向の掘り込み状の遺構で、SD431を切って構築されている。遺構の規模は撹乱によって壊されているため明確ではない。覆土から須恵器の破片が出土している。

このほか調査区の表土からは、舶載青磁（24）・渥美甕（28）・常滑三筋壺（29）・瓦（34・46・47）・温石（49）などが出土している。

【３．小　結】　本調査区の周辺では、小規模ながらこれまで調査を重ねており、東山道武蔵路の様相について検討を加えてみたい。東山道武蔵路の通過ラインについては、国分寺崖線下付近で実施した武蔵国分寺跡第699次調査（以下、報告書は第１表の一覧を参照）で検出された側溝が立川段丘面上で確認されている北限である。これ以北の調査区では、今のところ礫敷きや硬質面（第37・704次調査）などが確認されている。礫敷きは供出する遺物から、東山道武蔵路の初期のものではなく、少なくとも８世紀中頃以降に敷設されたものと考えられている。第699次調査で検出された側溝の中心の位置と、当該調査および第705次調査で検出された側溝を便宜的に直線で結ぶと第９図のようになり、これまで東山道武蔵路の東側側溝と考えられていた第49次のSD86がやや西に逸れているのがわかる。可能性としては、SD86より東へ１ｍの位置にある不明掘り込みとしている遺構が、土坑連結式側溝の形態をとっていることからこれが東側側溝である可能性がある。また、第357次調査で検出されたSK1422も東側側溝のライン上にあり、規模・形態からも東山道武蔵路の側溝と推測できる。

道路に伴う硬化面については、本調査のＤトレンチで検出された波板状圧痕に類似する溝状の掘り込みが南へ約100ｍほどの地点で実施された第135次調査区で検出されている。第135次調査では、東山道武蔵路の第１期側溝を切って構築された幅約15ｍにわたる何条もの溝状の掘り込みが検出されている。深さ約45㎝の溝の内部は、粘土質の土が２～３層に突き固められており、部分的な地盤改良の痕跡と考えられている。構築年代は出土遺物から10世紀末から11世紀中頃と想定されている。Ｄトレンチで検出された硬化面は、調査区外へと続いているため、規模や範囲は不明であるが、第135次調査で検出されたものと同類の機能をもっていた可能性があげられる。

また、第49・699次調査でも路面のみならず側溝上面、道路外へ続いて広がる硬化面が検出されており、道路やその周辺の整備・補修という点において、本調査や第135次調査の硬化面と同じ役割を果たしていたものと考えらる。



第９図　ＭＫⅢ－ 706 周辺の既往調査遺構配置図

出土した遺物で特徴的なのものは、中世の青磁碗と温石である。Ｂトレンチおよび付近の表土から出土した青磁碗の破片（巻頭図版２、24・25）は、龍泉窯系のもので、体部内面・見込みに劃花文が施文されている。やや北東に離れるが、第 49 次の調査区でも劃花文のある青磁片が出土しており（第 10 図）、本調査で出土したものと共通点が多い。また SD433 からは渥美窯の 13 世紀の甕も出土しており、中世における当該地域の様子を示すものとして貴重な資料である。また、同じく中世の所産と考えられる温石（巻頭図版２、49）は、下端を欠いているため全体の規模は不明だが、幅 9.7 ㎝、厚さ 2.0 ㎝の方形板状を呈する滑石製の製品である。表面は丁寧に面取りされているが、裏面はやや粗い仕上げで、側面には加工痕がある。８～ 10 ㎜の小孔が１カ所あり、側面には加工痕が残っている。東国での出土例は稀で、武蔵国分寺跡のこれまでの調査では出土例がないが、滑石製の石鍋の転用が多いことから、これまでの出土遺物を再検証する必要がある。

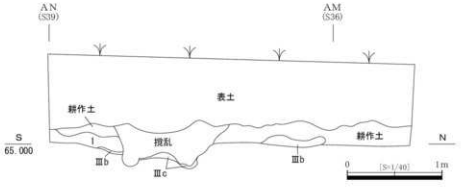
第 10 図　武蔵国分寺跡
第 49 次調査出土の青磁碗

第１表　周辺の調査地区一覧（立川段丘面上の東山道武蔵路）

調査年	調査次数	調査地	報告書	主な遺構
1978–80	MK79 次	西元町二丁目地内	国分寺市遺跡調査会 1990「武蔵国分寺跡発掘調査概報 16」	側溝、土坑、瓦組
1983–84	MK37 次	西元町二丁目 8–16 番地先	国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 1998「武蔵国分寺跡発掘調査概報 22」	礫・瓦片敷き、硬化面
2015	MK704 次	西元町二丁目 1658-3	国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 2016「東山道武蔵路発掘調査概報 II」	礫・瓦片敷き、硬化面、溝、土坑
2014	MK699 次	西元町二丁目 1657-2	国分寺市教育委員会 2015「平成 25 年度国分寺市埋蔵文化財調査年報」	溝、硬化層
1984	MK219 次	西元町二丁目 1670-1	未報告	溝、土坑、硬質面
1977	MK49 次	西元町二丁目 1671	国分寺市遺跡調査会 2009「武蔵国分寺跡発掘調査概報 34」	溝、土坑、硬質面
1999	MK492 次	西元町二丁目 3・4 番地	未報告	側溝、溝、土坑
2015	MK705 次	西元町二丁目 4 外	国分寺市教育委員会 2016「平成 26 年度国分寺市埋蔵文化財調査年報」	側溝
2016	MK706 次	西元町二丁目 4 外	未報告	側溝、硬化面、溝
2016	MK711 次	西元町二丁目 1668-8	国分寺市教育委員会 2017「平成 27 年度国分寺市埋蔵文化財調査年報」	側溝
1991	MK357 次	西元町二丁目地内	国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 1998「武蔵国分寺跡発掘調査概報 22」	側溝、溝、土坑
1982	MK135 次	西元町二丁目 2256-1	国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 1989「武蔵国分寺跡発掘調査概報 14」	側溝、溝、土坑
1982	MK150 次	西元町三丁目 2231、2232-1	未報告	側溝、溝、土坑
1979	MK91 次	西元町三丁目地内	国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 1998「武蔵国分寺跡発掘調査概報 22」	溝、土坑

※ MK ＝武蔵国分寺跡

第 11 図　周辺の主な調査地点

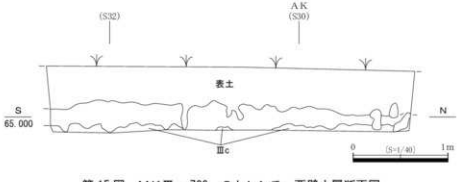


1.7.5YR3/3　暗褐色土　　粘性ややあり、しまりなし。耕作土にⅢb土が混ざる。赤色スコリア微量。

第 12 図　ＭＫⅢ－ 706　Ａトレンチ　西壁土層断面図

第 13 図　Ａトレンチ　全景（北から）

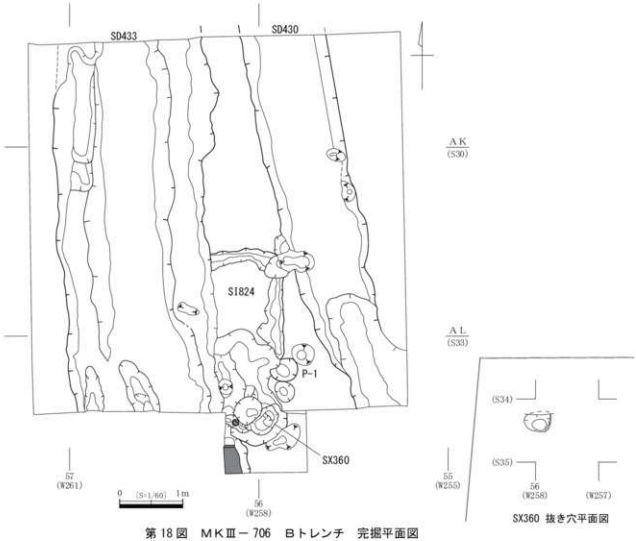
第 14 図　Ａトレンチ　西壁土層断面（東から）



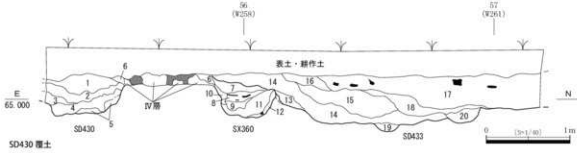
第 15 図　ＭＫⅢ－ 706　Ｇトレンチ　西壁土層断面図

第 16 図　Ｇトレンチ　全景（北から）

第 17 図　Ｇトレンチ　西壁土層南側断面（東から）



第 18 図　ＭＫⅢ－ 706　Ｂトレンチ　完掘平面図



SD430 覆土

1．10YR2/3　黒褐色土　粘性なし、しまりややあり。ローム粒、オレンジスコリア・赤色スコリアを極微量含む。
2．10YR2/3　黒褐色土　粘性なし、しまりややあり。1～10mmのローム粒、ロームブロックを少量（10%）含む。
3．10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性なし、しまりあり。1～10mmのローム粒、ロームブロック 40%含む。
4．10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性なし、しまりややあり。1～50 mmのローム粒、ロームブロック 70%、赤色スコリアを微量含む。
5．ローム ブロック主体　粘性なし、しまりややあり。4 の土を微量に含む。
6．10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性なし、しまりなし。Ⅲ c に似るが、ローム粒をしみ状に含む。赤色スコリアを微量含む。

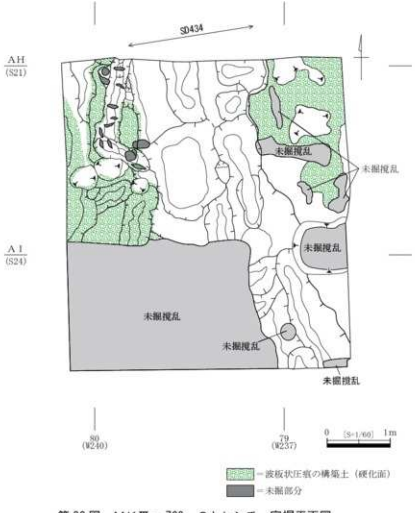
SX360 覆土

7．10YR3/3　暗褐色土　粘性なし、しまりややあり。ローム粒 1～20mmのロームブロックを中量（40%）。赤色スコリア・オレンジスコリア微量に含む。
8．10YR3/3　暗褐色土　粘性なし、しまり弱い。部分的にボソボソしている。ローム粒・赤色スコリアを微量含む。
9．10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性なし、しまりなし。ローム粒 1～5 c mのローム ブロックを少量（30%）。赤色スコリアを微量含む。部分的にしまりあり。
10．10YR4/3　にぶい黄褐色土　粘性なし、しまりややあり。ローム粒 1～10mmのロームブロックを多量（60%）。赤色スコリア微量含む。
11．ローム ブロック主体　粘性なし、しまりあり。8.9 の土を少量含む。1～60mmのローム ブロックを主体とする。赤色スコリア微量含む。
12．ローム ブロック主体　粘性なし、しまりあり。暗褐色土の土を微量含む。1～30mmのローム ブロックを主体とする。赤色スコリア微量含む。

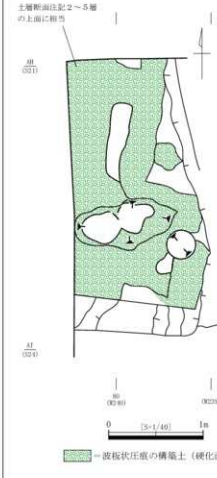
SD433 覆土

13．ローム ブロック主体　粘性なし、しまりあり。暗褐色土の土を微量含む。1～10mmのローム ブロックを主体とする。赤色スコリア微量含む。
14．10YR3/3　暗褐色土　粘性なし、しまりややあり。全体にローム粒・赤色スコリアを微量含み、下層から中層に 10～20 mmのローム ブロックを少量（10%）含む。
15．10YR3/1　黒褐色土　粘性なし、しまりやや強い。ブロック状の土の塊が硬化した層。全体的に硬くしまっている。
16．10YR3/1　黒褐色土　粘性なし、しまりややあり。表土に似る。全体的にローム粒を 5 %含む。
17．10YR3/1　黒褐色土　粘性なし、しまり強い。全体的に固くしまり、ブロック状の土の塊が硬化した部分が多い層。ブロック間に赤い水酒きの痕跡が多くみられる。
18．10YR3/1　黒褐色土　粘性なし、しまりややあり。全体的にローム粒、赤色スコリアを 3 %含む。16 の土に似る。
19．ローム ブロック主体　粘性なし、しまりやや強い。14 の土を上一中層に少量含む。
20．10YR3/3　暗褐色土　粘性なし、しまりやや強い。ローム ブロック 1～50mm を約 50%含む。

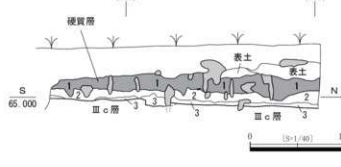
第 19 図　ＭＫⅢ－ 706　Ｂトレンチ　南壁土層断面図



第 20 図　ＭＫⅢ－ 706　Ｃトレンチ　完掘平面図



第 21 図　硬化面形成時平面図

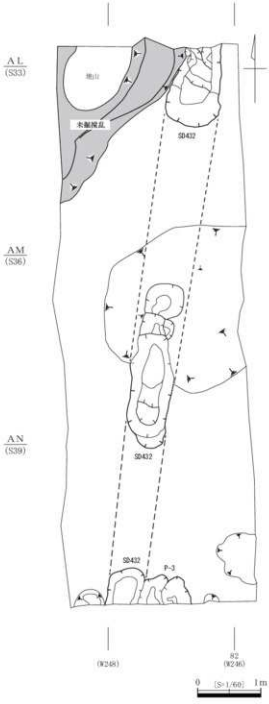


1．10YR3/1　黒褐色土　　粘性ややあり。しまり強い。赤色スコリア、オレンジスコリアを微量（１～５%）、炭化物と５mm程度の小石を下層に極微量（１%未満）含む。部分的に酸化した水つきの痕跡あり。（瓦や土器等の遺物を包含する硬質層）

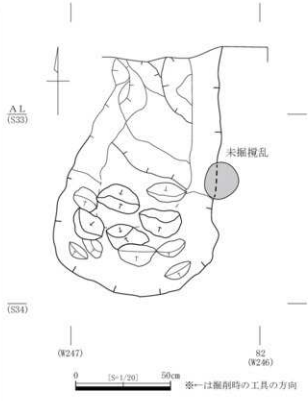
2．10YR2/1　黒色土　　粘性なし、しまり極めて強い。赤色スコリア、オレンジスコリア、ローム粒を微量（１～５%）含む。非常に固くしまり、Ⅲｃ層まで掘り下げたのちに埋め戻された土。（波板状圧痕の構築土（硬化層）、直上から遺物出土）

3．10YR2/2　黒褐色土　　粘性ややあり。しまり強い。赤色スコリア、ローム粒を全体に少量（５～10%）、２～５mmのブロックを下層に微量含む。（波板状圧痕の構築土（硬化層））

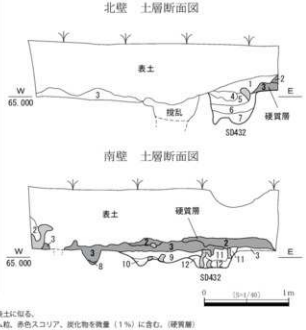
第 22 図　ＭＫⅢ－ 706　Ｃトレンチ　西壁土層断面図



第 23 図　ＭＫⅢ－ 706　Ｄトレンチ　平面図

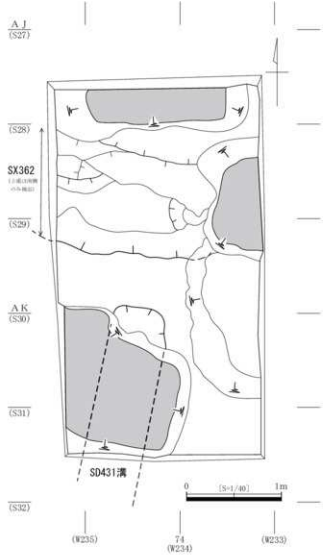


第 24 図　SD432　完掘平面図（北側）



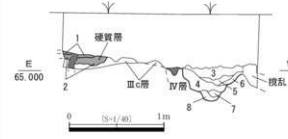
1．10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまりなし。ローム粒を少量（５%）含む。表土に似る。
2．10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまりやや強い。部分的に固くしまる。ローム粒、赤色スコリア、炭化物を微量（１%）に含む。（硬質層）
3．10YR3/2　黒褐色土　粘性ややあり、しまり強い。赤色スコリア、オレンジスコリアを微量（１～５%）、ローム粒子、３～５mmのブロックを下層に少量（２～５%）含む。（硬質層）
4．10YR2/1　黒色土　粘性ややあり、しまり強い。赤色スコリア、オレンジスコリアを微量（１～５%）、３～５mmのローム粒をしみ状（５～10%）に含む。（SD432 覆土）
5．10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまりあり、部分的に固くしまる。赤色スコリア、オレンジスコリアを微量（１～５%）、５mmのローム粒ブロックを西寄りに１%含む。（SD432 覆土）
6．10YR2/1　黒色土　粘性なし、しまりやや弱い、部分的にボソボソしている。赤色スコリア、オレンジスコリア、ローム粒を微量（１～５%）、２～20 mmのブロックを下層に微量（５%）含む。（SD432 覆土）
7．ロームブロック主体土　粘性なし、しまりややあり、１～50 mmのロームブロックを主体とする。６の土を少量（10%）、赤色スコリア微量（１%）含む。（SD432 覆土）
8．ロームブロック主体土　粘性やあり、しまりやや強い、１～30 mmのロームブロックを主体とする。
9．10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまり強い、赤色スコリア、オレンジスコリア、ローム粒を微量（１～５%）、３～10 mmのブロックを部分的に少量（５%）含む（硬化層）。
10．９とローム粒子の混合　粘性やあり、しまりなし。ローム粒をしみ状に多く含む。
11．10YR2/1　黒色土　粘性なし、しまり強い、全体的に固くしまる。上層に３の土がわずかに入る。赤色スコリア、オレンジスコリアを微量（１%）、ローム粒子、２～10 mmのブロックを少量（５%）含む。（SD432 覆土）
12．ロームブロック主体　粘性やあり、しまりやや弱い。１～30 mmのロームブロックを主体とする。黒褐色土を少量。赤色スコリアを２%含む。（SD432 覆土）

第 25 図　ＭＫⅢ－ 706　Ｄトレンチ　土層断面図



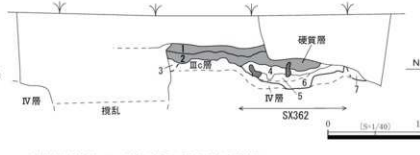
第 26 図　ＭＫⅢ－ 706　Ｅトレンチ　完掘平面図

南壁　土層断面図



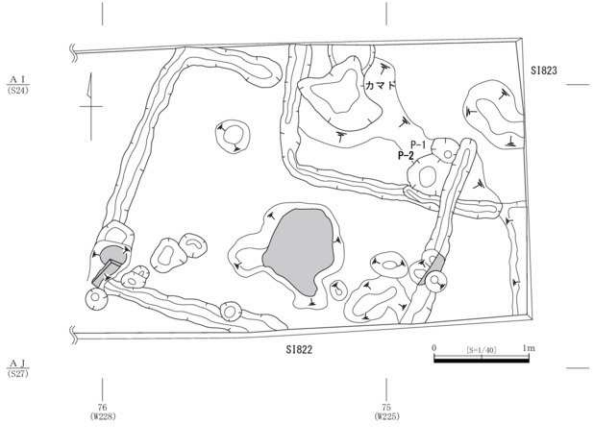
1. 10YR3/1　黒褐色土　しまりあり、粘性ややあり、部分的にブロック状にしまる、ローム粒子を微量含む（硬化層）。
2. 10YR3/1　黒褐色土　しまりややあり、粘性ややあり、しみ状に５mmのローム粒子を５％含む、赤色スコリアを微量に含む（硬化層）。
3. 10YR3/2　黒褐色土　しまりややあり、粘性ややあり、ローム粒を５％、赤色スコリア１％含む。（SD431覆土）
4. 10YR3/2　黒褐色土　しまりなし、粘性なし、ローム粒子、１～４mmのブロックを20％含む、赤色スコリア極微量含む。（SD431覆土）
5. 10YR2/1　黒色土　しまりなし、粘性なし、ローム粒子５％、赤色スコリア極微量含む。（SD431覆土）
6. 10YR4/3　にぶい黄褐色土　しまりなし、粘性なし、ローム粒子、１～５mmのロームブロックを80％含む、赤色スコリア極微量含む。
7. ロームブロック主体土　（SD431覆土）
8. 10YR3/2　黒褐色土　しまりなし、粘性なし、ローム粒１～30mmのロームブロックを30％含む。（SD431覆土）

西壁　土層断面図



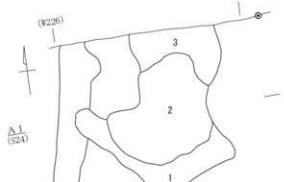
1. 10YR3/2　黒褐色土　しまりあり、粘性なし、ローム粒子・赤色スコリア１％含む。（硬質層）
2. 10YR3/2　黒褐色土　しまりあり、粘性ややあり、部分的にブロック状によくしまる、赤色スコリア・ローム粒子３％含む。（硬質層）
3. ローム粒主体、黒色土　１～20mmのロームブロックを５％含む。
4. 10YR3/2　黒褐色土　②に似るが、しまりややあり、粘性なし。（SX362覆土）
5. 10YR3/2　黒褐色土　しまりなし、粘性なし。③よりしまり少ない。一部ボソボソしている。ローム粒子、１～10mmのロームブロックを５％含む。（SX362覆土）
6. 10YR4/3　にぶい黄褐色土　しまりややあり、粘性なし。ローム粒子、１～20mmのロームブロックを70％、赤色スコリア微量含む。（SX362覆土）
7. 10YR3/2　黒褐色土　しまりややあり、粘性ややあり、②に似る。ローム粒子、１～10mmのロームブロック20％、赤色スコリア極微量含む。

第 27 図　ＭＫⅢ－ 706　Ｅトレンチ　土層断面図

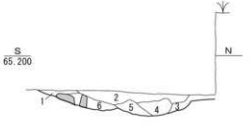


第 28 図　ＭＫⅢ－ 706　SI822・823　完掘平面図

SI822　カマドプラン図

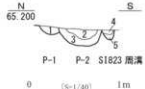


SI822　カマド土層断面図



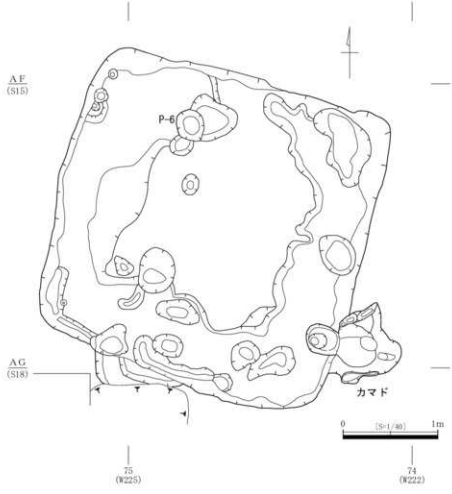
1．10YR2/2　黒褐色土　粘性なし、しまりややあり。１～２cmの黄白色・砂質粘土ブロック、５～８mmの焼土粒が部分的に多量、２～4cmのロームブロックを５～10%含む。
2．2.5YR4/6　赤褐色土　ほとんど焼土粒の層（炉床と思われる）。
3．10YR3/3　暗褐色土　１に似るがｌよりしまりあり、焼土粒少なく黒味薄い。
4．黄白色土　粘性あり、部分的にしまりあり、黄白色粘土のブロック。
5．黒褐色土　１に似るが焼土粒微量、しまりあり。
6．黄褐色土　粘性・しまりあり、ほとんどロームブロックの層。

第 29 図　SI822 カマド　平面・断面図



1．10YR3/3　黒褐色土　粘性なし、しまりややあり。１～４cmのロームブロックを 30～40%含む。５～ 10 mmの黄白色粘土粒を３～４個含む。（P-1 覆土）
2．10YR2/2　黒褐色土　粘性なし、しまりややあり。カマドの１に似るがしまり弱い。１～３cmの炭化物含む。（P-2 覆土）
3．黒褐色土　P-1 の１に似るがしまり弱い。（P-2 覆土）
4．10YR3/3　黒褐色土　粘性なし、しまりややあり。１～４cmのロームブロック 10～20%含む。（SI823 周溝覆土）
5．黄褐色土　粘性ややあり、しまりややあり。ローム粒子・ブロックを主体とする層。（SI823 周溝覆土）

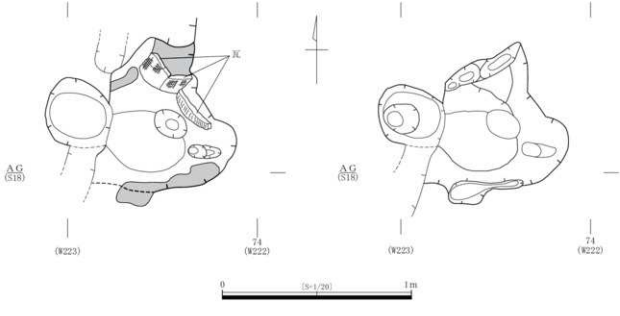
第 30 図　SI822　P-1, 2　SI823 周溝　土層断面図



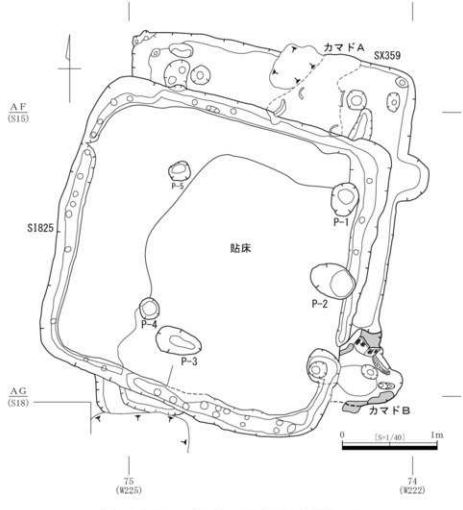
第 31 図　SI825　構築時　完掘平面図

SI825 カマドB　使用時　完掘平面図

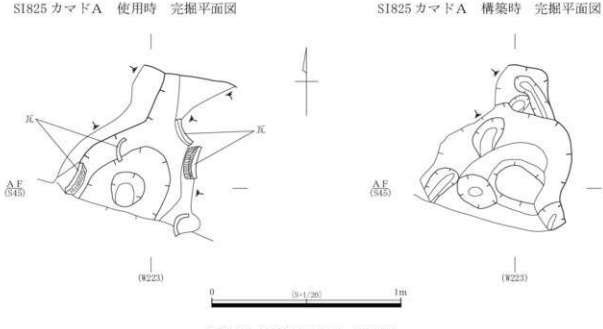
SI825 カマドB　構築時　完掘平面図



第 32 図　SI825 カマドB　平面図

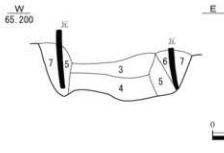


第 33 図　SI825 使用時、及び SX359 完掘平面図

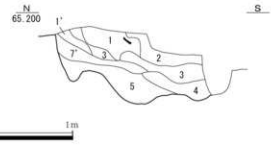


第 34 図　SI825 カマドA　平面図

SI825　カマドＡ土層断面図

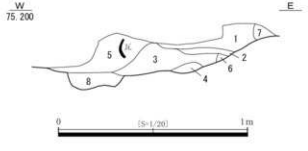


SI825　カマドＡ土層断面図



1．10YR4/4　褐色土　　粘性なし、しまりややあり、焼土粒、黄白色粘土粒、Ⅳ層ローム粒子を多量含む。（崩壊土）
1'．10YR4/4　褐色土　　粘性なし、1に似るがしまりあり。（崩壊土）
2．10YR3/2　黒褐色土　　粘性なし、しまりややあり、焼土粒、1～2cmの白灰色粘土粒を含む。（崩壊土）
3．5YR6/8　橙色土　　粘性なし、しまりややあり、焼土塊、黄白色粘土、炭化物を少量含む。（炉床）
4．10YR3/2　黒褐色土　　粘性なし、しまりあり、ローム粒、焼土粒を少量含む。（構築土）
5．10YR3/2　黒褐色土　　粘性なし、しまりあり、ローム粒、ロームブロックを20～30%含む。（構築土）
6．10YR3/2　黒褐色土　　粘性なし、しまりあり、1～5mmの焼土粒を1～5%含む。（構築土）
7．10YR3/2　黒褐色土　　粘性なし、しまりあり、ローム粒、0.5～1cmの黄白色粘土粒を4～5%、焼土粒1～2%含む。（構築土）
7'．10YR3/2　黒褐色土　　7に似るが黄白色粘土ブロックが部分的に多く含む。（構築土）

SI825　カマドＢ土層断面図



1．10YR4/4　褐色土　　粘性なし、しまりややあり、焼土粒、3mm～3cmのロームブロック多量、5～10mmの黄白色粘土ブロック含む、瓦片出土。（崩壊土）
2．10YR4/4　褐色土　　粘性なし、しまりあり、Ⅳ層ローム粒子多量、焼土粒、粘土粒、少量含む。（構築土）
3．10YR4/4　褐色土　　粘性なし、しまりややあり、焼土粒、黄白色粘土粒、Ⅳ層ローム粒子多量含む。（崩壊土）
4．10YR3/2　黒褐色土　　粘性なし、焼土粒、1～3cmの黄白色粘土ブロック少量含む。
5．10YR3/2　黒褐色土　　粘性なし、焼土粒、3～8mmの粘土粒少量含む。4に似る。（崩壊土）
6．10YR3/2　黒褐色土　　粘性なし、しまり良い、焼土粒少量含む。（構築土）
7．10YR4/4　褐色土　　粘性なし、部分的にしまり悪い、Ⅳ層ローム粒子多量含む。2に似る。（構築土）
8．10YR5/6　黄褐色土　　粘性なし、部分的にしまりあり、Ⅳ層ロームブロック50%含み、黒褐色土が50%斑に入る。

第 35 図　SI825 カマドＡ・Ｂ　断面図

第 36 図　SI825 カマドＡ土層断面（西から）

第 37 図　SI825 カマドＢ土層断面（南から）

P-1　土層断面図

1.10YR3/2　黒褐色土
粘性なし、しまりあり、土器片入る。
ローム粒少量、1～2cmの炭化物少量含む。
2.10YR6/8　黄褐色土
粘性なし、しまり部分的に弱い、ローム粒60%、
黒褐色土40%。

P-2　土層断面図

1.10YR5/6　黄褐色土
粘性なし、しまりなし、ボソボソしている。
5～10mmの焼土粒50～60%含む。
2.10YR5/6　黄褐色土
粘性なし、しまり部分的に弱い。
ローム粒、焼土粒部分的に10～20%含む。
黒褐色土、斑状に30%混入。

P-3　土層断面図

1.10YR5/6　黄褐色土
粘性やややあり、しまりややあり、ローム粒50～60%、
炭化物粒、焼土粒少量含む。
2.10YR3/2　黒褐色土
粘性なし、しまりややあり、ローム粒５～10%含む。
3.10YR6/8　黄褐色土
粘性なし、しまり弱い、ロームブロック主体土。

P-4　土層断面図

1.10YR5/6　黄褐色土
粘性なし、しまりややあり、
1～3mmの黒褐色土粒少量、
赤色スコリア少量含む。
2.10YR4/3　にぶい黄褐色土
1に似るが、しまりややあり。

P-5　土層断面図

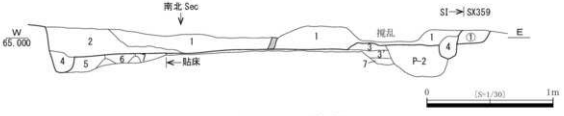
1.10YR3/2　黒褐色土
粘性なし、しまりやあり、3～5mmのローム粒５～
10%、赤色スコリア・炭化物５～6%含む。
2.10YR3/3　暗褐色土
1に似るが、ローム粒少なく、しまり1よりあり。
3.10YR6/8　黄褐色土
粘性なし、しまり部分的に弱い。
ローム粒・ブロック主体土。

P-6　土層断面図

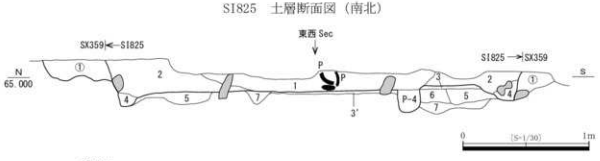
1.10YR2/2　黒褐色土
粘性ややあり、しまりあり。
赤色スコリア少量含む。
2.10YR2/2　黒褐色土
粘性ややあり、しまりあり、1層に似る。5～
10mmのローム粒５～10%含む。
3.0YR2/2　黒褐色土
粘性なし、しまりややあり、ローム粒30%～
40%含む。

第 38 図　SI825 内 Pit 土層断面図

SI825　土層断面図（東西）



SI825　土層断面図（南北）



SI825

1. 10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまりややあり。2～3mmの焼土粒・ローム粒少量、2～3cmの炭化物微量含む。
2. 10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまりややあり。1より黒味あり。焼土粒・ローム粒は1より多くあり。炭化物も微量含む。
3. 10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまりあり。焼土粒・ローム粒少量入る。上層に焼土堆積層あり。(SI825貼床)
3'. 10YR3/2　黒褐色土　3に似る。(SI825貼床)
4. 10YR5/8　黄褐色土　粘性なし、しまりやや悪い。ローム粒多く入る。(SI825周溝覆土)

SX359

①. 10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、2よりしまり弱い。2に似るがやや黒味強い。3～4cmロームブロック微量含む。
5. 10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまりややあり、ロームブロック20～30%、赤色スコリア・炭化物微量含む。
6. 10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまりややあり。1に似るがローム粒は1より多く30～40%含む。
7. 10YR6/8　黄褐色土　粘性なし、しまり弱い、ロームブロック主体土。

第 39 図　SI825・SX359　土層断面図

第 40 図　B トレンチ　SD430 全景（南から）

第 41 図　B トレンチ　SD433 全景（北から）

第 42 図　B トレンチ　SD430 断面（北から）

第 43 図　B トレンチ　SD433 断面（南から）

第 44 図　B トレンチ　SI824 検出状況（北から）

第 45 図　B トレンチ　SX360 断面・遺物出土状況（北から）

第 46 図　Ｃトレンチ　全景（北から）

第 47 図　Ｃトレンチ　SD434 検出状況（南から）

第 48 図　Ｃトレンチ　波板状圧痕プラン検出状況（北から）

第 49 図　Ｃトレンチ　硬化面検出状況（南から）

第 50 図　Ｃトレンチ　波板状の掘り込み完掘状況（北から）

第 51 図　Ｃトレンチ　西壁土層断面（東から）

第 52 図　Ｄトレンチ　全景（北から）

第 53 図　Ｄトレンチ　SD432 断面（南から）

第 54 図　Ｄトレンチ　SD432 北側全景（上が南）

第 55 図　Ｄトレンチ　SD432 中央全景（西から）

第 56 図　Ｄトレンチ　南壁土層・SD432 断面（北から）

第 57 図　Ｅトレンチ　全景（東から）

第 58 図　Ｅトレンチ　SD431 断面（北から）

第 59 図　Ｅトレンチ　SX362 検出状況（東から）

第 60 図　Ｅトレンチ　SX362 断面（北から）

第 61 図　Ｆトレンチ南　遺構検出状況（東から）

第 62 図　Ｆトレンチ南　SI822・823 周溝（北から）

第 63 図　Ｆトレンチ南　SI822・823 完掘全景
（南から）

第 64 図　Ｆトレンチ南　SI822 カマド構築時
（西から）

第 65 図　Ｆトレンチ南　南壁土層断面況（北から）

第 66 図　Ｆトレンチ南　SI822　P-2 断面（西から）

第 67 図　F トレンチ北　SI825 覆土断面（南から）

第 68 図　F トレンチ北　SI825 覆土断面（西から）

第 69 図　F トレンチ南　SI825 カマドA使用時
（上が西）

第 70 図　F トレンチ南　SI825 カマドBおよび
周辺の焼土検出状況（上が東）

第 71 図　F トレンチ　SI825 使用時全景（北から）

第 72 図　F トレンチ　SI825・SX359 構築時全景
（北から）

第 73 図　SI825　P-1 断面
（南から）

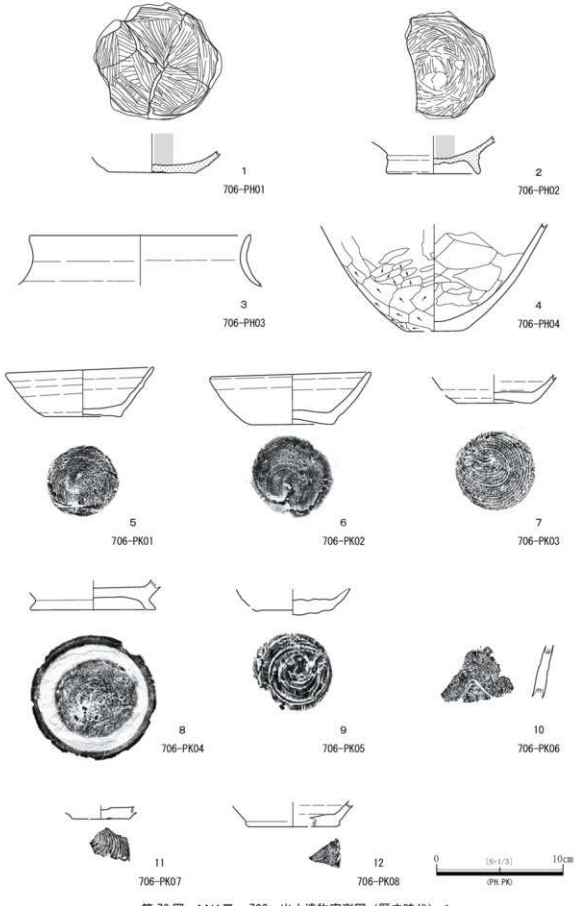
第 74 図　SI825　P-2 断面
（北から）

第 75 図　SI825　P-3 断面
（南から）

第 76 図　SI825　P-4 断面
（北から）

第 77 図　SI825　P-5 断面
（南から）

第 78 図　SI825　P-6 断面
（東から）



第 79 図　ＭＫⅢ－ 706　出土遺物実測図（歴史時代）１

1
706-PH01

2
706-PH02

3
706-PH03

4
706-PH04

5
706-PK01

6
706-PK02

7
706-PK03

8
706-PK04

9
706-PK05

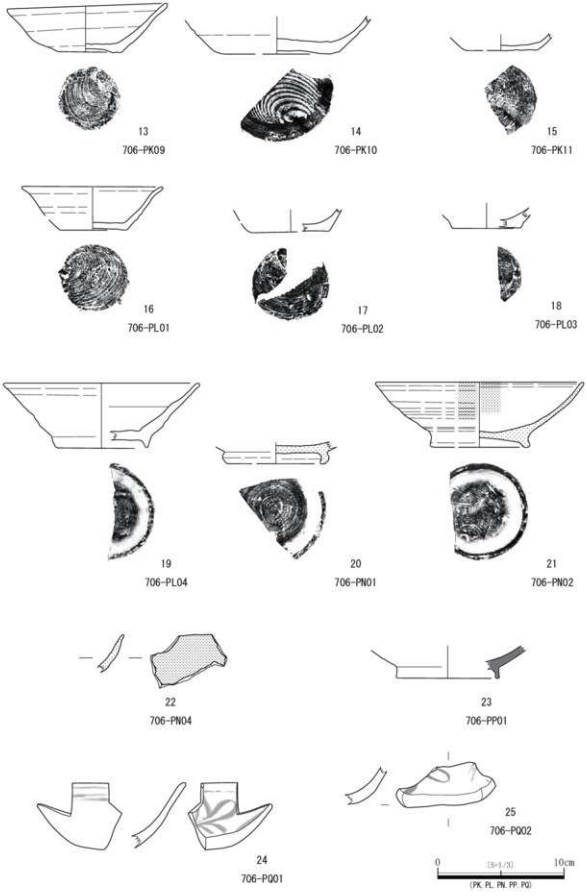
10
706-PK06

11
706-PK07

12
706-PK08

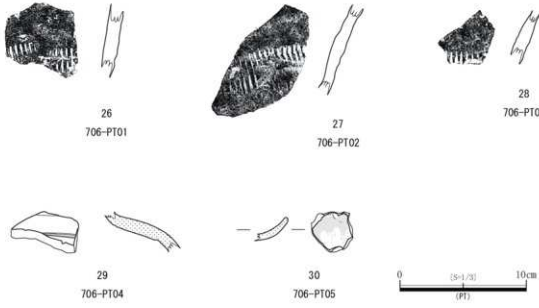
0　(S=1/3)　10cm
(PH, PK)

第 80 図　ＭＫⅢ－ 706　出土遺物写真（歴史時代）１



第 81 図　ＭＫⅢ－ 706　出土遺物実測図（歴史時代）２

第 82 図　ＭＫⅢ－ 706　出土遺物写真（歴史時代）２



第 83 図　ＭＫⅢ－ 706　出土遺物実測図（歴史時代）３

第 84 図　ＭＫⅢ－ 706　出土遺物写真（歴史時代）３

706-PK06　不明ヘラ書き

706-KC02「佛」？

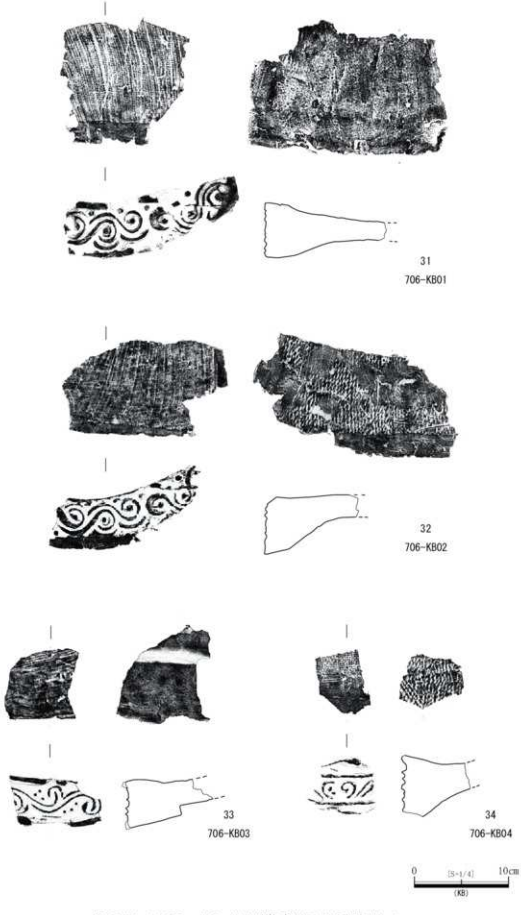
706-KD02 端面「那」

706-KD08 「大」

706-KD11 文字「荏」

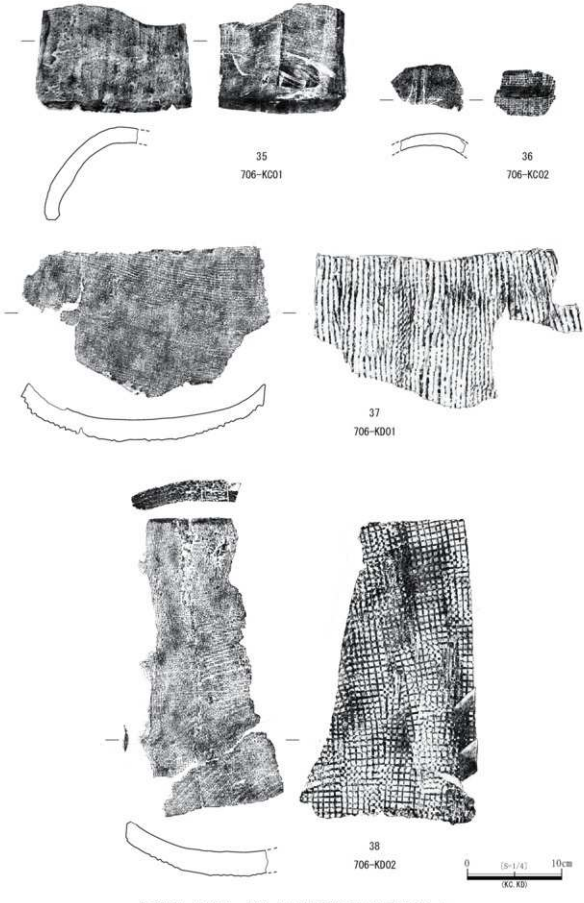
0　(S=1/1)　25mm

第 85 図　ＭＫⅢ－ 706　出土遺物文字記号集成写真



第 86 図　ＭＫⅢ－ 706　出土遺物実測図（歴史時代）４

第 87 図　ＭＫⅢ－ 706　出土遺物写真（歴史時代）４



第 88 図　ＭＫⅢ－ 706　出土遺物実測図（歴史時代）５

35
706-KC01

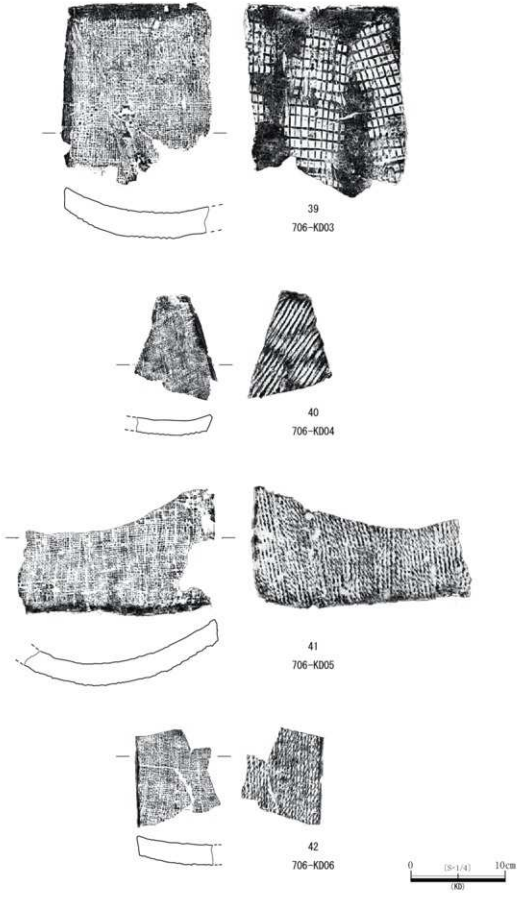
36
706-KC02

37
706-KD01

38
706-KD02

0　(S=1/4)　10cm
(KC, KD)

第 89 図　ＭＫⅢ－ 706　出土遺物写真（歴史時代）５



第 90 図　ＭＫⅢ－ 706　出土遺物実測図（歴史時代）６

39
706-KD03

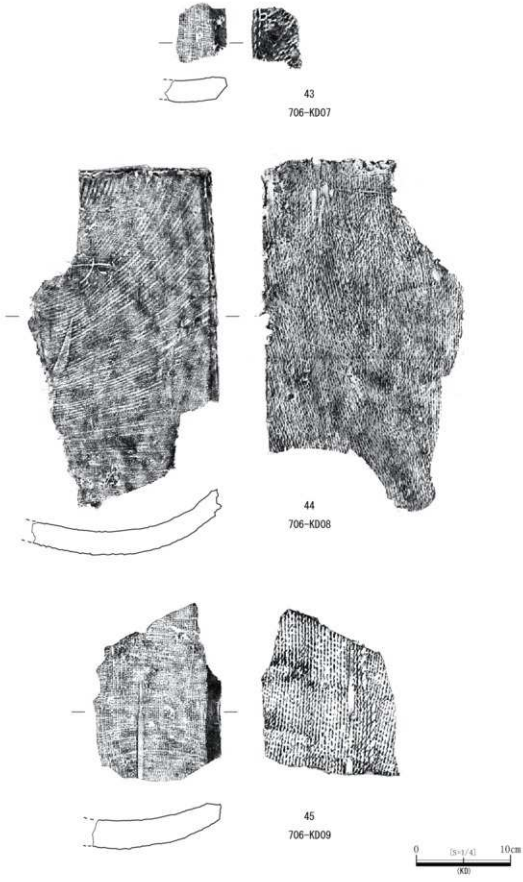
40
706-KD04

41
706-KD05

42
706-KD06

0　[S=1/4]　10cm
(KD)

第 91 図　ＭＫⅢ－706　出土遺物写真（歴史時代）６

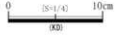


第 92 図　ＭＫⅢ－ 706　出土遺物実測図（歴史時代）７

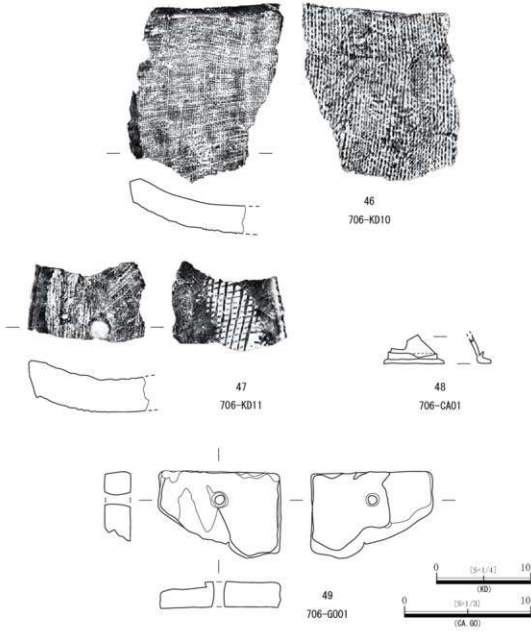
43
706-KD07

44
706-KD08

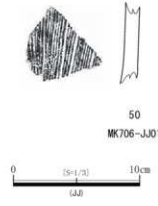
45
706-KD09



第 93 図　ＭＫⅢ－ 706　出土遺物写真（歴史時代）７



第 94 図　ＭＫⅢ－ 706　出土遺物実測図（歴史時代）８



第 95 図　ＭＫⅢ－ 706　出土遺物実測図（縄文時代）

46
706-KD10

47
706-KD11

48
706-CA01

49
706-G001

0　(S=1/4)　10cm
(KD)

0　(S=1/3)　10cm
(CA, GO)

第 96 図　ＭＫⅢ－ 706　出土遺物写真（歴史時代）８

50
MK706-JJ01

0　(S=1/3)　10cm
(JJ)

第 97 図　ＭＫⅢ－ 706　出土遺物写真（縄文時代）

第２表　ＭＫⅢ－706　遺物観察表（１）

ＭＫⅢ－706			歴史時代　土　器				
番号 遺物番号	種別 器種	出土 位置	口径 器高 底径 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	残量	備考
1 PH01	土師器 塊	SI825 覆土	— (1.75) 6.8	平らな底部から体部は緩く内湾して立ち上がる。	体部外面下端から底部外周回転ヘラケズリの後、ヘラミガキ。見込み放射線状のヘラミガキの後、体部内面ヨコヘラミガキ。内面黒色処理。	底部 完形	外面：にぶい橙色7.5YR6/4。内面：黒色N2/0。やや堅い。焼成普通。微砂粒微量。雲母微量。
2 PH02	土師器 高台付塊	表土	— (3.0) ((7.2))	高台部はやや高く、ハ字状に開く。高台の断面形は細い三角形。	高台貼付。底部外周ナデ。見込み～体部内面不定方向のヘラミガキ。内面黒色処理。	底部 2/3	外面：褐灰色10YR4/1。内面：黒色N2/0。やや堅い。焼成普通。微砂粒微量。石英微量。高台高0.7㎝。
3 PH03	土師器 甕	SI825 覆土	((17.4)) (4.1) —	口縁部はく字状を呈する。	口縁部ヨコナデ。	口縁部 小片	内外面：にぶい赤褐色5YR4/4。軟らかい。焼成普通。微砂粒やや多量。石英少量。
4 PH04	土師器 甕	SX360 覆土	— (8.5) ((4.8))	底部から直線的に立ち上がる。	底部ヘラケズリ。胴下部外面ヨコヘラケズリ。胴部内面ヘラナデ。	胴部～ 底部 1/6	内外面：にぶい赤褐色5YR4/3。軟らかい。焼成普通。微砂粒少量。2～5㎜の小石微量。石英少量。
5 PK01	須恵器 坏	SI825ｶｸﾄﾞB崩壊土	11.6 3.9 6.1	底部から内湾気味に立ち上がる。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。体部外面にタテ方向のヘラ書き痕。	完形	内面：灰黄色2.5Y7/2。外面：灰白色2.5Y7/1。堅い。焼成普通。微砂粒少量。1～3㎜の角礫微量。
6 PK02	須恵器 坏	SI825 覆土	12.5 4.1 6.6	体部は内湾気味に立ち上がる。底部～体部下半は肥肉。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	口縁部 ～底部 2/3	内外面：黄灰色2.5Y5/1。堅い。焼成普通。微砂粒少量。1～6㎜の角礫2/3量。
7 PK03	須恵器 坏	SI825ｶｸﾄﾞB崩壊土	— (2.3) 6.0	底部から内湾して立ち上がる。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	底部 完形	内外面：褐灰色10YR5/1。堅い。焼成普通。微砂粒微量。1～5㎜の角礫微量。見込みと底部に煤付着。灯明？。
8 PK04	須恵器 長頸瓶	SI825 覆土	— (2.4) ((9.7))	高台は角高台を呈する。	ロクロ調整の後、胴部外面下半～底部外周回転ヘラケズリをし、高台貼付。底部指ナデ。	底部 完形	内外面：灰白色5Y7/1。堅い。焼成普通。微砂粒少量。1～5㎜の角礫微量。白色針状物質やや多量。高台高1.0㎝。
9 PK05	須恵器 坏	SD433 覆土	— (2.1) 6.2	体部は内湾する。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	底部 1ほぼ 完形	内外面：灰黄色2.5Y7/2。やや軟らかい。焼成普通。微砂粒少量。1～3㎜の角礫少量。
10 PK06	須恵器 甕	SD430 覆土	— — —	小片のため全体の器形は不明。	胴部内面ナデ。胴部外面に不明ヘラ書き。胴部内面の一部に濃緑色の降灰釉。	小片	内外面：灰色7.5Y4/1。堅い。焼成普通。微砂粒やや多量。1～3㎜の角礫少量。
11 PK07	須恵器 坏	SF1 硬質面直上	— (0.9) ((4.4))	底部はやや肉厚。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	底部 小片	内外面：灰色N5/0。堅い。焼成普通。微砂粒やや多量。1㎜大の小石微量。白色針状物質やや多量。
12 PK08	須恵器 坏	SF1 硬質面直上	— (2.0) ((7.0))	底部はやや肉厚。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	底部 小片	内外面：暗灰黄色2.5Y5/2。堅い。焼成普通。微砂粒やや多量。1㎜大の角礫微量。
13 PK09	須恵器 坏	SX360 覆土	12.5 3.9 5.1	体部はやや直線的に立ち上がる。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	1ほぼ 完形	内外面：にぶい黄橙色10YR7/4。やや軟らかい。焼成普通。微砂粒やや多量。1～2㎜の角礫少量。胎土やや粗い。
14 PK10	須恵器 坏	撹乱	— (3.0) ((8.2))	底部はやや肉厚。体部は内湾して立ち上がる。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、体部下端～底部外周回転ヘラケズリ。底部に火襷の痕跡（重ね焼き）。	体部～ 底部 1/4	内外面：灰黄色2.5Y7/2。堅い。焼成普通。微砂粒微量。
15 PK11	須恵器 坏	表土	— (1.4) ((5.6))	体部は内湾気味に立ち上がる。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、回転ヘラケズリ。	底部 1/3	内外面：灰褐色7.5YR5/2。堅い。焼成普通。微砂粒やや多量。1～5㎜の角礫微量。白色針状物質やや多量。
16 PL01	土師質 土器 坏	SX360 覆土	((11.0)) 3.4 5.2	体部下半は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	口縁～ 底部 底部完 形	内外面：にぶい黄橙色10YR6/4。やや軟らかい。焼成普通。微砂粒微量。金雲母やや多量。
17 PL02	土師質 土器 坏	SX360 覆土	— (1.9) ((6.0))	底部から内湾して立ち上がる。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	底部 3/4	内外面：にぶい褐色7.5YR5/4。やや軟らかい。焼成普通。微砂粒やや多量。石英微量。
18 PL03	土師質 土器 坏	P-1 覆土	— (1.6) ((5.4))	平らな底部から体部は緩く外反して立ち上がる。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	底部 小片	内外面：橙色5YR6/6。軟らかい。焼成普通。微砂粒少量。
19 PL04	土師質 土器 高台付坏	排土	((15.4)) 5.2 ((7.2))	体部下半は内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。高台は低く、断面三角形。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、高台貼付。見込みの調整粗い。	口縁～ 底部 1/4	内外面：にぶい赤かっぱ色5YR4/4。軟らかい。焼成普通。微砂粒少量。1～5㎜の角礫微量。石英微量。胎土やや粗い。高台高0.7㎝。
20 PW01	灰釉陶器 皿	SD433 覆土	— (1.7) ((7.7))	内側が内湾する三日月高台。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、回転ヘラケズリ。高台貼付。見込みに研磨痕あり。	底部 2/3	内外面：褐灰色10YR6/1。堅い。焼成普通。微砂粒微量。高台高0.8㎝。
21 PW02	灰釉陶器 椀	SX360 覆土	((16.5)) 5.2 ((7.7))	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部はやや外反する。低い角高台。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、高台貼付。体部外面・体部内面全面に刷毛塗りによる施釉。見込みに重ね焼きの痕跡。後円部外面の一部と体部内面下端にオリーブ灰色の釉。	口縁～ 底部 1/2	内外面：灰白色2.5Y7/1。堅い。焼成普通。微砂粒微量。1～2㎜の角礫微量。高台高0.7㎝。
22 PW04	灰釉陶器 皿	排土	— (1.8) ～	口縁部やや外反する。	体部内外面回転ナデ。体部外面口縁部から内面全面刷毛塗りによる淡緑色の施釉。	口縁～ 体部 小片	猿投窯（黒笹90号窯式）。内外面：褐灰色10YR6/1。堅い。焼成普通。微砂粒微量。

第３表　ＭＫⅢ－ 706　遺物観察表（２）

ＭＫⅢ－ 706　　歴史時代　　土　器

番号 遺物番号	種別 器種	出土 位置	口径 器高 底径 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴		残量	備考
23 PP01	緑釉陶器 椀蓋	SX360 覆土	— (2.6) (8.1)	強く内湾する低い三日月高台。体部内面に１条の沈線を巡らすことから椀蓋と思われる。	ロクロ調整の後、高台貼付。内外面全面に淡緑色の釉。		底部 小片	断面：灰色 5Y6/1。堅い。焼成普通。粕土鐵密。高台高 0.7 cm。
24 PQ01	青磁 碗	表土 (排土)	— (5.2) —	体部はやや内湾して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	淡灰緑色の釉。貫入普通。釉層普通。体部内面に劃花文。		小片	龍泉窯系青磁碗Ⅰ類？（12 世紀後半～ 13 世紀前半）。断面：灰白色 10YR7. 5/1。硬質。焼成良好。白色粒極微量。
25 PQ02	青磁 碗	SD433 付 近表土	— (3.0) —	体部はやや内湾気味に立ち上がる。	淡灰緑色の釉。貫入やや多量。釉層普通。体部内面・見込みに劃花文。		小片	龍泉窯系青磁碗Ⅰ類？（12 世紀後半～ 13 世紀前半）。断面：灰白色 10YR7. 5/1。硬質。焼成良好。
26 PT01	瀬美 甕	SD433 覆土	— (5.8) —	肩部は内傾する。	肩部内面ヨコヘラナデ。肩部外面に並行叩きを施す。		肩部 小片	瀬美窯（13 世紀）。断面：黄灰色 2. 5Y6/1。堅い。焼成普通。微砂粒やや多量。１～２mmの白色礫多量。
27 PT02	瀬美 甕	SD433 覆土	— (7.1) —	肩部は内傾する。	肩部内面ヨコヘラナデ。肩部外面に並行叩きを施す。		肩部 小片	瀬美窯（13 世紀）。断面：灰色 5Y5/1。堅い。焼成普通。白色微・小砂粒多量、１～３mmの白色礫少量。
28 PT03	瀬美 甕	表土	— (4.3) —	肩部は内傾する。	肩部内面ヨコヘラナデ。肩部外面に並行叩きを施す。		肩部 小片	瀬美窯（13 世紀）。断面：灰色 5Y5/1。堅い。焼成普通。白色微・小砂粒多量、１～３mmの白色礫少量。
29 PT04	常滑 三筋壺	表土	— (3.0) —	肩部は緩やかに内傾する。	肩部内面ヨコヘラナデ。肩部外面にヘラ状工具で水平に２条の沈線を施す。肩部外面にオリーブ灰色の降灰釉。		肩部 小片	内面：にぶい黄橙 10YR5/3。堅い。焼成普通。微砂粒少量。
30 PT05	灰釉 菊皿	撹乱	— (1.0) —	口唇部に輪花状の刻み目を施す。	口唇部内外面に濃黄緑色の釉。		小片	瀬戸・美濃窯（18 世紀）。断面：黄色 2. 5Y8/6。やや軟らかい。焼成普通。微砂粒微量。

ＭＫⅢ－ 706　　歴史時代　　宇　瓦

番号 遺物番号	出土 位置	上限弧幅 下限弧幅 弧深 (cm)	厚さ (cm)	内区		外区				脇区		文様 深さ (cm)	全長 (cm)	備考
						上		下						
				厚さ (cm)	文様	厚さ (cm)	文様	厚さ (cm)	文様	幅 (cm)	文様			
31 KB01	SI825 覆土	(8. 5) (18. 1) —	5. 7	4. 5	HK	0. 7	a	0. 5	a	右 (0. 9)	a	0. 2	(12. 6)	偏行唐草文。製作技法 D。曲縄類：形態 C1-a。堅い。焼成普通。回面布目（21 × 18）。一部にタテナデ。女瓦部の素材粘土横結。黄灰色 2. 5Y4/1。微砂粒多量。１～ 10 mmの角礫少量。外区下端に格状圧痕。
32 KB02	SI825 覆土	(13. 0) (15. 0) —	5. 3	4. 2	HK	—	a	1. 1	a	—	—	0. 2	(7. 7)	偏行唐草文。製作技法 D。曲縄類：形態 C1-a。堅い。焼成普通。回面布目（(18 × 18)）。凸面縄叩きの後、一部タテナデ。褐灰色 10YR5/1。微砂粒多量。１～８mmの角礫少量。
33 KB03	SD430 覆土	(6. 8) (10. 4) —	((5. 0))	3. 4	KK	((0. 7))	a	((0. 9))	a	—	—	0. 3	(7. 1)	均整唐草文。製作技法不明。曲縄類：形態 C1。堅い。焼成普通。回面布目（(21 × 18)）。凸面縄叩き。灰色 7. 5Y5/1。微砂粒多量。１～４mmの角礫少量。黄金子窯。
34 KB04	表土	(5. 5) (7. 0) —	(5. 9)	3. 0	HK	(1. 7)	a	(1. 2)	a	—	—	0. 4	(6. 7)	偏行唐草文。製作技法 B。段類：形態 B2-a。堅い。焼成普通。回面布目（(18 × 18)）。布目を消すヨコナデ。にぶい褐色 7. 5YR5/3。微砂粒多量、１～３mmの角礫やや多量、白色針状物質少量。

ＭＫⅢ－ 706　　歴史時代　　男　瓦

番号 遺物番号	出土 位置	狭端 広端 全長 (cm)	厚さ (cm)	成・整形の特徴							備考
				素材	凹面		凸面		端面		
					布目	特徴	叩き	特徴	特徴		
35 KC01	SI825 ｶｯﾄﾞA 崩壊土	— (9. 7) (11. 8)	1. 6	粘土 横結	26 × 28	広・側端縁ヘラケズリ。全体タテナデ。	—	側端縁ヘラケズリ。全体タテナデ。	広・側端面ヘラケズリ。	—	無段。灰白色 10YR7. 5/1。堅い。焼成普通。微砂粒やや多量。１～８mmの角礫少量。
36 KC02	SI825 覆土	— — (5. 5)	1. 2	—	((12 × 15))	一部指ナデ。	—	全体ヨコナデ。ヘラ書「佛」？あり。	—		無段。灰白色 5Y4. 5/1。堅い。焼成普通。微砂粒多量。１～３mmの角礫少量、石英微量。

第４表　ＭＫⅢ－706　遺物観察表（３）

ＭＫⅢ－706　歴史時代　女　瓦

番号 遺物番号	出土 位置	狭端 広端 全長 (cm)	厚さ (cm)	成・整形の特徴 素材	凹面 布目	凹面 特徴	凸面 叩き	凸面 特徴	端面 特徴	備考
37 KD01	SI825 ｶｸﾄﾞB 構築土	(23.5) — (15.5)	2.0	—	21×21	—	縄目 L6	縄目叩きの後、無調整。	狭・側端面ヘラケズリ。	灰色2.5Y7.5/1。堅い。焼成普通。微砂粒多量、1～10㎜の角礫やや多量、黒雲母微量。
38 KD02	SI825 ｶｸﾄﾞA 構築土	(11.4) — (31.4)	2.6	粘土板？	18×18	狭端縁ナデ。	正格子	正格子叩きの後、側端縁の一部無文叩き具による調整あり。	狭・側端面ヘラケズリ。狭他端面に押印「那」(那珂都・ｺﾛ1-1型)あり。	灰色5Y5/1。堅い。焼成普通。微・小砂粒微量1～10㎜の角礫少量。
39 KD03	SI825 ｶｸﾄﾞB 構築土	(15.5) — (19.0)	2.8	—	15×17	狭端縁ヘラケズリ。一部指ナデ。	正格子	正格子叩きの後、一部指ナデ。	狭・側端面ヘラケズリ。	灰色5Y6/1。堅い。焼成普通。微砂粒多量、1～20㎜の角礫少量、白色針状物質やや多量。
40 KD04	SI825 覆土	(3.6) — (11.0)	1.5	—	24×23	側端縁面取り。	平行叩き	平行叩き。	狭・側端面ヘラケズリ。	浅黄色2.5Y7/3。堅い。焼成普通。小砂粒多量、1～7㎜の角礫少量。
41 KD05	SD433 覆土	(21.0) (13.9)	2.2	—	15×15	広端縁ナデ。	縄目 R6	縄目叩きの後、広端縁ナデ。	広端面ナデ。側端面ヘラケズリ。	灰色5Y5/1。堅い。焼成普通。微砂粒やや多量、1～3㎜の角礫少量、石英微量。
42 KD06	SF1 硬質面 直上	— — (9.8)	2.1	粘土 横紐	20×15	側端縁面取り。	縄目 L9	縄目叩きの後、側端縁面取り。	側端面ヘラケズリ。	灰色5Y4.5/1。堅い。焼成普通。微砂粒微量、1～3㎜の角礫微量。
43 KD07	SF1 上層	— — (6.9)	2.3	—	18×15	側端縁ヘラケズリ。	縄目 ((9))	縄目叩きの後、一部指ナデ。側端縁面取り。	側端面ヘラケズリ。	黄灰色2.5Y6/1。堅い。焼成普通。微砂粒少量、1～6㎜の角礫微量、石英微量。
44 KD08	SX360 撹乱	(14.0) — (38.2)	2.5	粘土板？	22×19	狭・側端縁ヘラケズリの後、一部ナデ。ヘラ書「大」あり。	縄目 R10	縄目叩き。	狭・側端面ヘラケズリ。	灰白色2.5Y7/1。堅い。焼成普通。微砂粒微量、1～10㎜の角礫微量。
45 KD09	SX360 覆土	— — (18.6)	2.8	粘土板？	15×17	側端縁ヘラケズリ。棒状具の圧痕あり。	縄目 L9	縄目叩き。棒状具の圧痕あり。	側端面ヘラケズリ。	黄灰色2.5Y6/1。堅い。焼成やや不良。微砂粒少量、1～3㎜の角礫微量。
46 KD10	表土	(14.4) — (18.7)	2.9	粘土板？	14×18	狭・側端縁面取り。	縄目 L8	縄目叩き。	狭・側端面ヘラケズリ。	灰黄色2.5Y6/2。堅い。焼成普通。微砂粒微量、1～6㎜の角礫微量。
47 KD11	表土	— — (9.8)	3.5	—	((18×18))	側端縁ヘラケズリの後、面取り。一部タテナデ。	斜格子	斜格子叩きの後、一部ナデ。押型「在」(在原都)あり	側端面ヘラケズリ。	灰色N4/0。堅い。焼成普通。微砂粒微量、1～3㎜の角礫少量、石英微量。

ＭＫⅢ－706　歴史時代　陶　硯

番号 遺物番号	種別 器種	出土 位置	底径 器高 厚さ (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	残量	備考
48 CA01	円面硯	SI825 覆土	((20.0)) (2.3) 0.3	透かし１方所確認。脚部下端に装飾の断面三角形の突帯が巡る。	内外面ロクロナデ。	脚部 小片	胴足円面硯。須恵質。暗褐色7.5YR3/3。堅い。焼成普通。微砂粒やや多量。石英微量。白色針状物質少量、2㎜大の角礫微量。

ＭＫⅢ－706　歴史時代　石製品

番号 遺物番号	種別 器種	出土 位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	特徴	備考
49 G001	温石	表土	(6.6)	(9.7)	2.0	228	方形もしくは長方形。小孔１カ所。側面に加工痕あり。表面は丁寧に面を造りだす。裏面はやや粗い仕上げ。	滑石製。中世。小孔径８～10㎜。

ＭＫⅢ－706　縄文時代　土　器

番号 遺物番号	種別 器種	出土 位置	口径 器高 底径 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
50 JJ01	深鉢？	表土	— (5.7) —	胴部片。小片のため全体の器形不明。	外面に縦位の細沈線文。内面丁寧なナデ調整。	中期。内外面：明褐色7.5YR5/6。焼成良好。砂粒・角礫・長石粒・雲母少量。

第２節　武蔵国分寺跡第 707 次調査

所 在 地	西元町二丁目 17 － 16		
調査原因	集合住宅建設	**調査種別**	発掘調査
調査費用	事業者負担	**調査体制**	委託
調査期間	平成 27 年４月１日～ 12 月 25 日		
調査面積	620.14 ㎡	**遺物箱数**	１箱
検出遺構	SK3453、P-1 ～ 3、SK3451J・3452J 3456J、PJ-1 ～ 9、地下防空壕		
主な遺物	須恵器・瓦、縄文土器・石器		

第 98 図　ＭＫⅣ－ 707　調査地位置図

【１．調査に至る経緯と経過】　本調査は市教委へ提出された平成 27 年１月 19 日付国教教ふ収第 757 号文化財保護法第 93 条第１項届出に基づき、調査会が届出者である明和地所株式会社（以下、明和地所と称する）と委託契約を締結して実施したものである。

調査区は、国分寺市西元町二丁目 17-13・16 に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地である武蔵国分寺跡（遺跡№.19）に該当する。

平成 27 年１月 15 日、市教委ふるさと文化財課へ以前より電話で問い合わせのあった本件の埋蔵文化財協議者代理人（以下、協議者と称する）が来庁し、西元町二丁目 17-16 におけるマンション建設計画について、着工予定が同年８月頃であること、工事は地下約２ｍの掘削を伴うことなどが提示された。

これを受けて市教委は、周辺での調査履歴を精査し、当該地の南側は市立歴史公園東山道武蔵路跡であり、同区域の先行調査では道路の側溝や竪穴住居、祭祀の痕跡などが見つかっていること、道路を挟んだ東側にある市立第四小学校内では竪穴住居や掘立柱建物などの遺構が密に検出されていること、東隣の敷地では既往調査で縄文時代の土坑が検出されていることなどから、本地においても奈良・平安時代及び縄文時代の遺構が存在している可能性が予測され、工事前に発掘調査が必要であることを伝えた。

その後１月 19 日に提出された届出を受け、翌日より明和地所び協議者と発掘調査の主体者や調査方法、期間、費用についての調整を数回行い、同年４月１日付けで調査会と明和地所間で「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結し、同日より発掘調査を開始した。調査にあたっては、明和地所よりバックホー、オペレーター、ユニットハウスの提供を受けた。

調査は３期に分けて実施し、第１期は平成 27 年４・５・６月まで調査区の北側区域を中心に行った。第１期調査期間中に、当該地の東側（西元町二丁目 17-13）へ開発計画が拡張されることになり、建物計画が変更となったため、明和地所と調査範囲の変更や、既存建物解体に伴う調査中断の期間等について協議を行い、７月 31 日付けで委託変更契約（第１回）を交わした。

第２期は８・９月にかけて実施し、計画変更後のレイアウトに即して調査区を当初の位置から南側へ拡張し、主に調査区の南西部分を対象として行った。その後 10 ～ 11 月に開発範囲が拡張された東側の敷地に建っていた既存建物の大部分が解体されたことを受け、12 月に第３期調査を行った。第３期調

査の区域は北側の建物のある範囲と南側の庭に分かれており、はじめに庭の部分から先行して調査を実施した。既存建物の地下については、昭和53年度に先行して埋蔵文化財調査（武蔵国分寺跡第67次調査・未報告）を実施していたが、深基礎部分のみを対象とした調査で、一部に未掘範囲が残っていた。このため、調査計画では庭の調査後に既存建物下の未掘範囲を調査する予定であったが、基礎を施工する際に予想より大きく地山を削って建てられていたことが判明したため、既存建物範囲の地下は調査対象外とした。このような調査範囲の縮小を受け、調査費用を減額する必要性が生じたため、委託変更契約（第２回　平成28年１月20日付）を締結した。

調査面積の合計は620.14㎡である。現地調査は平成27年４月１日から同年12月25日（実働73日）まで実施し、報告書作成作業は平成28年９月末日まで行った。

【２．検出された遺構と出土遺物】　調査区は、国分寺崖線より北へ350ｍほどの武蔵野段丘面上に位置する。調査区内の基本層序は、極端な標高差や地形差は認められず、ほぼ同じ様相であった。区域内は地表より約90～100㎝の深さまで、表土（盛土・耕作土含む）に覆われており、その下層から奈良・平安時代の遺構確認面である基本層序Ⅲｂ層が、標高約77.74ｍ付近で検出された。Ⅲｂ層の厚さは約35～40㎝で、比較的良好に遺存している。この層の上面で遺構確認を行ったところ調査区内の北端でSK3453が検出された。このほか古代のピット（小穴）が３基検出されている。

次に縄文時代の遺構を確認するためにⅢｂ層を掘下げたところ、標高約77.35ｍ付近でⅢｃ層に達し、同面で縄文時代の遺構を探ったところ、調査区内の南側でSK3451J・3452J・3456Jが検出された。また、縄文時代のピット９基も確認した。

続いて旧石器時代の遺物の有無を確認するため、部分的に地表より２ｍの深さ、基本層序ではⅣ・Ⅴ層まで掘下げて確認したが遺物の出土はなかった。

調査区内では、中・近世の遺構は確認されなかったが、敷地のほぼ中央で防空壕が検出された。

SK3453土坑（第99～101・112.113図）　遺構は、東山道武蔵路の側溝間中心から西へ約42ｍに位置する。規模は長辺約1.4ｍ、短辺約1.1ｍ、深さは確認面から約0.3ｍで、平面形状は隅丸長方形を呈する。長軸の方向は僧寺伽藍中軸線より約74度西偏する。遺物は、須恵器（１）と男瓦が出土している。

SK3451J土坑（第102・104・106・139～141図）　調査区内の西南で検出された。平面形状はやや不整形な楕円形で、径は約１ｍ、深さは確認面から約0.4ｍである。遺物は出土していない。

SK3452J土坑（第102・104・107・140・142図）　SK3451Jの南西約２ｍの位置で検出された。平面形状は不整形な楕円形で、長径は約1.3ｍ、短径は約１ｍ、深さは0.3ｍである。遺物の出土はなかった。

SK3456J土坑（第102・105・107・143・144図）　調査区内の南端で確認された。平面形状は楕円形を呈し、長軸方向は北東を向く。規模は長径約1.2ｍ、短径約0.6ｍ、深さは約1.0ｍである。底部に逆茂木（さかもぎ）痕のようなものは認められなかったが、規模や大きさから縄文時代の落とし穴と想定される。

また、表土や遺物包含層からは、縄文時代の土器（５～７）や石器（８～11）、奈良・平安時代の瓦（２～４）・土器片が出土している。

地下防空壕（第 99・155・157・158・120 ～ 123 図）　戦時中の防空壕と考えられる地下室状の遺構である。竪坑の入口上部は第１期調査時点までは埋まっており、Ⅲｂ層の遺構確認では撹乱と想定していた。その後、第１期と第２期の調査中断時期に雨水によって竪坑の入口部分の一部が押し流されことで、地中に空間があることが判明した。開口部から中を観察したところ、内部には土が相当量流入しており、天井部付近の数十cmが僅かに埋没を免れている状況であった。入口は狭小だが、南に向かって横室を伴うこと、壁表面の加工が丁寧であることなどから防空壕の可能性を想定した。

国分寺市内での防空壕の記録は乏しく、戦時下の国分寺市の様子を語る上で貴重なものであることから、明和地所に趣旨説明を行い、日程を調整の上、防空壕の基本情報を記録することとなった。入口付近の記録をとったのちに、天井が崩落する恐れがあったため、重機で天井部を掘削した上で、横室に堆積した土を取り除く作業を行った。

入口は約１ｍの方形を呈し、現地表から横室の入口までの深さは約 1.3 ｍである。ただし、現地表面は盛土によって嵩上げされている可能性が高く、当時の深さは現況よりやや浅かったと想定される。入口はおそらく地表面から垂直に竪坑が掘られていたと考えられる。

横室内部の平面形状は、長辺約 2.4 ｍ、短辺約 1.7 ｍの長方形を呈し、床面から天井部までの高さは約 1.8 ｍである。天井部は短辺方向にアーチ状になっていたが、入口付近が最も内湾し、奥壁にかけて徐々に緩やかになってる。遺物は、近現代の指輪やガラス片、貝殻、陶磁器、絶縁配線器具が出土した。

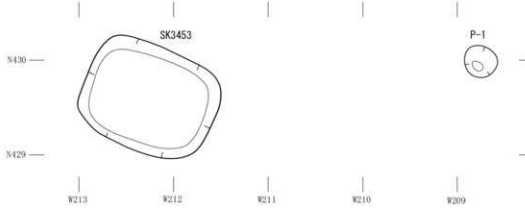
【３．小　結】　本調査区は、武蔵国分寺跡北方地区に該当し、東山道武蔵路の西側に位置している。東山道武蔵路を挟んだ東側で平成８～ 13 年に実施された武蔵国分寺跡第 431・446・481・500・506・507 次調査（国分寺市遺跡調査会 2002、国分寺市遺跡調査会 2003）では、主に９世紀後半から 11 世紀中葉にかけて、掘立柱建物 27 棟、竪穴住居 69 軒など多数の遺構が検出されている。これに対して本調査区の南側で平成 18・21 年に実施された第 616・645 次調査（国分寺市遺跡調査会 2010）では、調査面積はやや狭いものの掘立柱建物１棟、竪穴住居 11 軒の検出と東山道武蔵路の東側に比べて遺構が希薄であることが確認されている。当該地域については、武蔵国分寺の再建期以降に計画された集落であると考えられており、本調査区においても古代遺構が希薄であったことは、武蔵国分寺北方地域の道路沿いの土地利用を考える上で貴重な情報が追加されたといえよう。

縄文時代の遺構については、先に触れた第 616・645 次調査でも土坑 62 基（内、落し穴状土坑３基）、埋め甕を伴う性格不明遺構１基、小穴 312 基が検出されており、多喜窪遺跡の北側にあたることから集落の広がりが確認されていた。本調査区内でも土坑３基（内､落し穴状土坑１基)､小穴９基が検出され、集落がなお北側へ広がることが想定される。なお、土坑は調査区内の南端にまとまって、小穴は調査区内の全体から検出されている。遺物包含層や表土から出土した縄文土器は勝坂Ⅱ、加曽利Ｅ、加曽利Ｅ２の中期を中心としたものである。石器は、尖頭器、石鏃、打製石斧、スタンプ形石器が出土している。

本調査区で不時発見された地下防空壕から出土した遺物は近現代のものが大半である。壕の役割を終えた後にゴミ捨て場として利用し、やがて土が流入して壕内が埋没したものと考えられる。

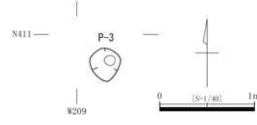
第 99 図　ＭＫⅣ－ 707　調査区全体図（歴史時代）

SK3453・P-1　完掘平面図



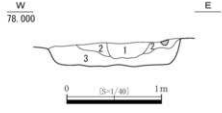
P-2　完掘平面図

P-3　完掘平面図



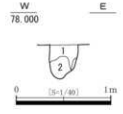
第 100 図　ＭＫⅣ－ 707　歴史時代遺構平面図

SK3453　土層断面図



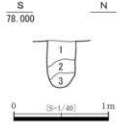
1．10YR3/1　黒褐色土　粘性あり、しまりややなし。ローム粒やや多量、ローム粒・赤色スコリア・Ⅲbブロック微量含む。
2．10YR2/2　黒褐色土　粘性あり、しまりややなし。ローム粒・赤色スコリア微量、1㎝大のロームブロック含む。
3．10YR2/3　黒褐色土　粘性なし、しまりなし。ローム粒微量、ローム粒少量、Ⅲbブロックやや多量、ロームブロック少量含む。

P-1　土層断面図



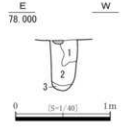
1．10YR2/3　黒褐色土　粘性あり、しまりややあり。1㎝大のⅢ層ブロック・ローム粒やや多量、ロームブロック少量含む。
2．10YR2/2　黒褐色土　粘性あり、しまりなし。ローム土・ロームブロック・Ⅲ層含む。

P-2　土層断面図



1．10YR4/4　褐色土　粘性あり、しまりなし。ローム粒・ロームブロック多量、スコリア少量含む。
2．10YR2/2　黒褐色土　粘性あり、しまりなし。ローム粒・ロームブロックやや 多量含む。
3．10YR4/6　褐色土　粘性あり、しまりなし。ローム粒・ロームブロック多量含む。

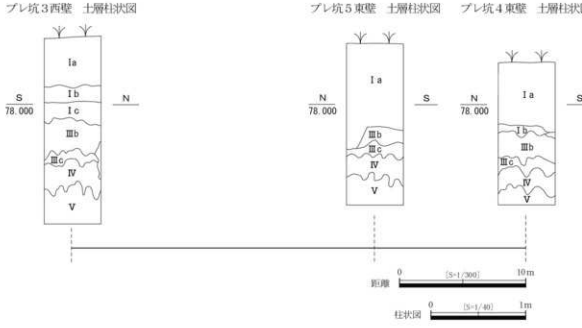
P-3　土層断面図



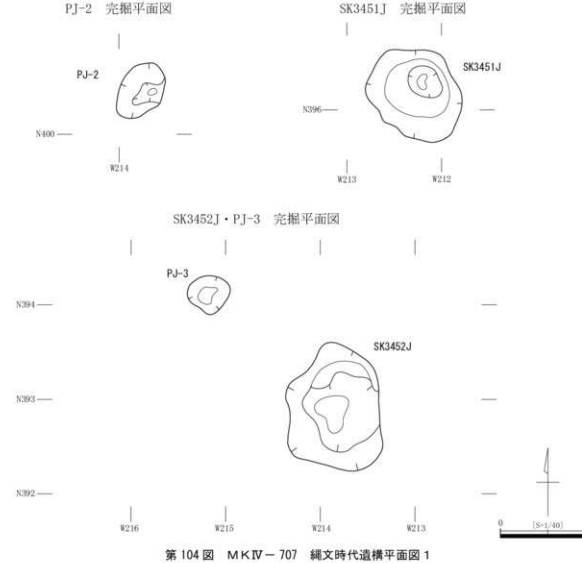
1．10YR2/1　黒褐色土　粘性あり、しまりややあり。ローム粒・赤色スコリア微量含む。
2．10YR2/3　黒褐色土　粘性あり、しまりなし。ローム粒・ロームブロックやや 多量含む。
3．10YR5/8　黄褐色土　粘性あり、しまりなし。ローム粒・ロームブロック多量含む。

第 101 図　ＭＫⅣ－ 707　歴史時代遺構断面図

第 102 図　ＭＫⅣ－ 707　調査区全体図（旧石器・縄文時代）

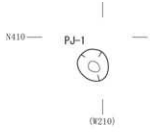


第 103 図　ＭＫⅣ－ 707　土層柱状図

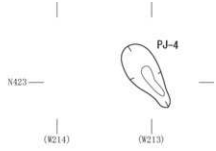


第 104 図　ＭＫⅣ－ 707　縄文時代遺構平面図 1

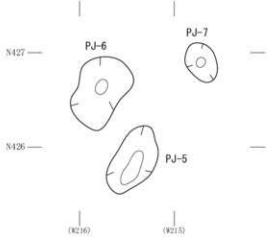
PJ-1　完掘平面図



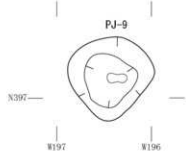
PJ-4　完掘平面図



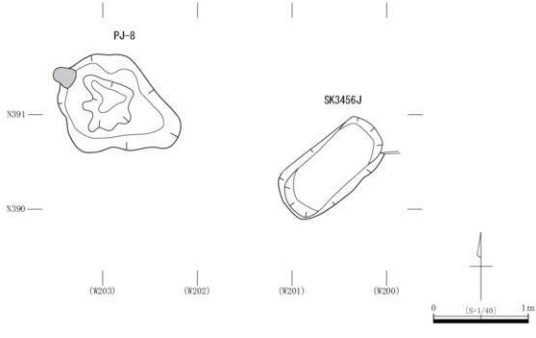
PJ-5・6・7　完掘平面図



PJ-9　完掘平面図

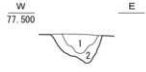


SK3456J・PJ-8　完掘平面図



第 105 図　ＭＫⅣ－ 707　縄文時代遺構平面図２

PJ-2　土層断面図

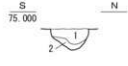


1．黒褐色土　粘性、しまりあり、ローム粒多量、ローム土、赤色スコリアやや多量含む。
2．茶褐色土　粘性、しまりあり、ローム土多量、赤色スコリア少量含む。

PJ-1　土層断面図

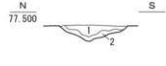
1．暗茶褐色土　粘性、しまりあり、1 cm大のローム ブロック・Ⅲbブロック混入、赤色スコリア少量含む。
2．茶褐色土　粘性、しまりあり、ローム粒・ローム ブロック多量、赤色スコリアやや多量含む。

PJ-3　土層断面図



1．暗茶褐色土　粘性、しまりあり、赤色スコリアやや多く、ローム土含む。
2．茶褐色土　粘性、しまりあり、ローム土やや多量含む。

PJ-4　土層断面図

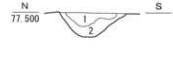


1．10YR2/3　黒褐色土　粘性あり、しまりあり、ローム粒少量、赤色スコリア微量含む。
2．10YR3/4　暗褐色土　粘性あり、しまりあり、ローム粒少量、赤色スコリア微量、ローム ブロックやや多量含む。

PJ-5　土層断面図

1．10YR2/3　黒褐色土　粘性あり、しまりあり、ローム粒微量、赤色スコリア 少量含む。
2．10YR3/4　暗褐色土　粘性あり、しまりあり、ローム、赤色スコリア微量、ローム ブロックやや多量含む。

PJ-6　土層断面図

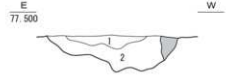


1．10YR2/3　黒褐色土　粘性あり、しまりあり、赤色スコリア微量含む。
2．10YR3/4　暗褐色土　粘性あり、しまりあり、ローム粒、赤色スコリア微量、ローム ブロック含む。

PJ-7　土層断面図

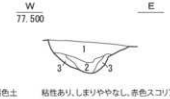
1．10YR2/3　黒褐色土　粘性あり、しまりあり、ローム粒、赤色スコリア少量含む。
2．10YR3/4　暗褐色土　粘性あり、しまりあり、赤色スコリア・黒色スコリア微量、ローム粒・ローム ブロックやや多量含む。

PJ-8　土層断面図



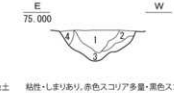
1．10YR4/4　褐色土　粘性あり、しまりなし、赤色スコリア・ローム粒 やや多量、ローム ブロック微量含む。
2．10YR3/4　暗褐色土　粘性あり、しまり良い、赤色スコリア・ローム粒・ローム ブロック少量含む。

PJ-9　土層断面図

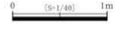


1．10YR4/4　褐色土　粘性あり、しまりややなし、赤色スコリアやや多量、ローム粒 微量含む。
2．10YR3/4　暗褐色土　粘性あり、しまり良い、赤色スコリアややや多く ローム粒微量含む。
3．10YR5/6　黄褐色土　粘性あり、しまり良い、赤色スコリア少量、ローム粒 ローム ブロック多く含む。

SK3451J　土層断面図

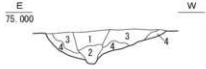


1．暗茶褐色土　粘性・しまりあり、赤色スコリア多量・黒色スコリアやや多量、ローム粒微量、ブロック ブロック少量含む。
2．暗茶褐色土　粘性、しまりあり、赤色スコリアややや多量、ローム粒・黒色スコリア・ローム ブロック少量含む。
3．茶褐色土　粘性・しまりあり、赤色スコリア・黒色スコリア微量、ローム ブロック少量含む。
4．茶褐色土　粘性・しまりあり、赤色スコリアやや多量、ローム土混入。



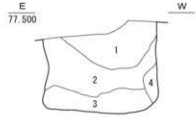
第 106 図　ＭＫⅣ－ 707　縄文時代遺構断面図 1

SK3452J　土層断面図



1．黒褐色土　粘性・しまりあり、赤色スコリアやや多量、ローム土少量、炭化物微量含む。
2．黒褐色土　粘性・しまりあり、赤色スコリア微量、炭化物やや多量、ローム粒・ロームブロック含む。
3．暗茶褐色土　粘性・しまりあり、赤色スコリア、ローム粒やや多量、ローム土混入。
4．茶褐色土　粘性・しまりあり、赤色スコリア炭化物微量、ローム土・ロームブロック多量含む。

SK3456J　土層断面図



1．10YR3/2　黒褐色土　粘性・しまり良い、赤色スコリアやや多く、ローム粒微量含む。
2．10YR3/4　暗褐色土　粘性・しまり良い、赤色スコリア、ローム粒多量、ロームブロック微量含む。
3．10YR3/3　暗褐色土　粘性・しまり良い、赤色スコリア・ローム粒やや多量、ロームブロック少量含む。
4．10YR5/8　黄褐色土　粘性あり、しまりややなし、黒色スコリアやや多量、赤色スコリア少量、ローム粒、ロームブロック多量含む。

0　[S=1/40]　1m

第 107 図　ＭＫⅣ－ 707　縄文時代遺構断面図２

第 108 図　第１期調査区全景　歴史時代（北から）

第 109 図　第２期調査区全景　歴史時代（南から）

第 110 図　第３期調査区全景　歴史時代（西から）

第 111 図　第２期表土掘削状況（南から）

第 112 図　SK3453 断面（南から）

第 113 図　SK3453 完掘状況（南から）

第 114 図　P-1 断面（南から）

第 115 図　P-2 断面（南から）

第 116 図　P-3 断面（南から）

第 117 図　P-1 完掘状況（南から）

第 118 図　P-2 完掘状況（北から）

第 119 図　P-3 完掘状況（北から）

第 120 図　地下防空壕全景（西から）

第 121 図　地下防空壕天井部掘削（西から）

第 122 図　地下防空壕内部（北から）

第 123 図　地下防空壕内部（南から）

第 124 図　第１期調査区北側全景　縄文時代(北から)

第 125 図　第１期調査区南側全景　縄文時代(南から)

第 126 図　第２期調査区北側全景　縄文時代(西から)

第 127 図　第２期調査区南側全景　縄文時代(南から)

第 128 図　第３期調査区全景　縄文時代（西から）

第 129 図　第１期調査風景（南から）

第 130 図　PJ-1 断面（南から）

第 131 図　PJ-2 断面（南から）

第 132 図　PJ-3 断面（東から）

第 133 図　PJ-4 断面（東から）

第 134 図　PJ-5 断面（東から）

第 135 図　PJ-6 断面（西から）

第 136 図　PJ-7 断面（東から）

第 137 図　PJ-8 断面（東から）

第 138 図　PJ-9 断面（東から）

第 139 図　SK3451J 断面（北から）

第 140 図　SK3452J 断面（東から）

第 141 図　SK3451J 完掘状況（北から）

第 142 図　SK3452J 完掘状況（東から）

第 143 図　SK3456J 断面（北から）

第 144 図　SK3456J 完掘状況（北から）

第 145 図　プレ坑１全景　旧石器時代（西から）

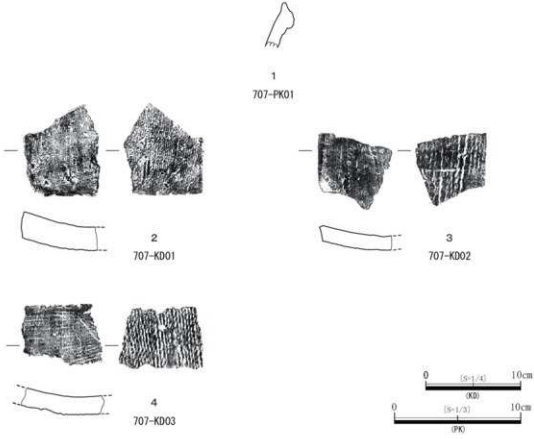
第 146 図　プレ坑２全景　旧石器時代（南から）

第 147 図　プレ坑３西壁土層堆積状況（東から）

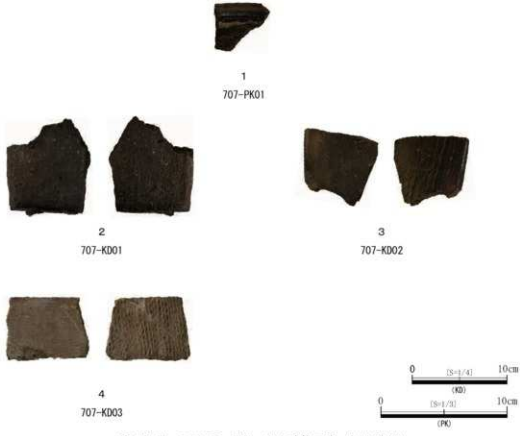
第 148 図　プレ坑４東壁土層堆積状況（西から）

第 149 図　プレ坑５西壁土層堆積状況（東から）

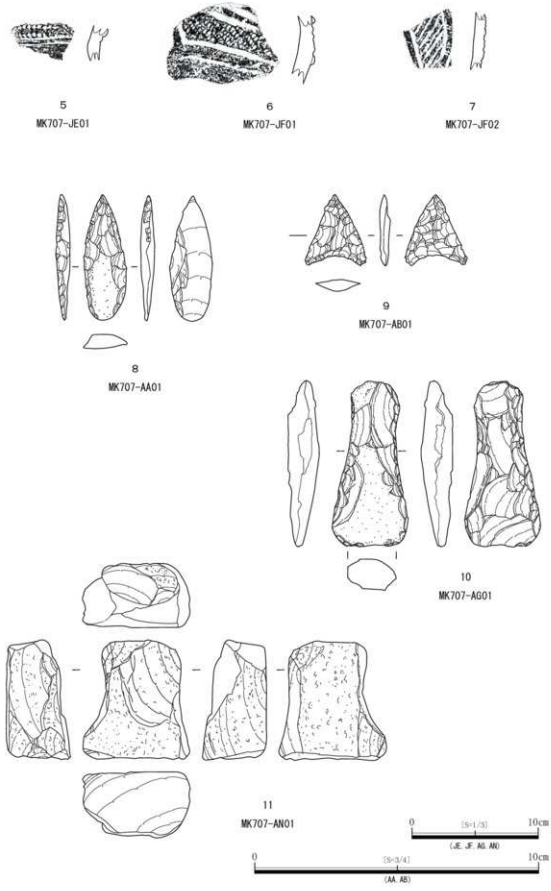
第 150 図　プレ坑調査風景（東から）



第 151 図　ＭＫⅣ－ 707　出土遺物実測図（歴史時代）



第 152 図　ＭＫⅣ－ 707　出土遺物写真（歴史時代）



第 153 図　ＭＫⅣ－ 707　出土遺物実測図（縄文時代）

5
707-JE01

6
707-JF01

7
707-JF02

8
707-AA01

9
707-AB01

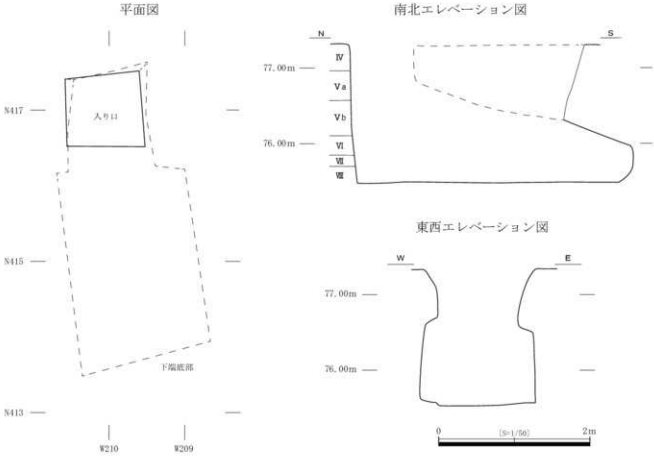
10
707-AG01

11
707-AN01

0　[S=1/3]　10cm
(JE, JF, AG, AN)

0　[S=3/4]　10cm
(AA, AB)

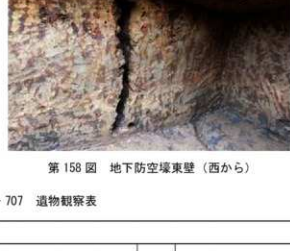
第 154 図　ＭＫⅣ－ 707　出土遺物写真（縄文時代）



第 155 図　ＭＫⅣ－ 707　地下防空壕平面・エレベーション図

第 156 図　ＭＫⅣ－ 707　地下防空壕出土遺物写真

第 157 図　地下防空壕床面（北から）



第 158 図　地下防空壕東壁（西から）

第５表　ＭＫⅣ－ 707　遺物観察表

ＭＫⅣ－ 707　歴史時代　土　器

番号 遺物番号	種別 器種	出土 位置	口径 器高 底径 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	残量	備考
1 PK01	須恵器 甕	SK3453 覆土	— (3.6) —	口唇部に縁帯をもつ。	口縁部回転ナデ。口縁部外面直下に櫛描波状文を施す。後円部内外面に暗緑灰色の降灰釉。	口縁部小片	内外面：暗灰黄色 2.5Y5/2。堅い。焼成普通。微砂粒微量、5 mm大の角礫極微量。

ＭＫⅣ－ 707　歴史時代　女　瓦

番号 遺物番号	出土 位置	狭端 広端 全長 (cm)	厚さ (cm)	成・整形の特徴						備考
				素材	凹面		凸面		端面	
					布目	特徴	叩き	特徴	特徴	
2 KD01	表土	— (7.6) (10.0)	2.5	—	29×23	広・側端縁ナデ。広端縁面取り。一部ナデ。	縄目 L14	縄目叩き。広端縁に降灰釉。	広・側端面ヘラケズリ。広端面に降灰釉。	灰色 N6/1。堅い。焼成普通。微・小砂粒やや多量、1～4 mmの角礫少量、石英極微量。
3 KD02	表土	— (7.5)	1.4	—	なし	側端縁面取り。全体に布目を消すナデ・ナデ。	縄目 L7	縄目叩きの後、ナデ。	側端面ヘラケズリ。	灰色 7.5Y5/1。堅い。焼成普通。微砂粒やや多量。1～3 mmの角礫微量、石英粒・白色針状物質やや多量。
4 KD03	表土	(7.3) — (6.7)	1.9	—	23×22	狭端縁ヘラケズリ。	縄目 L10	縄目叩き。	狭端面ヘラケズリ。	灰白色 7.5Y7/1。堅い。焼成普通。微砂粒少量、1～3 mmの小石微量。

ＭＫⅣ－ 707　縄文時代　土　器

番号 遺物番号	種別 器種	出土 位置	口径 器高 底径 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
5 JE01	深鉢？	表土	— (2.6) —	胴部片。小片のため全体の器形不明。	外面隆帯に角押文・隆帯に沿って沈線文。内面未調整。胎土に金雲母少。	中期勝坂Ⅱ。内外面：にぶい赤褐色 5YR5/4。焼成普通。砂粒・角礫・コクヂ・長石粒少量、雲母やや多量。
6 JF01	深鉢	表土	— (5.4) —	口縁部に近い胴部片。	隆帯区画内に RL 斜縄文。頭部無文帯。内面粗いナデ。	中期加曽利 E 2。外面：にぶい赤褐色 7.5YR5/4。内面：にぶい赤褐色 5YR5/4。焼成良好。砂粒・角礫・長石粒少量、雲母微量。
7 JF02	深鉢？	表土	— (4.3) —	口縁部に近い胴部片。小片のため全体の器形不明。	区画内に斜位の細沈線文。内面粗いナデ調整。	中期加曽利 E。外面：にぶい赤褐色 5YR5/4。内面：暗赤褐色 5YR3/4。焼成普通。砂粒・角礫・コクヂ・長石粒少量、雲母微量。

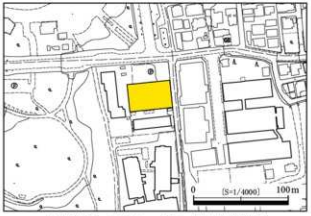
ＭＫⅣ－ 707　縄文時代　石　器

番号 遺物番号	種別 器種	出土 位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	遺存 状態	石材	備考
8 AA01	尖頭器	Ⅲ層－３	4.5	1.5	0.5	3.63	完形	凝灰岩	縦長剥片を素材とした尖頭器。裏面に主剥離面が大きく残る。表面は急斜な調整が施される。
9 AB01	石鏃	Ⅲｂ層－1	2.5	2.1	0.4	1.49	完形	チャート	形態は凹基鏃（凹基無茎鏃）。二等辺三角形に浅い抉りを入れ、短い脚部を作り出している。
10 AG01	打製石斧	Ⅲ層	13.2	6.0	2.5	187.00	完形	砂岩	両側縁に潰れあり。撥形。側縁の潰れが顕著。潰れは単結痕と考えられる。
11 AN01	スタンプ形石器	表土	9.5	8.5	5.1	564.00	完形	砂岩	風化顕著。敲打によると考えられる。潰れが全体的にみられる。

※地下防空壕の遺物は写真のみ

第３節　武蔵国分寺跡第 709 次調査

所 在 地	西元町一丁目 1-26		
調査原因	集合住宅建設	**調査種別**	発掘調査
調査費用	事業者負担	**調査体制**	委託
調査期間	平成 27 年 5 月 18 日～5 月 29 日		
調査面積	30.49 ㎡	**遺物箱数**	1 箱
検出遺構	P-1 ～ 6、SK3454J		
主な遺物	縄文土器		



第 159 図　ＭＫＩ－709　調査地位置図

【１．調査に至る経緯と経過】　平成 27 年４月７日付で市教委へ埋蔵文化財包蔵地内における集合住宅建設の届出が文化財保護法第 93 条第１項に基づき個人事業主から提出された。対象地は、国分寺市西元町一丁目１-26 に所在し、武蔵国分寺跡（遺跡№ 19）の北方地区に該当する。昭和 55 年度に共同住宅建設に先だって発掘調査（武蔵国分寺跡第 201 次調査、国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会 1982）が実施されており、歴史時代の遺構として掘立柱建物 SB78・80、竪穴住居 SI325・326・327・328、溝 SD184・185、土坑 SK819・820・821・822・823・825・826・863、火葬墓 SZ37、ピット P-1 ～ 51、縄文時代の遺構は土坑 SK864・865・867J、ピット PJ-1 ～ 163 が確認されていた。

既往調査の結果を受け工事内容を精査しところ、本届出は集合住宅の建替えのために提出されたものであり、新設建物範囲の大半は昭和 55 年度に実施した調査範囲と重複していた。このため、すでに発掘調査を行った範囲は調査対象外としたが、建物の北側に新たに設置する雨水浸透マス等の掘削深度が遺構確認面まで達することが確実視されたため、埋蔵文化財の取り扱いについて、市教委の意見としては、遺構が破壊される恐れのある部分について発掘調査を実施する必要がある旨を４月 13 日付の埋蔵文化財協議書を通じて協議者（代理人）に伝えた。その後、協議者・施工責任者・個人事業主と協議を重ね、５月１日付で国分寺市遺跡調査会と個人事業主間で埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結し、５月 18 日から同年５月 27 日（実働８日）まで現地調査を実施した。なお、本調査においては、事業主より表土掘削のためのバックホーとオペレーターの提供を受けた。調査面積は 30.49 ㎡である。整理は同年６月から開始し、断続的に平成 28 年３月まで行った。

【２．検出された遺構と出土遺物】　調査区内の基本層序は、地表より約 50 ㎝の深さまで基本層序Ⅰ層（表土・盛土・耕作土）に覆われ、以下、Ⅲａ層が厚さ約 15 ㎝、Ⅲｂ層が約 45 ～ 60 ㎝、Ⅲｃ層が約 10 ㎝堆積していた。現地調査は、はじめに奈良・平安時代の遺構確認面Ⅲｂ層の上面で遺構確認を行ったところ小穴（ピット）を６基検出したが、竪穴住居等の遺構は検出されなかった。

歴史時代に続いて、縄文時代の遺構確認面となるⅢｃ層上面まで掘りさげて精査したところ、トレンチ内東端で土坑 SK3454J を１基検出した。

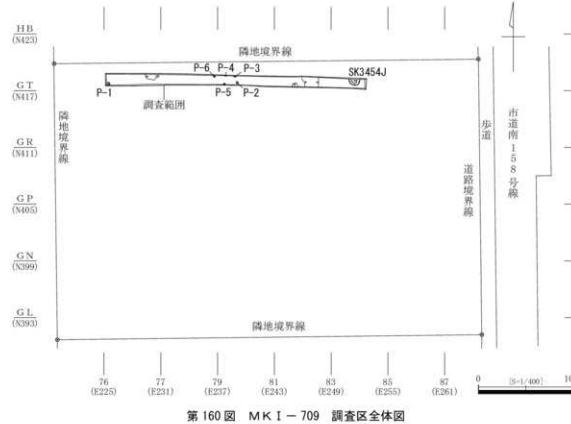
SK3454J（第 160 ～ 162･165･176･177 図）　遺構は、トレンチ内の東端で検出された。確認面での規模は、東西軸 115 ㎝、深さ 48 ㎝あり、遺構の北側は調査区外へと続いている。このため南北軸の長さは不明であるが、平面形状は円形もしくは楕円形であると想定される。遺構に伴う遺物は出土していない。

土坑が検出されたⅢｃ層上面は地表より約１ｍ 30 ㎝の深度であり、市内の一般的な層序と比較すると深いレベルである。これは現地に厚い盛土・表土が堆積していたこと加え、Ⅲｂ層も約 45 ～ 50 ㎝と良好に遺存していたことによる。

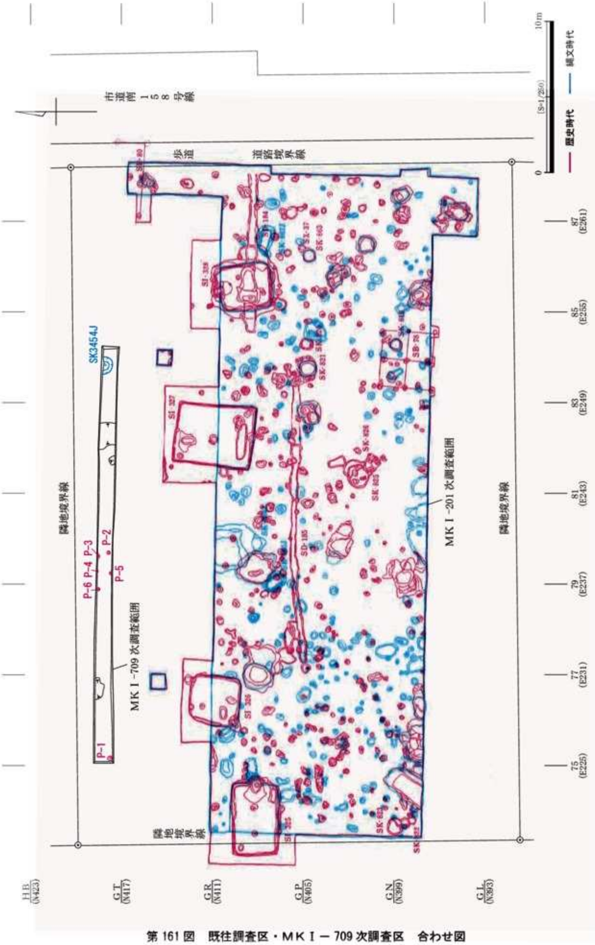
今調査では、遺物包含層より縄文時代の土器片、奈良・平安時代の土器・瓦（１・２）片が出土している。

【３．小　結】　周辺の調査成果について触れておくと、本調査区の南隣りで実施された第 201 次調査では、先述した通り古代の遺構が多数確認されており、道路を挟んで東隣の区域で実施した第３次調査（武蔵国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会 1979）でも、712 ㎡の調査区内から竪穴住居７軒、土坑５基が検出されている。住居は、調査区内の北側で５軒、南西端で２軒がまとまって検出されており、住居同士の重複関係はない。また、西隣の区域で行われた第 429 次調査（国分寺市遺跡調査会 1999）では、1,348 ㎡の調査区から竪穴住居６軒、土坑 42 基、道路状遺構１条、地下式横穴墓１基、特殊遺構２基、小穴 171 基が検出されている。古代の住居同士の重複は１箇所のみ確認されているが、当該地域の住居はいくつかのグループに分かれるもの、重複関係が少ないことが特徴としてあげられる。

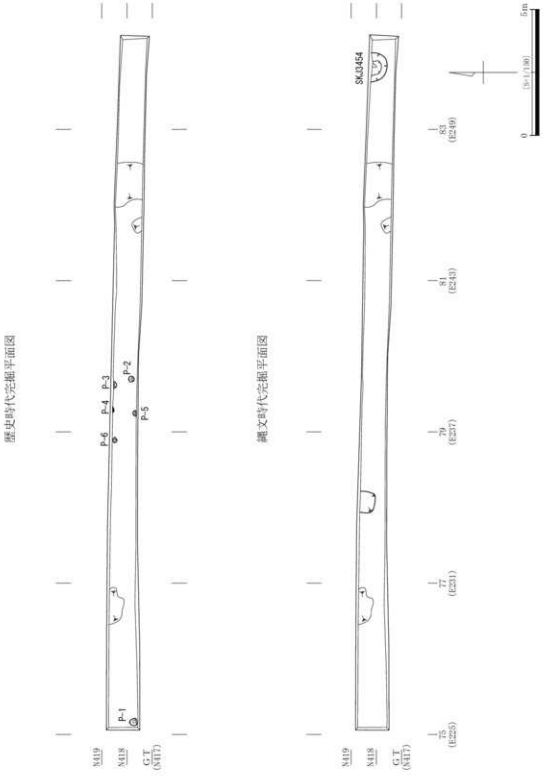
これら隣接地の遺構検出状況を勘案すると、本調査内での古代の遺構は小穴６基のみであったが、当該地域内における遺構の密度全体として捉えると平均的な検出状況といえよう。



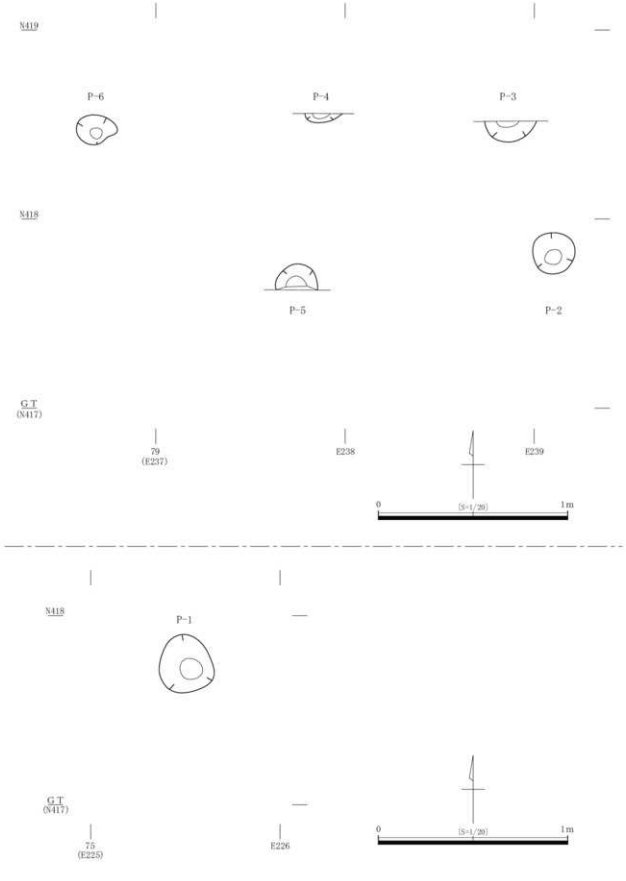
第 160 図　ＭＫＩ－ 709　調査区全体図



第161図　既往調査区・ＭＫⅠ－709次調査区　合わせ図

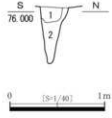


第 162 図　ＭＫＩ－ 709　完掘平面図



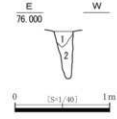
第 163 図　ＭＫＩ－ 709　歴史時代ピット平面図

P-1　土層断面図



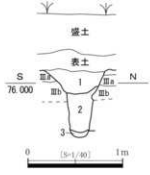
1．10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまりややあり、ローム粒少量、赤色スコリア微量含む。
2．10YR4/6　茶褐色土　粘性なし、しまり弱い、ローム粒30～40%、2～5cmローム ブロック部分的に30～40%含む。

P-2　土層断面図



1．10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまり部分的に弱い。赤色スコリア微量、ローム粒少量含む。
2．10YR5/6　茶褐色土　粘性なし、しまり部分的に弱い。ローム粒・ブロック部分的に40～50%含む。

P-3　土層断面図

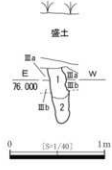


1．10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまりややあり、ローム粒・赤色スコリア微量含む。Ⅲa土20～30%混入。
2．10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまりややあり、1よりローム粒・ブロック多い、1より軽質。
3．10YR5/6　黄褐色土　粘性ややあり、しまりやや弱い、ソフトロームを主体とする層。

P-4　土層断面図

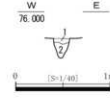
1．10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまりあり、Ⅲb土・ローム粒・赤色スコリア少量含む。
2．10YR3/2　黒褐色土　粘性なし、しまりややあり、1よりローム粒部分的に多い、1より軽質。
3．10YR5/6　黄褐色土　粘性ややあり、しまりやや弱い、ソフトロームを主体とする層。

P-5　土層断面図



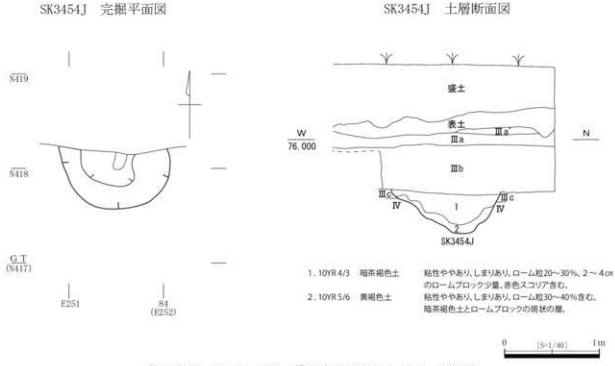
1．黒褐色土　粘性なし、しまりややあり、Ⅲa土多く混入。細かいローム粒多量含む、色調やや明るい。
2．黒褐色土　粘性なし、しまり弱い、ローム粒・ブロック部分的に30～40%含む。

P-6　土層断面図

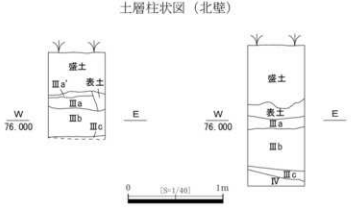


1．10YR3/3　暗茶褐色土　粘性なし、しまり部分的に弱い、ローム粒を部分的に10～20%含む。
2．10YR5/6　黄褐色土　粘性なし、しまり弱い、ローム粒・ブロックを主体とする層。

第 164 図　ＭＫＩ－709　歴史時代ピット断面図



第 165 図　ＭＫＩ－709　縄文時代 SK3454J　平面・断面図



第 166 図　ＭＫＩ－709　土層柱状図

第 167 図　西壁土層断面（東から）

第 168 図　ＭＫＩ－709　調査区全景（東から）

第 169 図　ＭＫＩ－709　調査区全景（西から）

第170図　P-1断面（東から）

第171図　P-2断面（北から）

第172図　P-3断面（南から）

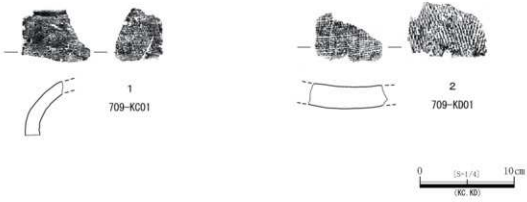
第173図　P-4断面（南から）

第174図　P-5断面（北から）

第175図　P-6断面（南から）

第176図　SK3454J　完掘状況（北から）

第177図　SK3454J断面（南から）



第 178 図　ＭＫＩ－709　出土遺物実測図

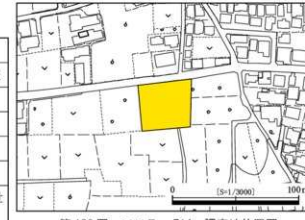
第 179 図　ＭＫＩ－709　出土遺物写真

第６表　ＭＫＩ－709　遺物観察表

ＭＫＩ－709			歴史時代　男　瓦							
番号 遺物番号	出土位置	狭端 広端 全長 (cm)	厚さ (cm)	成・整形の特徴						備考
				素材	凹面		凸面		端面	
					布目	特徴	叩き	特徴	特徴	
1 KC01	表土	(2.5) — (5.9)	1.3	—	24×19	—	—	ヨコナデ。	狭・側端面ヘラケズリ。	にぶい橙色 7.5YR7/4。微砂粒やや多量、１～３㎜の角礫・石英粒少量。
ＭＫＩ－709			歴史時代　女　瓦							
番号 遺物番号	出土位置	狭端 広端 全長 (cm)	厚さ (cm)	成・整形の特徴						備考
				素材	凹面		凸面		端面	
					布目	特徴	叩き	特徴	特徴	
2 KD01	表土	— (8.0) (6.2)	2.3	—	((15×18))	一部ナデ。	縄目 R9	縄目叩き。	広端面ヘラケズリ。	橙色 2.5YR6/6。堅い。焼成普通。微・小砂粒やや多量、１～４㎜の角礫微量、石英極微量。

第４節　武蔵国分寺跡第 714 次調査

所 在 地	東元町四丁目９番		
調査原因	土地造成	**調査種別**	発掘調査
調査費用	事業者負担	**調査体制**	委託
調査期間	平成 28 年１月 20 日～２月 19 日		
調査面積	271.73 ㎡	**遺物箱数**	13 箱
検出遺構	SD435、SX361		
主な遺物	土師器・須恵器・灰釉陶器・中近世陶磁器、瓦・塼		



第 180 図　ＭＫⅡ－714　調査地位置図

【１．調査に至る経緯と経過】 平成 27 年９月、埋蔵文化財協議書の協議者（代理人）である株式会社エフコ（以下、協議者と称する）より、国分寺市東元町四丁目における土地造成工事等の開発について問い合わせがあった。当該地は、武蔵国分寺跡（遺跡№19）に該当し、周辺の発掘調査によって、奈良・平安時代の竪穴住居や縄文時代の集石が確認されている地域であったため、市教委は同開発について、埋蔵文化財の有無を確認するための調査が必要であることを伝え、開発の内容及び確認調査についての協議を行った。その後、平成 27 年 10 月 14 日付で三井不動産レジデンシャル株式会社（以下、三井不動産と称す）より文化財保護法第 93 条第１項届出（国教教ふ収第 661 号）が提出されたことを受け、市教委は、確認調査が必要である旨の意見を付して東京都教育委員会へ進達、同時に埋蔵文化財協議書に同じ意見を付して協議者へ伝えた。その後、平成 27 年 11 月 24 日付 27 教地管理第 1970 号通知によって、東京都教育委員会から届出者へ確認調査を実施する旨の通知がなされた。

市教委は、給排水設備及び雨水浸透施設の設置による掘削で埋蔵文化財が破壊される可能性がある範囲を中心に調査区を設定した「三井不動産レジデンシャル株式会社土地造成に伴う埋蔵文化財確認調査計画書」を協議者へ提示し、了解を得たことを受け、平成 27 年 10 月 23 日付けで国分寺市内所在遺跡の発掘調査を委託している国分寺市遺跡調査会（以下、調査会）へ調査実施の指示簿を提出した。

確認調査は、武蔵国分寺跡第 710 次調査（国分寺市教育委員会 2017B 所収）として平成 27 年 11 月２日から同年 11 月 24 日（実働 15 日）まで実施し、調査区からは縄文時代の落とし穴（SK3455J）と南北方向へ走る中世の遺構と考えられるの大型の溝（SD435）が部分的に検出された。他方、調査前に予想されていた奈良・平安時代の遺構は、耕作等により上層が大きく削平されていたため、検出されなかった。

調査結果を三井不動産へ報告したところ、地下ボーリング調査でも大型の溝が走ると想定される部分の地下地盤が軟弱であることが確認されたことから、溝の遺構部分を全面地盤改良するための工事を追加で行いたい旨の方向性が示された。市教委は、追加の掘削工事については別に届出が必要であること、検出された中世の溝は遺跡の性格を知るうえで重要な遺構であることから、遺構の現地保存を図れない場合は、事業者の協力による本発掘調査が必要であることを伝えた。その後、三井不動産より開発計画の実施のためには地盤改良が必要であり、遺構を現地保存するのは困難であること、本発掘調査にかか

る費用と期間について積算依頼の連絡があり、市教委は「東京都埋蔵文化財本発掘調査積算基準」を基に、調査会で実施した場合の費用を提示した。

平成 28 年１月 14 日付国教教ふ収第 931 号にて事業者より追加工事分の届出が提出され、市教委は工事等により埋蔵文化財が掘削されるため発掘調査を必要とする旨の意見を付して東京都へ進達し、平成 28 年２月３日付 27 教地管理第 2796 号通知により東京都より届出者へ通知された。その後、算出した調査費用について事業者と調査会両者の合意を得たので、平成 28 年１月 19 日付けで三井不動産と調査会で「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結､同時に市教委は「東元町四丁目三井不動産レジデンシャル（株）宅地造成に伴う埋蔵文化財本発掘調査計画書」に基づいて、調査会へ指示簿を提出した。

現地調査は平成 28 年１月 20 日から開始し、発掘調査の道具・機材一式の搬入、高木の伐採と同時に重機による表土掘削を行った。調査は同年２月 19 日（実働 22 日）まで実施し、総調査面積は 271.73 ㎡である。

調査にあたっては遺物は全て出土位置を記録して取り上げることとし、水洗・注記・実測・拓本、および現地で作図した図面のトレースなど報告書作成のための室内整理は、現地調査後より開始し、平成 28 年 10 月まで断続的に実施した。

【２．検出された遺構と出土遺物】　調査区内は、確認調査の状況と同様に地表より約 30 ～ 50 ㎝の深さまで表土（耕作土含む）に覆われており、その下層からⅢｃ層もしくはⅣ層が検出された。想定していた通り、調査区内からは南北に縦走する中世の大型の溝（SD435）が、直線で約 33 ｍにわたって確認された。また、この溝に壊された古代の遺構 SX361 も検出された。

SX361 特殊遺構（第 186･187･195 ～ 198 図）　SD435 調査区の東端で検出された。SD435 に壊されており、古代の遺構と考えられる。規模は、東側が調査区外へと続いているため定かではないが、現状で東西約１ｍ、南北約１ｍの範囲に不整形な平面形状で検出されている。底部の覆土は焼土を含むことから、住居のカマドであった可能性がある。遺構に伴う遺物は出土していない。

SD435 溝（巻頭図版１、第 186・188 ～ 192・201 ～ 209 図）　開発区域の東端を南北方向を主軸として直線状に走る溝で、33 ｍにわたって検出された。覆土上層には、後述するように宝永四（1707）年に降灰した宝永火山灰の堆積が見られることから（第 188 図９層）、少なくとも 18 世紀初頭には、既に埋没していた溝である。溝の規模は、現状で上端 5.6 ～ 6.2 ｍ、深さは地表面より約 2.1 ～ 2.3 ｍ、確認面からは約 1.8 ｍである。先述したとおり､現地の表層は耕作や客土等により削平されていることから、本来はさらに 50 ～ 60 ㎝の深さがあったと考えられる。溝の断面形状は、約 90 ～ 100 度のＶ字型（逆台形）で、両肩の部分は外反してロート状に開いている。溝の底部は、幅約 50 ～ 80 ㎝の平坦面があり、全体的に水漬きによってローム層が酸化している痕跡が認められた。

溝は調査区内の中間地点で若干東へ振れるものの、大きく蛇行することなくほぼ直線的に掘削されている。主軸は僧寺伽藍中軸線（真北から 7°　07′　01″ 西偏）に対しておおよそ 6°　24′　28″ 東偏しているが、ほぼ真北を向いている。

また、溝の底部はほぼ水平を維持しながら掘削されているが、標高差でみると調査区内の北端と南端では、途中に部分的な凹凸はあるものの南側が５㎝ほど低くなっており、底部の平均標高レベルから算出しても、北から南に向かって緩やかに低く傾斜してることがわかる。調査区の延長距離 33 ｍに対して５㎝の傾斜は、角度にするとわずか 0.868 度で、100 ｍで約 15 ㎝の緩勾配となるが、この傾斜が意図的なものかどうかは判断材料に乏しい。なお、立川段丘面の現地形は調査区より南の多摩川に向かって緩やかに傾斜している。

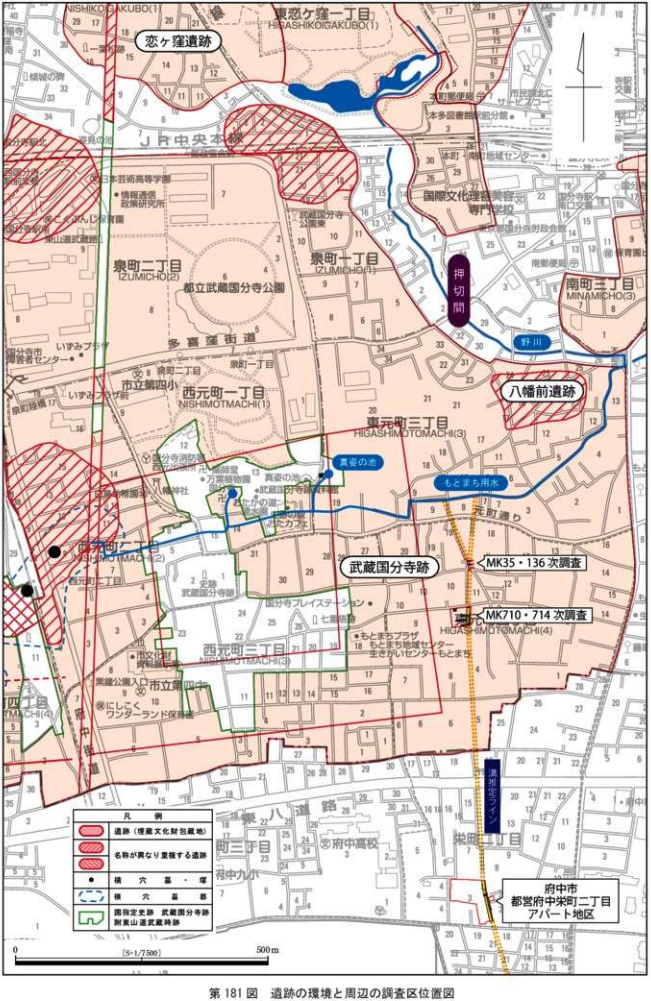
溝の覆土は、耕作土直下の層は黒褐色～暗褐色土を主体とするやや締まりのない層だが、下層にいくにつれて締まりが強くなり、底部はロームブロックを主体とした層となっている。注目されるのは、南壁の土層断面で確認された宝永火山灰で、0.５～２㎝の薄い層状の堆積がほぼ同じレベルで断続的に認められた。調査区南壁の真上の場所は、現在農道として利用されている道にあたるため、耕作などの影響を受けずに、比較的覆土の遺存状況が良好に残ったと考えられる。

溝の覆土からは、総数 901 点の遺物が出土したが、その殆どは古代の瓦・土器類で占められ、中世の遺物は５点（内２点は接合）、近世の遺物は３点であった。古代の遺物は 889 点中、653 点が男瓦・女瓦、軒先瓦などの瓦片で、土器は土師器・須恵器・土師質土器・灰釉陶器が出土した。一方、中世の遺物は、14 ～ 15 世紀の常滑窯の片口鉢Ⅱ類（８・９）と古瀬戸後期様式の鉄釉折縁中皿（10）、および瓦質土器（13）があり、近世の遺物は、18 世紀の明石・堺産の焼締擂鉢（11）や瀬戸・美濃窯の鉄釉灯明皿（６）等が出土している。このほか表土および調査区からは、縄文土器片、近世の肥前染付磁器皿（７）や瀬戸・美濃の灰釉土瓶（12）、時期不明の鉄製品、馬の下顎骨・歯等と思われる動物遺存体が出土している。

【３．小　結】 大溝における遺物の出土状況をみると、宝永４年（1707）年に富士山が噴火した際に降灰した宝永火山灰層より上層から 18 世紀以降の明石・堺の擂鉢や瀬戸・美濃窯の灯明皿が、同層より下層には 14 ～ 15 世紀代の常滑・古瀬戸窯の製品が含まれることから、溝の掘削時期は自ｻﾞと 14 ～ 15 世紀を上限として、18 世紀初頭までにはほぼ埋没していた状況が窺える。また、溝の覆土中には古代の遺物が大量に出土していることから、周辺にも古代の遺跡が広がっていることが考えられる。

周辺地区での溝の検出例としては、調査地の北約 65 ｍの位置で実施された武蔵国分寺跡第 35 次調査（第 184、国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 1988）で、溝の延長部分が確認されている。さらにその約 15 ｍ北側の調査区（第 136 次調査、未報告）では、北に向かって溝がＹ字に枝分かれしている様子が確認されており、さらに北上すると元町用水と合流する可能性がある。

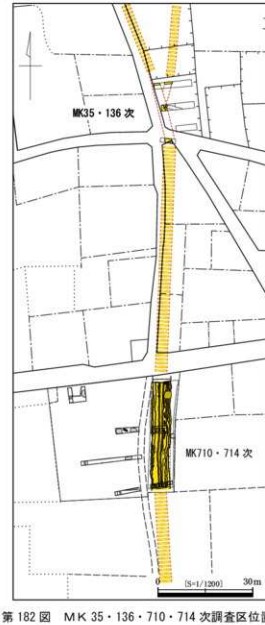
また、南方では、隣接する府中市内でも、本調査地から南へ約 600 ｍの地点（府中市栄町二丁目の現都営住宅地内）で、一連の溝と思われる遺構が確認されており（府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 1999）、それに並行する道路跡も検出されている（第 181 図）。この溝の覆土からも土師質土器、須恵器、青磁、陶器（常滑・瀬戸他）、武蔵国分寺の古代の瓦、土製品、銅製品、鉄製品、石製品、石器が出土している。溝掘削の時期を推測する特徴的な遺物としては、皇宋通宝（初鋳 1038 年）１点、元豊通寶（初鋳 1078 年）２点、永楽通寶（初鋳 1408 年）２点の計５点の銭貨や常滑片、板碑などに使われる緑泥片



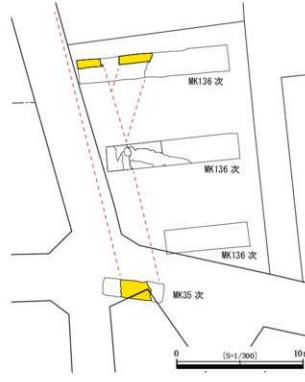
第 181 図　遺跡の環境と周辺の調査区位置図

岩片などが出土していることから、溝の年代を 15 世紀以降、中世後半の所産と想定している。当該調査では、並行する道路跡は確認されなかったが、遺構の規模や特徴、出土遺物の年代は概ね一致している。

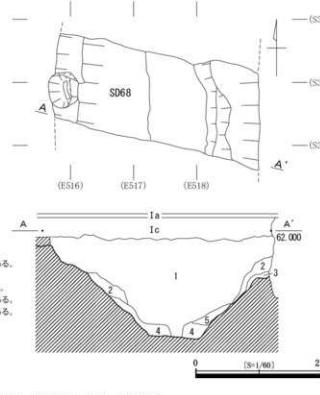
これらの溝の性格については、明らかでない点が多くあるが、調査区周辺には、分水や堀の存在を伝える伝承などが残っており、本調査で検出された遺構の状況と合わせて若干の検討を行ってみたい。



第 182 図　ＭＫ 35・136・710・714 次調査区位置図



第 183 図　ＭＫ 35・136 次調査区



1. 黒褐色土　　ローム粒子、スコリアを多量に含み硬質である。
2. 黒褐色土　　ロームブロック、スコリアを多量に含む。
3. 暗茶褐色土　　Ⅲbブロック、ロームブロックを多量に含む。
4. 暗茶褐色土　　ローム粒子、ブロックを多量に含み硬質である。
5. 暗茶褐色土　　ローム粒子、ブロックを多量に含み軟質である。

第 184 図　ＭＫ 35 次調査　SD68 溝　平面・断面図

甲野勇の『武蔵野を掘る』には、星野亮勝（元医王山国分寺住職・国分寺町長・国分寺市長）の研究結果として、国分寺市内に残る玉川上水の第一次工事の失敗の痕跡を載せている。これは、承応２年（1653）に完成した玉川上水の失敗談を伝える小島文平が享和３年（1803）にまとめた「玉川御上水之起源並野火留分水之訳書」の内容から推察したもので、最初の上水計画は「―武州多磨郡国分寺村真姿の流れを、合水に引入べしと目論見、多磨郡日野の渡の側なる青柳村下、今の府中領田用水口より引水、府中八幡下より往還の方へ掘曲げ、染谷村の裏通を掘り、合水となせば―」というものであったが、技術的に困難で失敗に終わったというものであった。星野は、八幡前遺跡（国分寺遺跡№18）（第 181 図）の東に認められる巾３間（約 5.4 m）ほどの浅い窪みが、この真姿の池の流れを引水するための工事の痕跡であるとした。この南北に走る窪みは当時、竹棒で指すと底なしに深かったという。甲野は、畑地に残る掘割の跡は府中に向かってとぎれとぎれに残っていることから、恋ヶ窪の豊富な湧水をダムを築いて南方へ引き寄せ、真姿の池の流れ（元町用水）と合流させて府中八幡の方へ導く計画が失敗に終わったと加えて想定している。また、この辺りが「押切間」と呼ばれ、野川の水がここを押切って流れたという伝承も残っていることを挙げ、人工的なダムが決潰したことで、野川はもとの流路にもどったとも想定している。

また、発掘調査中に溝を見た近所の農家の方から得た話では、この辺りには昔から堀が畑の中で見つかっていて、今回の SD435 溝がこれに該当する可能性があるという。幼少のころ聞いた言い伝えでは、徳川家康が御殿を造る際に掘った水路で、押切間の野川から分水して、現在の府中刑務所の東側を通り、御殿坂まで水を引く計画だったと言われるが、最後まで通ったかどうかはわからないというものであった。また、一時は筏を流していたこともあったと伝わっているという。

この二つの話は、「押切間」から分水する点、府中方面へ向かっている点、おそらく後者の話も元町用水の流れも引き込んでいる点、江戸時代のことである点が共通している。ただ、星野のいう八幡前遺跡の東隣という位置は、当該地点より東へ約 250 m離れている。八幡前遺跡の東側は武蔵国分寺跡に該当するが、遺跡の東端ということもあり、これまでに周辺の調査履歴はない。このため、現状では推測になるが、星野と甲野のいう堀割の遺構は本調査区で検出されたものと別のものであろう。

また、水の流れについては、本調査区で検出された溝の底には水が溜まった痕跡が確認できている。ローム層の一部が水漬きにより酸化しているが、酸化は底部のみで、溝の肩部分にはみられないことから、水は水位の低い状況で流れていた可能性はある。しかし、底部直上からは微砂や粘土質の土などの、水路の底部に堆積する土砂が見られないため、流れていた期間は限定的であったと想定され、また筏を浮かべるだけの水位はなかった考えられる。

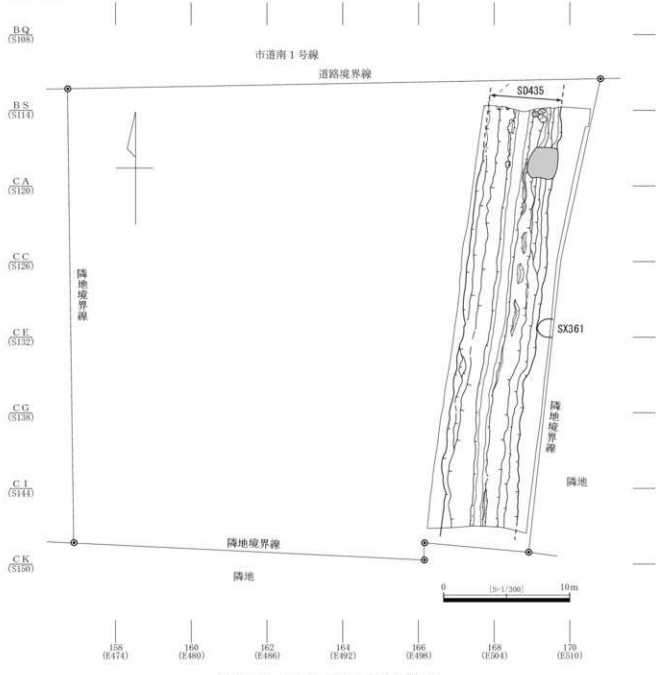
掘削の時期については、両者とも江戸時代の話であることを伝えているが、本調査区で検出された溝は中世後期に開削されたと考えられ、江戸初期の話とは時間的な隔たりがある。本調査区から出土した遺物の全体量からみると中世の遺物は極めて僅少であるが、調査地点に限っては溝覆土中に 14 ～ 15 世紀代の遺物は出土しているが、16・17 世紀代の遺物はなく、上層付近に 18 世紀以降の遺物が含まれるという調査事実がある。このため、府中御殿への導水を目指したという伝承とも不整合であり、本来の

溝の掘削背景や経緯を巡っては、別の理由が想定されよう。また、府中市域では「ムダ堀」とよばれる水路として計画されたものの、竣工に至らずに終わった廃墟と考えられている堀跡が確認されており（深澤 2012）、おそらく当該地域の伝承も、堀割、引水、大きな窪み、府中御殿など、いくつかの共通する要素が複合的に重なったものであると考えられる。

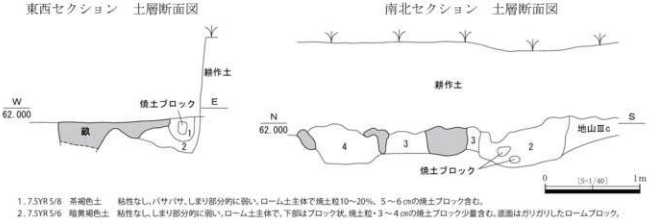
溝と道路については、府中市栄町二丁目で確認された溝の東側を並行して走る溝と同時期の道路状遺構が検出されているが、当該調査区では類似する道路状遺構は確認されなかった。しかし、調査区の地山の上部が削平されたことによって遺構が検出されなかった可能性もある。明治初期に描かれた国分寺村の土地構成を示した地籍図では、溝の推定通過ライン上に道があることが確認できる（第 185 図）。現在の地図上においても道路と重なる部分は多く、溝の名残り、もしくは溝と並走する道路がそのままの経路で残っている可能性がある。

以上、本調査で検出された大溝について若干の予察を述べたが、溝掘削の目的や機能、性格については依然として不明な点が多い。周辺の中世の遺構との関連も再検討しつつ、今後も調査を重ねて検証する必要があろう。

第 185 図　国分寺村の土地構成（明治初年頃）
（国分寺市・国分寺市教育委員会 2015 より加筆転載）



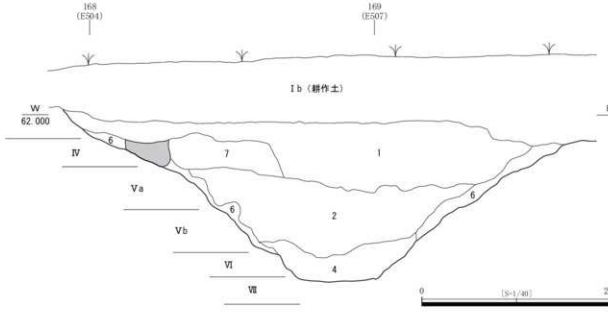
第 186 図　ＭＫⅡ－ 714　調査区全体図



1. 7.5YR 5/8　茶褐色土　　粘性なし、パサパサ、しまり部分的に弱い、ローム土主体で焼土粒10～20%、５～６cmの焼土ブロック含む。
2. 7.5YR 5/6　暗黄褐色土　粘性なし、しまり部分的に弱い、ローム土主体で、下部はブロック状、焼土粒・３～４cmの焼土ブロック少量含む。底面はガリガリしたロームブロック。
3. 7.5YR 5/6　暗黄褐色土　粘性なし、しまり部分的に弱い、ローム土主体、２～３mmの焼土粒含む。
4. 7.5YR 4/4　茶褐色土　　粘性なし、しまりあり、２～３mmの焼土粒含む。

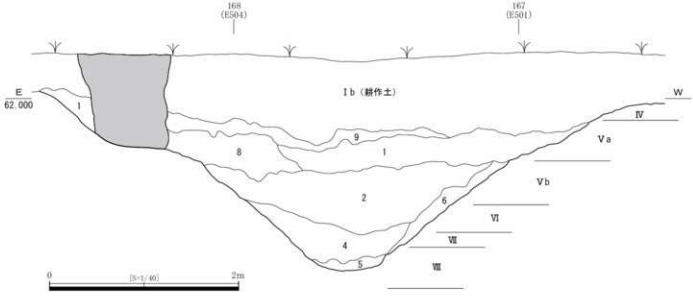
第 187 図　SX361 断面図

北壁土層断面図



1．10YR 3/2　黒褐色土　　粘性あり、しまりややなし。ローム粒・赤色スコリア含む。
2．10YR 3/3　暗褐色土　　粘性あり、しまりややなし。ローム粒・赤色スコリア多量、炭化物微量含む。
4．10YR 3/3　暗褐色土　　粘性あり、しまりやや良い。ローム粒・赤色スコリア少量、炭化物微量、Ⅲcブロックやや多量、ロームブロック少量含む。
5．10YR 3/4　暗褐色土　　粘性あり、しまり良い。ローム粒・赤色スコリア微量、Ⅲcブロック・ローム ブロック多量含む。
6．10YR 3/3　暗褐色土　　粘性あり、しまり良い。ローム粒・赤色スコリア微量、ローム ブロック多量含む。
7．10YR 3/3　暗褐色土　　粘性ややなし、しまりなし。ローム粒・ローム ブロック多量、炭化物微量含む。

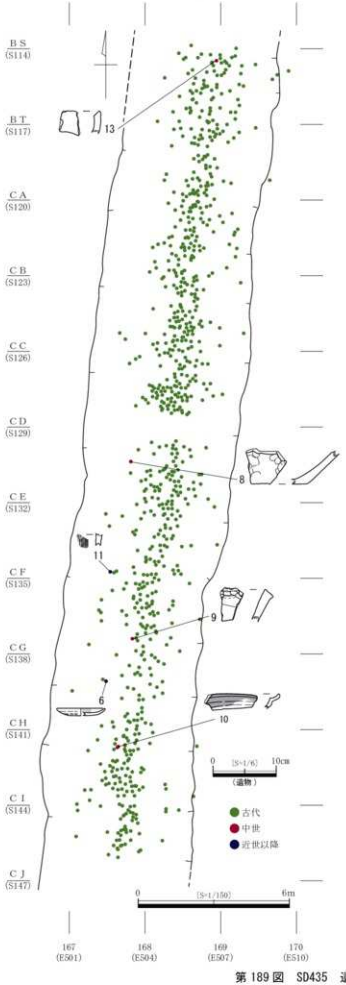
南壁土層断面図



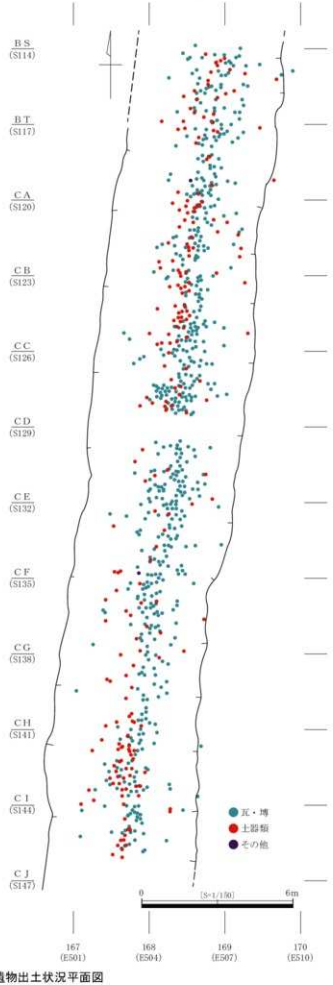
1．10YR 3/2　黒褐色土　　粘性あり、しまりややなし。ローム粒・赤色スコリア含む。
2．10YR 3/3　暗褐色土　　粘性あり、しまりややなし。ローム粒・赤色スコリア多量、炭化物微量含む。
4．10YR 3/3　暗褐色土　　粘性あり、しまりやや良い。ローム粒・赤色スコリア少量、炭化物微量、Ⅲcブロックやや多量、ロームブロック少量含む。
5．10YR 3/4　暗褐色土　　粘性あり、しまり良い。ローム粒・赤色スコリア微量、Ⅲcブロック・ローム ブロック多量含む。
6．10YR 3/3　暗褐色土　　粘性あり、しまり良い。ローム粒・赤色スコリア微量、ローム ブロック多量含む。
8．10YR 4/6　褐色土　　粘性なし、しまりなし。ローム粒・ローム ブロック多量含む。
9．10YR 3/3　暗褐色土　　粘性ややなし。部分的に硬質だが脆い。ローム粒やや多量、スコリア微量、硬質なⅢbブロック含む。上部に宝永の火山灰を部分的に薄く含む。

第188図　SD435断面図

時代別　遺物出土状況平面図

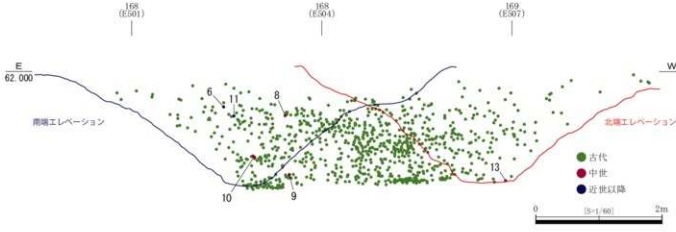


種別　遺物出土状況平面図

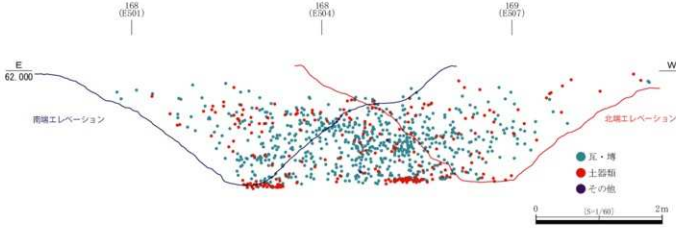


第 189 図　SD435　遺物出土状況平面図

時代別　遺物出土状況断面図



種別　遺物出土状況断面図



第 190 図　SD435　遺物出土状況断面図（南北見通し）

第 191 図　SD435 底部付近遺物出土状況（北から）

第 192 図　SD435 底部直上遺物出土状況（北から）

第 193 図　調査前風景（南から）

第 194 図　表土掘削状況（北西から）

第 195 図　SX361 検出状況（東から）

第 196 図　SX361 受熱部分検出状況（南から）

第 197 図　SX361 土層断面（西から）

第 198 図　SX361 土層断面（南から）

第 199 図　調査風景（北西から）

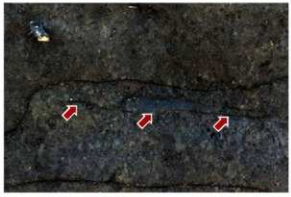
第 200 図　調査風景（南東から）

第 201 図　SD435　完掘全景（北から）

第 202 図　SD435　完掘全景（南から）

第 203 図　SD435　北壁断面（南から）

第 204 図　SD435　南壁断面（北から）



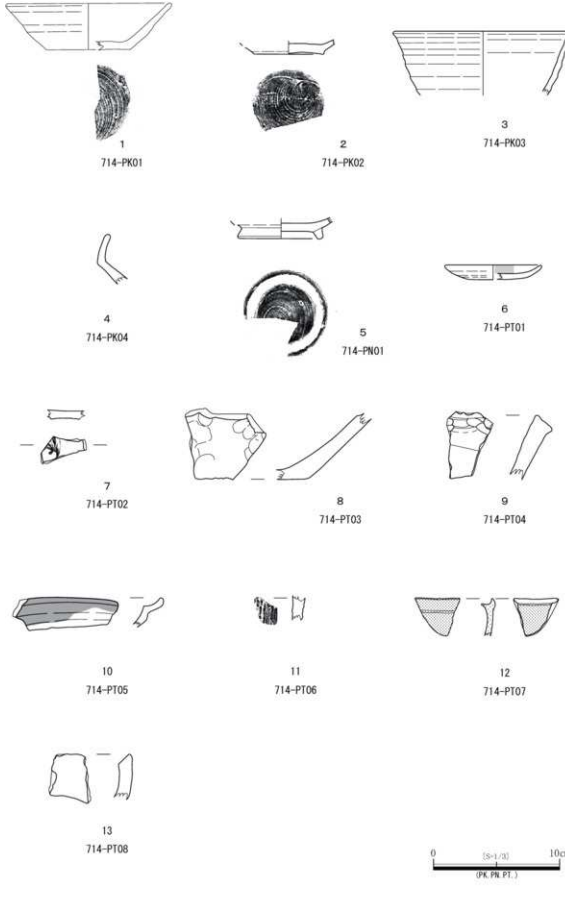
第 205 図　SD435 南壁宝永火山灰検出状況（北から）

第 206 図　動物遺存体出土状況（南から）

第 207 図　SD435 全景（北西から）

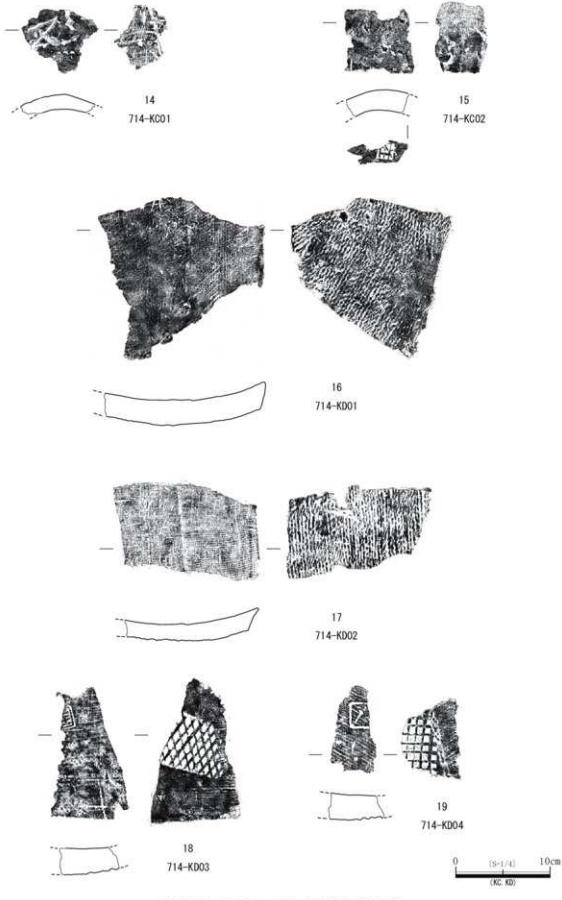
第 208 図　調査風景（南から）

第 209 図　SD435 底部の水漬き痕跡（西から）



第 210 図　ＭＫⅡ－ 714　出土遺物実測図１

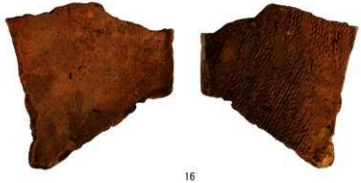
第 211 図　ＭＫⅡ－ 714　出土遺物写真１



第 212 図　ＭＫⅡ－ 714　出土遺物実測図２

14
714-KC01

15
714-KC02



16
714-KD01

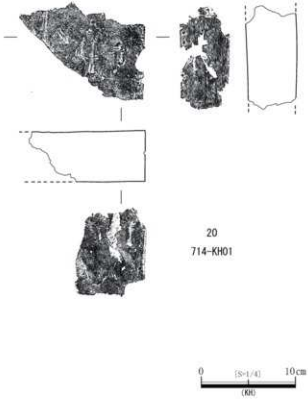
17
714-KD02

18
714-KD03

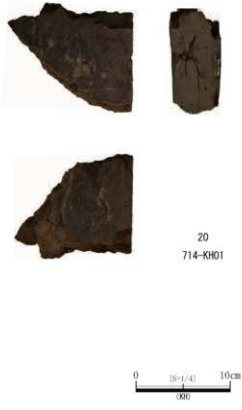
19
714-KD04

0　[S=1/4]　10cm
(KC KD)

第 213 図　ＭＫⅡ－ 714　出土遺物写真２



第 214 図　ＭＫⅡ－ 714　出土遺物実測図３



第 215 図　ＭＫⅡ－ 714　出土遺物写真３

714-KC01　不明ヘラ書き

714-KC02 「荏」

0　[S=1/1]　25mm

第 216 図　ＭＫⅡ－ 714　出土遺物文字記号集成写真１

714-KD01 「豊」？

714-KD02　不明ヘラ書き

714-KD03 「荏」

714-KD04 「入」

0　(S=1/1)　25mm

第217図　ＭＫⅡ－714　出土遺物文字記号集成写真２

第７表　ＭＫⅡ－714　遺物観察表１

ＭＫⅡ－714				歴史時代　土　器			
番号 遺物番号	種別 器種	出土 位置	口径 器高 底径 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	残量	備考
1 PK01	須恵器 坏	表土	((13.0)) 3.7 ((6.6))	体部は内湾気味に立ち上がる。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切をし、無調整。	口縁部～底部1/6	内外面：灰色7.5Y5/1。堅い。焼成普通。微砂粒微量、２mm大の角礫少量。
2 PK02	須恵器 坏	SD435	— (1.1) 5.5	底部の器肉は普通。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切をし、無調整。底部外面と見込みに火襷の痕跡（重ね焼き）。	底部4/5、全体の1/10	内外面：灰色5Y4/1。堅い。焼成普通。微砂粒・１mm大の角礫微量。胎土緻密。
3 PK03	須恵器 埦	SD435	((14.4)) (5.1) —	体部は内湾して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	ロクロ調整。	口縁部あり、全体の1/10	内外面：灰オリーブ色5Y5/2。堅い。焼成普通。微砂粒やや多量、２～４mmの角礫少量。
4 PK04	須恵器 短頸壺	表土	— (4.2) —	肩部は内傾し、頸部は屈曲してやや外傾する。	頸部内外面・肩部内面上部ヨコナデ。胴部内面ナデ。	口縁部小片	内外面：灰色N6/0。堅い。焼成普通。微砂粒少量、１～３mmの角礫微量。

第８表　ＭＫⅡ－714　遺物観察表２

ＭＫⅡ－714　歴史時代　土　器

番号 遺物番号	種別 器種	出土 位置	口径 器高 底径 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	残量	備考
5 PN01	灰釉陶器 皿類	SD435	— (2.7) 6.1	高台は低い三日月高台。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切をし、高台貼付。見込みに重ね焼きの痕跡。見込みの一部にオリーブ灰色の釉。	底部あり、全体の1/6	内外面：灰白色 5Y8/1。堅い。焼成普通。微砂粒微量。高台高 0.6 cm。
6 PT01	鉄釉 灯明皿	SD435	((7.5) 1.1 ((3.8))	底部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。	ロクロ調整後、底部外面から口縁部外面まで回転ヘラケズリ。内面ナデ。内面全面から外面口縁部にかけて茶褐色の鉄釉を施す。	口縁部～底部 1/4	瀬戸・美濃窯（18 世紀）。断面：灰黄色 2.5Y7/2。堅い。焼成普通。微砂粒微量。
7 PT02	染付 皿	表土	— (0.7) —	蛇の目高台を有する。	高台部は無釉。見込みに暗青灰色の呉須で、模様を施す。	底部小片	肥前(18 世紀)。断面:灰白色 7.5Y8/1。硬質。焼成良好。
8 PT03	常滑 片口鉢	SD435	— (5.2) —	底部から体部にかけて緩やかに立ち上がる。	体部外面は指頭圧痕が顕著。体部内面から見込みに研磨痕あり。	胴部～底部小片	常滑窯片口鉢Ⅱ類（14 ～ 15 世紀）。外面・断面：にぶい褐色 7.5YR5/3。堅い。焼成普通。微砂粒少量。1 ～ 2 mmの角礫少量。
9 PT04	常滑 片口鉢	SD435	— (5.1) —	口唇部は内外面から摘み上げて片口を形成し、内外に拡張する。	体部外面は指頭圧痕あり。体部内面に研磨痕あり。	口縁部小片	常滑窯片口鉢Ⅱ類 10 型式（14 ～ 15 世紀）。外面・断面：にぶい褐色 7.5YR5/3。堅い。焼成普通。微砂粒少量。1 ～ 2 mmの角礫少量。
10 PT05	鉄釉 折縁中皿	SD435	— (2.3) —	口縁部は屈曲させた後に内側に折り返す。	体部内外面・口縁部回転ナデ。口縁外面ににぶい赤褐色の鉄釉を施すが、全体的に剥落している。	口縁部小片	古瀬戸後期様式（14 ～ 15 世紀）。内外面：浅黄橙色 10YR8/3。やや軟らかい。焼成普通。
11 PT06	焼締 擂鉢	SD435	— (2.0) —	小片のため、不明。	体部内面に擂目を施す。	体部小片	明石・堺（18 世紀後半以降）。内外面：にぶい赤褐色 5YR5/4。堅い。焼成普通。微砂粒やや多量、1 ～ 4 mmの各礫少量。
12 PT07	灰釉 土瓶	表土	— (3.0) —	体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。口唇部内面に段を形成する。	ロクロ調整。口唇部を除く全面に刷毛塗りによる薄灰色の釉。	口縁部小片	瀬戸・美濃窯（19 世紀以降）。断面：灰白色 5Y7/2。堅い。焼成普通。
13 PT08	瓦質 火鉢	SD435	— (3.6) —	体部は緩やかに立ち上がり、口唇部に幅 1 cmほどの面取りを施す。	ロクロ調整の後、回転ナデ。	体部～口縁部小片	時期不明。断面：灰黄色 2.5Y6/2。やや軟らかい。焼成普通。微砂粒少量。

ＭＫⅡ－714　歴史時代　男　瓦

番号 遺物番号	出土 位置	狭端 広端 全長 (cm)	厚さ (cm)	成・整形の特徴						備考
				素材	凹面		凸面		端面	
					布目	特徴	叩き	特徴	特徴	
14 KC01	SD435	— — (8.1)	1.6	粘土 横紐	((18× 21))	一部ナデ。	—	全体ヨコナデ。ヘラ書き「足」ウあり。	—	無段。灰色 7.5Y5/1。堅い。焼成普通。微砂粒・1 ～ 3 mmの角礫やや多量。
15 KC02	SD435	— (6.6) (7.3)	2.2	粘土 横紐	24×21	広端縁ナデ。	—	全体指ナデ。	広端面ヘラケズリ。押印「荏」(荏原郡) あり。	無段。灰色 N5.5/1。堅い。焼成普通。微砂粒・1 ～ 8 mmの角礫微量。

ＭＫⅡ－714　歴史時代　女　瓦

番号 遺物番号	出土 位置	狭端 広端 全長 (cm)	厚さ (cm)	成・整形の特徴						備考
				素材	凹面		凸面		端面	
					布目	特徴	叩き	特徴	特徴	
16 KD01	SD435	— — (17.5)	2.8	—	20×20	布目を消すナデ。ヘラ書き「整」ウあり。	縄目 L11	縄目叩きの後、一部ナデ。	側端面ヘラケズリ。	にぶい黄色 10YR7/3。やや軟らかい。焼成普通。微砂粒・1 ～ 5 mmの角礫少量。白色針状物質やや多量。
17 KD02	SD435	— — (10.8)	1.7	粘土板	27×15	側端縁面取り。不明ヘラ書きあり。	縄目 L10	縄目叩き。	側端面ヘラケズリ。	捕獲作り？。黄灰色 2.5Y5/1。堅い。焼成普通。微砂粒やや多量、2 ～ 4 mmの角礫少量。
18 KD03	SD435	— (9.2) (15.2)	2.8	—	((18× 21))	布目を消すナデ。広端縁ヘラケズリ。押印「荏」(荏原郡) あり。	斜格子	斜格子叩きの後、一部ナデ。広端縁面取り。	広端面ヘラケズリ。	灰色 5Y5.5/1。堅い。焼成普通。微砂粒少量、1 ～ 8 mmの角礫微量。
19 KD04	SD435	— — (9.7)	2.7	粘土板	(27× 27))	糸切り痕あり。押印「入」(入間郡) あり。	正格子	正格子叩き。糸切り痕あり。	—	一枚作り。灰色 7.5Y5/1。微砂粒・1 ～ 4 mmの角礫・白色針状物質やや多量。南比企窯。

ＭＫⅡ－714　歴史時代　塼

番号 遺物番号	出土 位置	長辺長 (cm) 短辺長 (cm)	厚さ (cm)	素材	上面特徴	下面特徴	側面特徴	備考
20 KB01	SD435	(13.5) (11.9)	5.3	粘土板積み（5 枚？）	全体ナデ。	全体ナデ。	ヘラケズリ。一部ナデ。	褐灰色 10YR4/1。堅い。焼成普通。微砂粒やや多量、1 ～ 7 mmの角礫微量。白色針状物質少量。

第５節　羽根沢遺跡第７次調査

所在地	東恋ヶ窪一丁目280番地内（日立中央研究所構内）		
調査原因	仮設食堂棟建設	調査種別	発掘調査
調査費用	事業者負担	調査体制	委託
調査期間	平成27年６月８日～８月12日		
調査面積	410.97㎡	遺物箱数	１箱
検出遺構	SK9J・10J		
主な遺物	縄文時代の土器・石器、旧石器時代の石器		

第218図　Ｋ５－７　調査地位置図

【１．調査に至る経緯と経過】 日立中央研究所（以下、中研と略）構内で、純水設備付属建屋建設に伴う恋ヶ窪遺跡第94次調査を行っていた平成27年２月25日に、中研より市教委へ、記念館北側で仮設食堂建設にかかる埋蔵文化財の取扱いについて照会が寄せられた。当該地は羽根沢遺跡（市№５遺跡）に該当するため､設計の深度によっては発掘調査が必要となることを市教委から中研へ伝えた。その後、４月17日付で国分寺市まちづくり条例に基づく開発基本計画書が中研より市所管部局へ、続く５月１日付で文化財保護法第93条第１項に基づく届出が中研より市教委宛に提出された（国教教ふ収第115号）。建物の設計図面は建築面積848.2㎡の地上１階建てであったが、建物外周に付設する地中梁とコンクリート製基礎フーチングが、それぞれ現況地表面より0.9ｍおよび1.6ｍ程の掘削を伴う計画で、付近の発掘調査結果から遺跡に抵触することが想定されたため、同月12日に中研と市教委は埋蔵文化財協議書をもって、建築工事に先立つ事前の発掘調査を実施する方向で調整を図り、15日付で市教委は副申を添えて都教委宛に届出を進達した。

その後、20日に経費は事業者が負担して調査を国分寺市遺跡調査会（以下、調査会と略）へ委託する方向で中研と市教委で協議を行い、続く27日付で中研・調査会間で発掘調査契約書を締結するとともに（27国道調第23号）､中研から市教委へ出土品権利放棄承諾書が提出された（国教教ふ収第221号）。なお、都教委から中研・市教委宛には29日付教地管理第498号をもって、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の通知が示されている。

発掘調査は６月５日に資材等を現地に搬入し、８日から重機による表土掘削を開始したが、着手後間もなく、中研より設計ＧＬを当初計画から約60㎝高くすることが伝えられ、調査で発生する土量が予定より少なくことが見込まれた。また、建物北西側には汚水桝の設置工事が付加され、当該部分は2.0ｍを超える掘削計画であったため、調査対象範囲に含めることとし、最終的には発掘調査面積は410.97㎡にのぼった。現地での作業は拡張部分も含めて８月12日まで実施し、その後引き続き工事へ移行するため埋戻しはせずに、そのまま施工者へ現地の引き渡しを行った（屋外作業は実働42日間）。調査後は、９月３日付で埋蔵文化財保管証・埋蔵物発見の手続きを行い（国教教ふ発第97号）、８日付で小金井警察署より市教委へ埋蔵物預り書が（国教教ふ収第563号）、29日付27教地管理第498号の

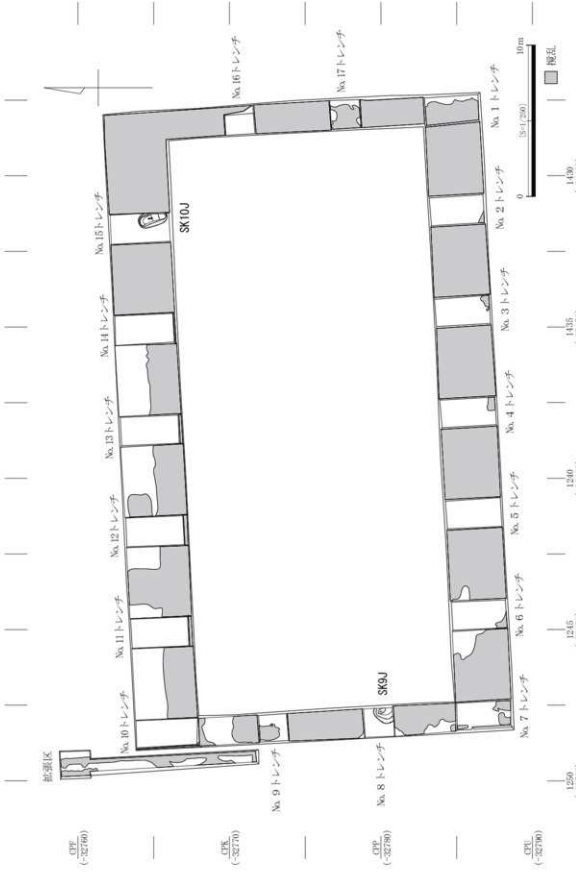
２にて都教委より市教委へ埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属にかかる通知がそれぞれ寄せられた。さらに翌 30 日には、中研と調査会間で変更契約書を交わし、土量・遺構・遺物数が想定に満たなかったことによる減額清算を行うこととなった。

【２．検出された遺構と出土遺物】 調査では、表土より地中梁敷設部分は 70cm、基礎フーチング敷設部分は 1.0 m、汚水桝設置部分は 2.0 mまでの深さまでを掘削した。基礎フーチング敷設部分は、建物南東隅を基準に時計回りに№1～17 のトレンチ番号を付与し、このうち№8・15 トレンチ内からは、Ⅲc 層上面で縄文時代の土坑が２基確認された（SK9J・SK10J）。SK9J は南・東側が調査範囲外のため全形を検出していないが、およそ径 1.5 mほどの円形プランを呈し、深さは 40cm を測る。坑底の北端に 10cm 程の窪みを有し、壁は緩やかに立ち上がる。SK10J も東側が調査範囲外に及んでいるが、長軸 1.9 m×短軸 1.0 m×深さ 1.0 mを測り、平面は長方形を呈する落とし穴状の土坑で、底面には逆茂木を据えたと思われる小ピットが２基確認された。本土坑覆土上面から第 241 図 18 の打製石斧が１点出土している。遺物は№2・6・15 トレンチを中心に出土したが、地中梁敷設部分は、基本的に表土中もしくは縄文時代の遺物包含層のⅢb 層上面までの掘削に終わり、遺構は検出されなかったが、Ⅲb 層上面で７点の遺物が出土した。なお、汚水桝設置部分は、ローム層のⅥ・Ⅶ層までを掘り下げたが、Ⅴ層以上は既設埋設管等の影響もあって、遺構・遺物は確認されなかった。

遺物は全体で 33 点出土し、内訳は縄文時代中期の土器・石器、および旧石器時代～縄文時代草創期の可能性のある石器類で、以下、図化した遺物を中心に説明を加える。

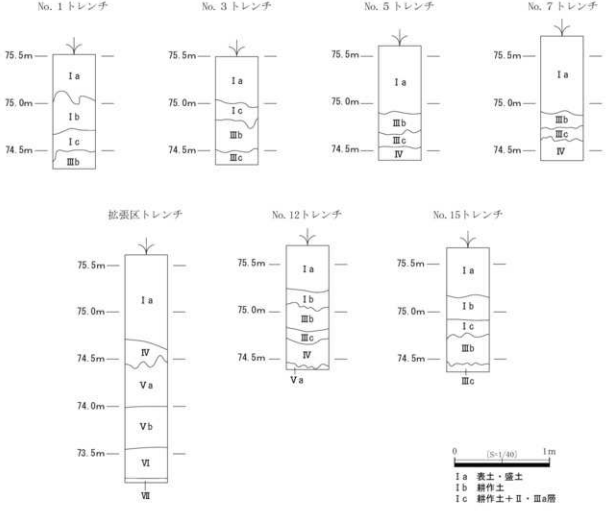
１～15 は土器で、１と２はそれぞれ中期中葉の阿玉台式および中期前葉の絡沢式に比定される深鉢である。１は胎土に金雲母を多量に含み、口縁は羽状を呈し２条の沈線で区画を施す。２は横位に刺突文を巡らす。３～15 は中期後葉の加曾利Ｅ式土器で、３～５はＥ１式、６～15 はＥ３式にそれぞれ比定される。３は口縁部隆帯の脇を沈線でなぞり、４・５は撚糸を施す、いずれも深鉢と思われる。６・８・11 はＵ字状の懸垂文、７・10・12・14 は条線、13 は口縁部に楕円形の区画を設けて内側を沈線で充填する文様構成をとる。12・14 は浅鉢で、それ以外は深鉢であろう。15 は両側に耳をもつ壺器形を呈している。３・６～８が表土、それ以外はⅢ層中から出土した。16 は黒曜石製の石鏃で、両面調整を施し、表裏面に摩耗痕が認められる。抉りは浅い逆Ｖ字状を形成し、全体的に小形で先端部と脚部の一部を欠損している。Ⅲ層からの出土で、石材は神津島産の可能性がある。

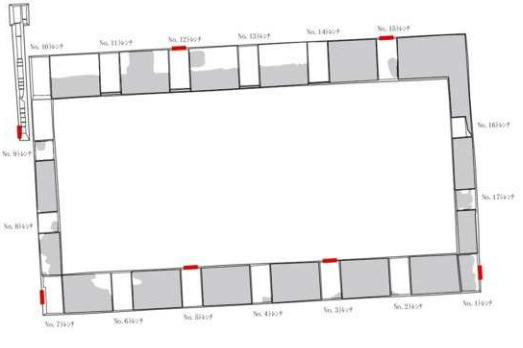
17・18 は旧石器時代から縄文時代草創期の所産の可能性がある石器である。17 は、両面調整を施す硬質頁岩製の槍先型尖頭器である。基部を欠損しているが、下膨れで鋭利な尖頭部を作り、丁寧な剥離で断面は薄レンズ状を呈する。共伴する土器は無くⅢ層からの出土だが、縄文時代草創期の所産と思われる。18 は緑色凝灰岩製の打製石斧である。礫皮面を表面に残し、表裏面は中心部方向に両面調整を施す。剥離は表面は急角度剥離を、裏面は大きな平坦剥離をそれぞれ行い、断面形は歪んだ菱形を呈している。SK10J 覆土中からの出土だが、本来は立川ローム第Ⅹ層に含まれる旧石器である可能性が高いと思われる。



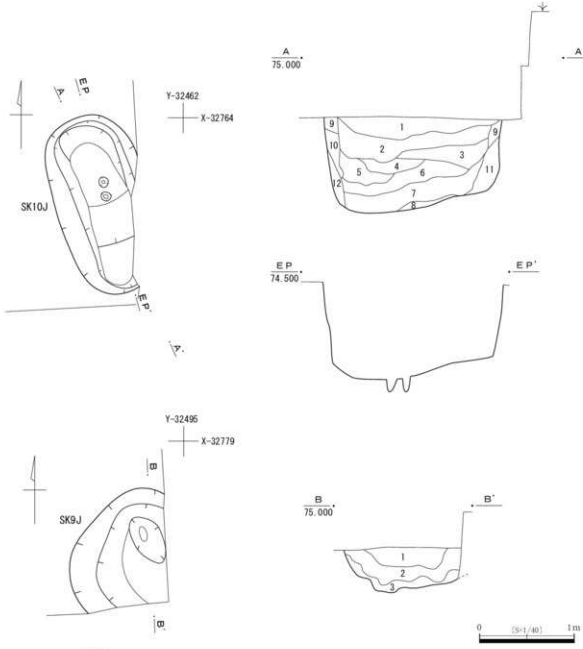
第219図　Ｋ５－７　調査区全体図

土層柱状図





第 220 図　Ｋ５－７　土層柱状図



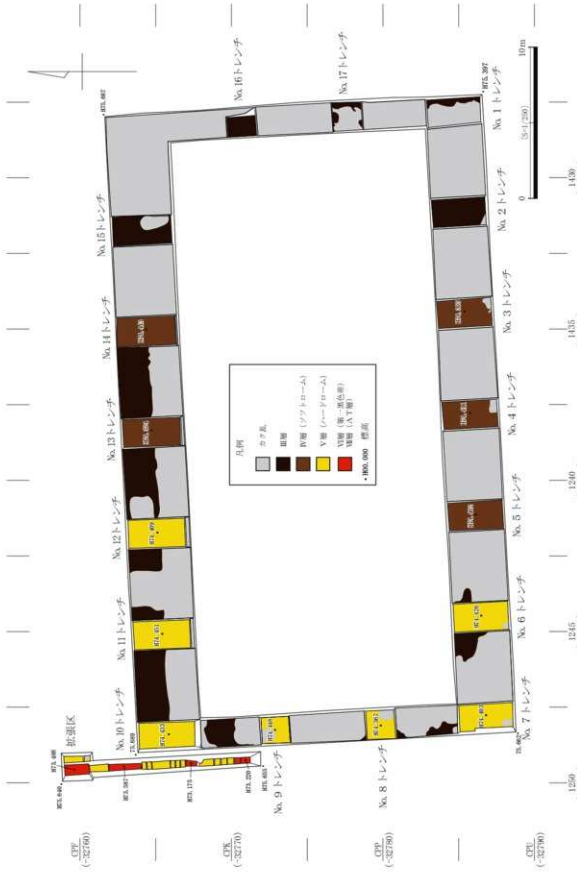
SK9J

1. 10YR3/3　暗褐色土　　粘性しまりあり、ローム粒微量、赤色スコリア多く含む。
2. 10YR4/4　褐色土　　粘性しまりあり、ローム粒・ローム土多く、赤色スコリアやや多く含む。
3. 10YR5/6　黄褐色土　　粘性ありしまりややなし、ローム土・ロームブロック多量含む。

SK10J

1. 10YR2/2　黒褐色土　粘性しまりあり、ローム粒微量、赤色スコリア少量含む。
2. 10YR2/3　黒褐色土　粘性しまりあり、ローム粒やや多く、赤色スコリア多く含む。
3. 10YR3/3　暗褐色土　粘性しまりあり、ローム粒・赤色スコリア多量含む。
4. 10YR4/6　褐色土　粘性しまりあり、ローム粒・赤色スコリア多く、ソフトロームブロック多量含む。
5. 10YR3/3　暗褐色土　粘性しまりあり、ローム粒・赤色スコリアややを多く、黒色スコリア・ソフトロームブロック少量含む。
6. 10YR4/6　褐色土　粘性しまりあり、ローム粒・赤色スコリアややを多く、ソフトロームブロック・ロームブロック多く含む。
7. 10YR3/2　黒褐色土　粘性しまりあり、ローム粒・赤色スコリア多量、黒色スコリア少量含む。
8. 10YR5/8　黄褐色土　粘性しまりあり、ローム粒ややを多く、ロームブロック多量含む。
9. 10YR5/6　黄褐色土　粘性しまりあり、Ⅲcブロック
10. 10YR4/4　褐色土　粘性ありしまりややなし、ローム粒・赤色スコリア・黒色スコリア少量、ソフトロームブロックやや多く含む。
11. 10YR5/8　黄褐色土　粘性ありしまりややなし、ローム粒・赤色スコリア・黒色スコリア少量、ソフトロームブロックやや多く含む。
12. 10YR5/6　黄褐色土　粘性ありしまりややなし、赤色スコリア微量、ソフトロームブロック・ロームブロック多量含む。

第 221 図　SK9J・10J　平面・断面図



第 222 図　Ｋ５－７　旧石器時代掘削深度図

第 223 図　調査前風景（南から）

第 224 図　作業風景（西から）

第 225 図　北トレンチ全景（東から）

第 226 図　東トレンチ全景（東から）

第 227 図　拡張区ブレ全景（北から）

第 228 図　No.2 トレンチ縄文遺物出土状況（西から）

第229図　No.15 トレンチ縄文遺物出土状況（南から）

第 230 図　作業風景（北から）

第 231 図　№.8 トレンチ縄文全景（北から）

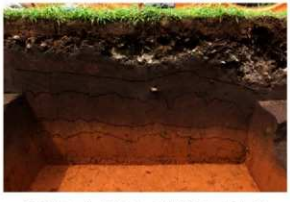
第 232 図　SK9J 断面（西から）

第 233 図　SK9J 完掘全景（西から）

第 234 図　№.15 トレンチ縄文全景（南から）

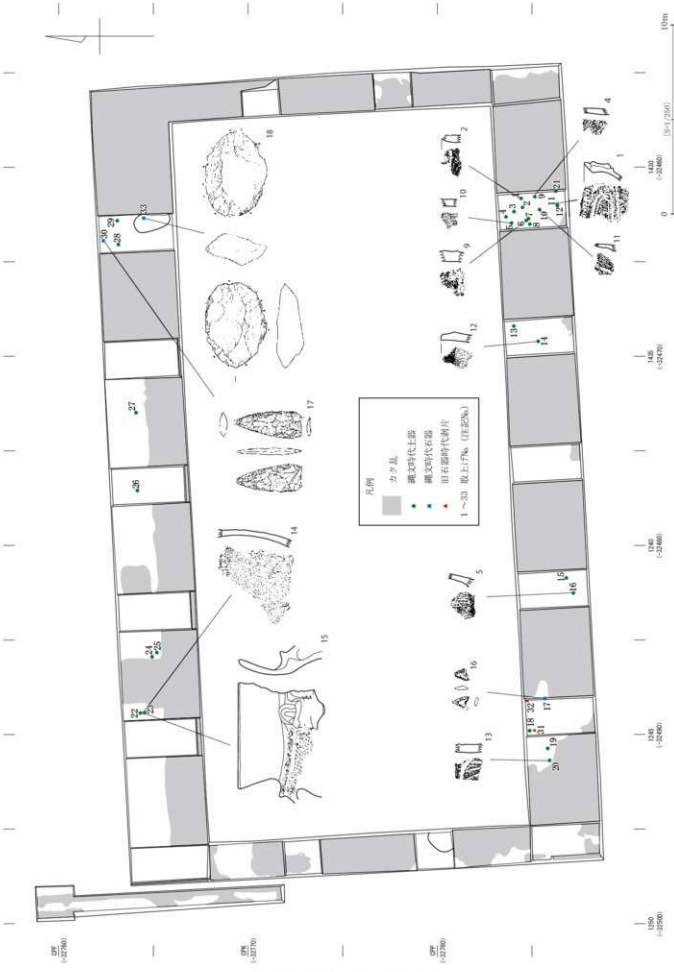
第 235 図　SK10J 断面（西から）

第 236 図　SK10J 完掘全景（北から）

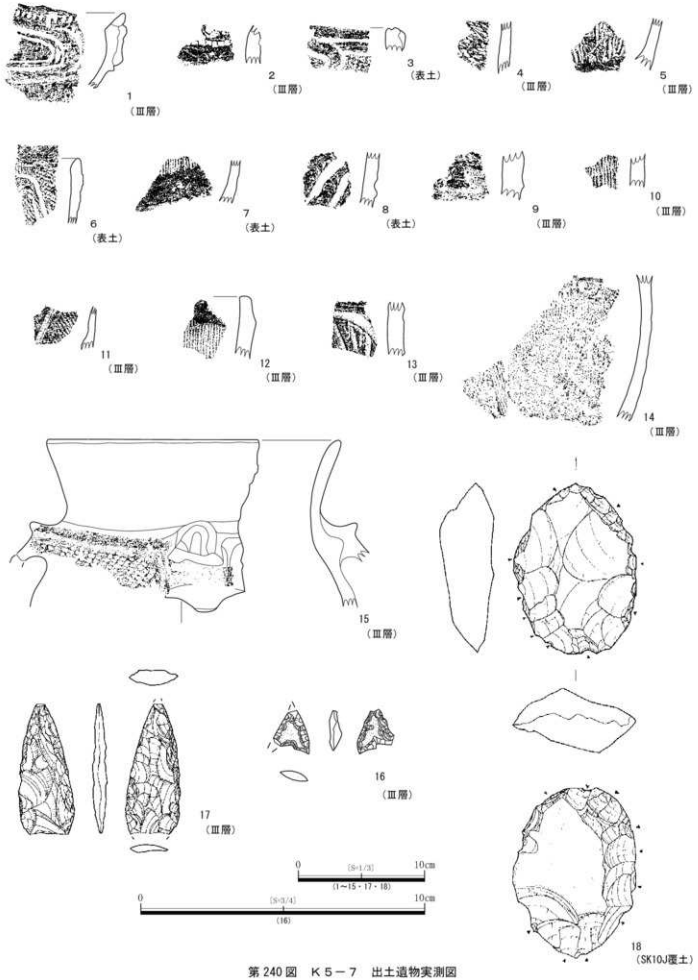


第 237 図　№.12 トレンチ北壁断面（南から）

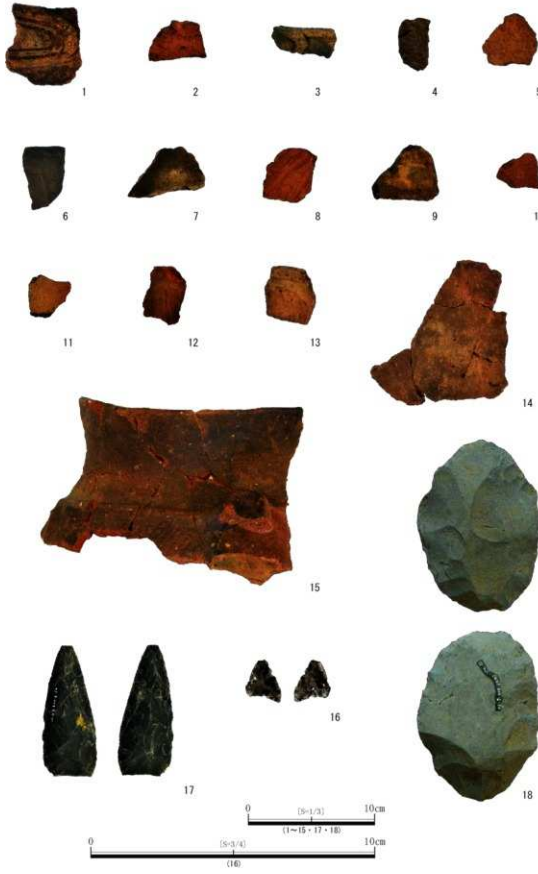
第 238 図　№.6 プレ遺物出土及び北壁断面(南から)



第 239 図　Ｋ５－７　遺物出土図



第 240 図　Ｋ５－７　出土遺物実測図



第 241 図　Ｋ５－７　出土遺物写真

第３章　総　括

平成 27 年度に武蔵国分寺跡（№.10・19 遺跡）と羽根沢遺跡（№.5 遺跡）において、５地点の発掘調査を実施した。武蔵国分寺跡は、宅地造成、土地造成、集合住宅建設に伴う発掘である。

武蔵国分寺跡第 706 次調査区は、武蔵国分僧寺の中心から西へ約 250 m に位置し、東山道武蔵路が縦走する僧寺と尼寺の中間地域に該当する。調査面積は 194.90 ㎡で、検出された遺構は、道路状遺構（東山道武蔵路）１条、溝４条、竪穴住居４軒、不明遺構２基であった。遺物は、遺構や表土より土師器・須恵器などの古代の土器、中近世陶磁器（舶載青磁、渥美甕）、鉄滓、陶硯、石製品、縄文土器である。

東山道武蔵路は、両側側溝を確認し、心々間の距離は 11.8 m であった。道路の主軸は武蔵国分僧寺中軸線北に対して 9°　04′　35″ 東偏している。道路遺構で特筆されるのは、路面の中央部分で確認された硬化面である。この硬化面は溝状に掘り込んだ内部を固く締めて形成されたもので、他の地点で確認されている、いわゆる波板状圧痕に類似しており、路面を補修・強化した痕跡と想定することができる。

出土した遺物で特徴的なのものは、中世の青磁碗と温石をはじめとする遺物の存在である。僧尼寺中間地点での中世前期における土地利用を考える上で、貴重な手がかりとなった。

同じく東山道武蔵路周辺で行われた第 707 次調査では、620.14 ㎡ の調査区から土坑１基、縄文時代の土坑３基、近代の地下防空壕が検出された。調査区は、東山道武蔵路の西側、武蔵国分寺跡の北方地区に該当し、僧寺伽藍中心からは北へ約 415 m、西へ約 205 m に位置する。武蔵路を挟んだ東側で実施された第 431・446・481・500・506・507 次調査では、９世紀後半から 11 世紀中葉にかけて、100 軒（棟）近くの建物群が形成されていたことが明らかとなっている。一方で、調査区の南側で実施された第 616・645 次調査では、検出された建物跡は 12 軒（棟）と少なく、遺構が希薄な地域であることが知られていた。本調査区で検出された古代遺構も土坑１基と少なく、武蔵路の西側一帯におけるこれまでの傾向を補則する調査結果となった。縄文時代の遺構については、土坑３基の内、１基は落とし穴状土坑である。遺物包含層や表土から出土した縄文土器は中期の特徴を示すもので、石器は尖頭器、石鏃、打製石斧、スタンプ形石器が出土している。多喜窪遺跡の集落の中心からは北へやや離れているが、国分寺崖線上に展開した縄文中期の活動の場であることが明らかとなった。

武蔵国分寺跡第 709 次調査区は、武蔵国分寺跡北方地区の北東部に位置する。僧寺伽藍中心からは北へ約 405 m、東へ約 205 m にあり、先に触れた第 707 次調査と僧寺伽藍中軸線を挟んで東に対峙する位置にあたる。本調査地周辺では、平安時代の掘立柱建物、竪穴住居、溝、土坑、火葬墓、地下式横穴墓などの遺構がみられる地域である。本調査の面積が 30.49 ㎡と小規模であったこともあり、小穴６基の検出にとどまったが、当該地域内における遺構の検出率に照らせば、平均的な数と言える。これまでの周辺調査の結果を考慮すると、調査区南方約 220 m にある国分寺崖線から北へ向かうにつれて遺構が徐々に希薄になり、調査区北方を東西に走る現在の多喜窪通りあたりから、さら減少する傾向が看取される。北に向かって希薄になる理由は国分寺崖線下の湧水に端を発する水の流れが、古代における集落の形成域と密接に関わっていたことが要因としてあげられる。

武蔵国分寺跡第 714 次調査で検出された大きな溝は、武蔵国分寺周辺における土地利用を考えるうえで重要な発見となった。調査区（面積 271.73 ㎡）は、僧寺伽藍中心より東へ約 500 m、南へ約 120 m に位置し、寺院地東辺区画溝より東へ約 60 m の地点にあたる。検出された溝の規模は、現状で上端 5.6 ～ 6.2 m、深さは地表面より約 2.1 ～ 2.3 m、確認面からは約 1.8 m あることが約 33 m に渡って確認された。溝の断面形状は、約 90 ～ 100 度の逆台形で、底部には幅約 50 ～ 80 ㎝の平坦部があり、水漬きによるローム層の酸化が認められた。溝の覆土から出土した遺物は、土器、瓦、陶磁器など 901 点で、多くは奈良・平安時代の所産であったが、14 ～ 15 世紀の常滑窯の片口鉢Ⅱ類や古瀬戸後期様式の鉄釉折縁中皿、および瓦質土器、18 世紀の明石・堺産の焼締擂鉢や瀬戸・美濃窯の鉄釉灯明皿等の中近世の遺物も出土している。覆土中層で確認された宝永４年（1707）の富士火山灰の存在により、その頃には大半が埋没していたと考えられるこの溝は、遺物の出土状況から中世後期の所産である可能性が高い。

近隣の調査区では、第 35・136 次調査で北へ約 80 m の位置まで延長が確認されている。また、南へ約 600 m の府中市域でも一連の溝と思われる遺構と並行する道路跡が検出され、出土遺物の特徴から溝の年代を 15　世紀以降、中世後半の所産と想定している。溝の性格については、起点・終点など不明な点が多く今後も検証を重ねる必要があるが、市内で中世の大型の溝が確認されたことは、遺跡の性格や国府・国分寺間一帯の土地利用を考える上で大きな収穫となった。今後も周辺の調査により資料を追加し、検証を重ねていくことが肝要である。

羽根沢遺跡では、これまでに遺跡の南東部で実施した第２次調査で屋外埋甕３基、集積４基、土坑６基、小穴 64 基が確認されており、恋ヶ窪遺跡第 12 次調査の遺構分布の傾向と類似することから、集落内における墓域の可能性が指摘されていた（国分寺市遺跡調査会 1992）。また遺跡の北部西端で行われた第５次調査では、小穴のみが 23 基確認されており、遺跡の北側は遺構が希薄であることも確認されている。今回実施した第７次調査は、遺跡の中央部東側、地形的には台地の縁辺に位置し、調査区の東側はすぐに急峻なさんや谷へと続いている。本調査区は撹乱が多かったためか、410.97 ㎡の調査面積に対し、検出された遺構は土坑２基のみであった。しかし、遺物包含層からの遺物の出土も少ないことから、もともと遺構密度が低い地区と想定される。先に述べた第２次の調査区は南へ約 200 m の位置とやや離れており、北側が薄く、南側が濃いというこれまでの遺構検出の傾向を補完するものとなった。

本調査で注目されるのは、SK10J 土坑の覆土から出土した打製石斧である。石器製作の技法の特徴からは立川ローム第Ⅹ層に含まれる旧石器時代のものと想定された。対岸の恋ヶ窪東遺跡でも第 22 次調査で旧石器時代の石器約 7,000 点、礫約 3,800 点が出土しており、さんや谷の両岸台地上の旧石器時代の活動を知る上で今回の発見は貴重な資料となった。羽根沢遺跡は、遺跡全体に比べてこれまでの調査範囲は極めて限定的であったが、平成 27・28 年度には、羽根沢遺跡の北側を中心に大型開発に伴う調査（第６・８次調査）が実施されており、調査成果が注目される。今後も調査を重ねるとともに、隣接する周辺遺跡の情報を分析し、集落の中心地の把握や遺跡の広がりについて検討する必要があろう。

【引用・参考文献】

武蔵国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会 1979『武蔵国分寺遺跡調査会年報 1974　武蔵国分寺跡』

国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 1988『武蔵国分寺跡発掘調査概報ＸⅡ－昭和 50 ～ 53 年度公共下水道面整備に伴う調査－』

国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会 1982『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報　Ⅶ－佐藤国分寺共同住宅建設に伴う調査－』

滝口　宏「地と人と」『国分寺市史　上巻』国分寺市史編さん委員会　1986

国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 1989『武蔵国分寺跡発掘調査概報ＸⅣ－昭和 52 ～ 57 年度尼寺々域確認調査－』

国分寺市遺跡調査会 1992『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅵ－日立中央研究所研究棟・食堂・プール更衣室建設工事に伴う調査－』

国分寺市遺跡調査会 1999『武蔵国分寺跡発掘調査概報ＸＸⅣ－北方地区・三菱地所㈱共同住宅建設工事に伴う発掘調査－』

府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 1999『武蔵国府関連遺跡調査報告 25・武蔵国分寺跡調査報告 3』府中市埋蔵文化財調査報告第 25 集

国分寺市遺跡調査会 2002『武蔵国分寺跡発掘調査概報 26 －北方地区・平成 8 ～ 10 年度西国分寺土地区画整理事業及び泉町公園工事に伴う調査－』

国分寺市遺跡調査会 2003『武蔵国分寺跡発掘調査概報 29 －北方地区・平成 11 ～ 13 年度西国分寺地区土地開発事業及び泉町公園事業に伴う調査－』

江坂輝彌・芹沢長介・坂詰秀一編 2005『新日本考古学小辞典』ニュー・サイエンス社

国分寺市遺跡調査会 2010『武蔵国分寺跡発掘調査概報 36 －北方地区・(仮称)「旧国分寺市立第四小学校跡地土地利用計画」に伴う調査－』

深澤靖幸 2012「ムダ堀に関する覚書」『府中市郷土の森博物館紀要第 25 号』

国分寺市・国分寺市教育委員会 2015『市制施行 50 周年記念　国分寺市の今昔』

国分寺市教育委員会 2015『平成 25 年度国分寺市埋蔵文化財調査年報』

国分寺市教育委員会 2016『平成 26 年度国分寺市埋蔵文化財調査年報』

国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会 2016『東山道武蔵路発掘調査概報Ⅱ－保存管理計画に基づく学術調査－』

株式会社日立製作所中央研究所・国分寺市遺跡調査会 2016『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅸ　第 94 次調査－日立製作所中央研究所構内純水設備付属建屋建設に伴う調査－』

増井有真 2016「東山道武蔵路と武蔵国分寺」『考古学の諸相 Ⅳ』坂詰秀一先生傘寿記念論文集

国分寺市教育委員会 2017A『古代道路を掘る－東山道武蔵路の調査成果と保存活用－』

国分寺市教育委員会 2017B『平成 27 年度国分寺市埋蔵文化財調査年報』

報告書抄録

ふ り が な	へいせい27ねんど　こくぶんじしまいぞうぶんかざいちょうがいほう
書　　名	平成27年度　国分寺市埋蔵文化財調査概報
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	坂誥秀一　　増井有真　　依田亮一
編 集 機 関	国分寺市遺跡調査団（団長：坂誥秀一）
所　在　地	〒185-0023 東京都国分寺西元町1-13- 6　武蔵国分寺跡資料館附属棟内 TEL 042-323-3580
発行年月日	2017年3月31日
規格／部数	A4版横組1段　46文字×34行　126頁／300部
資料の保存 問い合わせ先	国分寺市教育委員会　教育部　ふるさと文化財課 〒185-0023　東京都国分寺西元町1-13-10　武蔵国分寺跡資料館内 TEL 042-300-0073　FAX 042-300-0091　E-mail bunkazai@city.kokubunji.tokyo.jp

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
むさしこくぶんじいせきだいしちひゃくろくじしちょうさほか 武蔵国分寺跡第706次調査他3	とうきょうと 東京都 こくぶんじし 国分寺市 にしもとまち 西元町 ・ひがしもとまち ・東元町	13-214	10・19	35° 41′ 30.06″ 他	139° 28′ 08.15″ 他	20150401 ～ 20160219	合計 1117.26	宅地造成 集合住宅建設 土地造成
はねざわいせきだいしちじちょうさ 羽根沢遺跡第7次調査	とうきょうと 東京都 こくぶんじし 国分寺市 ひがしこいがくぼ 東恋ヶ窪	13-214	5	35° 42′ 14.80″	139° 28′ 28.08″	20150608 ～ 20150812	合計 410.97	仮設食堂棟建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
武蔵国分寺跡	集落跡 寺院跡 道路跡	奈良・平安時代 中世 近世 縄文時代	道路跡1条 溝5条 土坑1基 竪穴住居4軒 不明遺構3基 小穴6基 地下防空壕1基 土坑4基 小穴15基	土師器、須恵器、土師質土器、灰釉陶器、緑釉陶器、青磁、中近世陶磁器、瓦、塼、鉄滓、陶硯、石製品 縄文土器、石器	東山道武蔵路の東西側溝と路面補修の痕跡を検出。道路沿いに構築された竪穴住居を検出。周辺からは中世前期の遺物も出土。 府中市域へと続く南北方向の中世後期の大規模な溝を確認。
羽根沢遺跡	集落跡	縄文時代	土坑2基	縄文土器、石器 旧石器時代石器	草創期の槍先型尖頭器と立川ロームX層出土の可能性がある大型打製石斧が出土。

要　　約	平成27年度に国分寺市内で行われた宅地造成、集合住宅建設、土地造成、仮設食堂棟建設に伴う発掘調査計2遺跡、5地点についてまとめた報告書。

平成 27 年度 国分寺市埋蔵文化財調査概報

発行日　平成 29 年（2017）3 月 31 日
編　集　国分寺市遺跡調査団
〒 185-0023 東京都国分寺西元町 1 -13- 6
（武蔵国分寺跡資料館附属棟内）
発　行　国分寺市遺跡調査会
印　刷　株式会社アトミ

©Kokubunji City Board of Education 2017. Printed in Japan

表　紙　アートポスト　菊版　125kg
本　文　マットコート　A判　57.5kg

令和４年（2022）８月16日　デジタル版作成